

考古圖彙

二



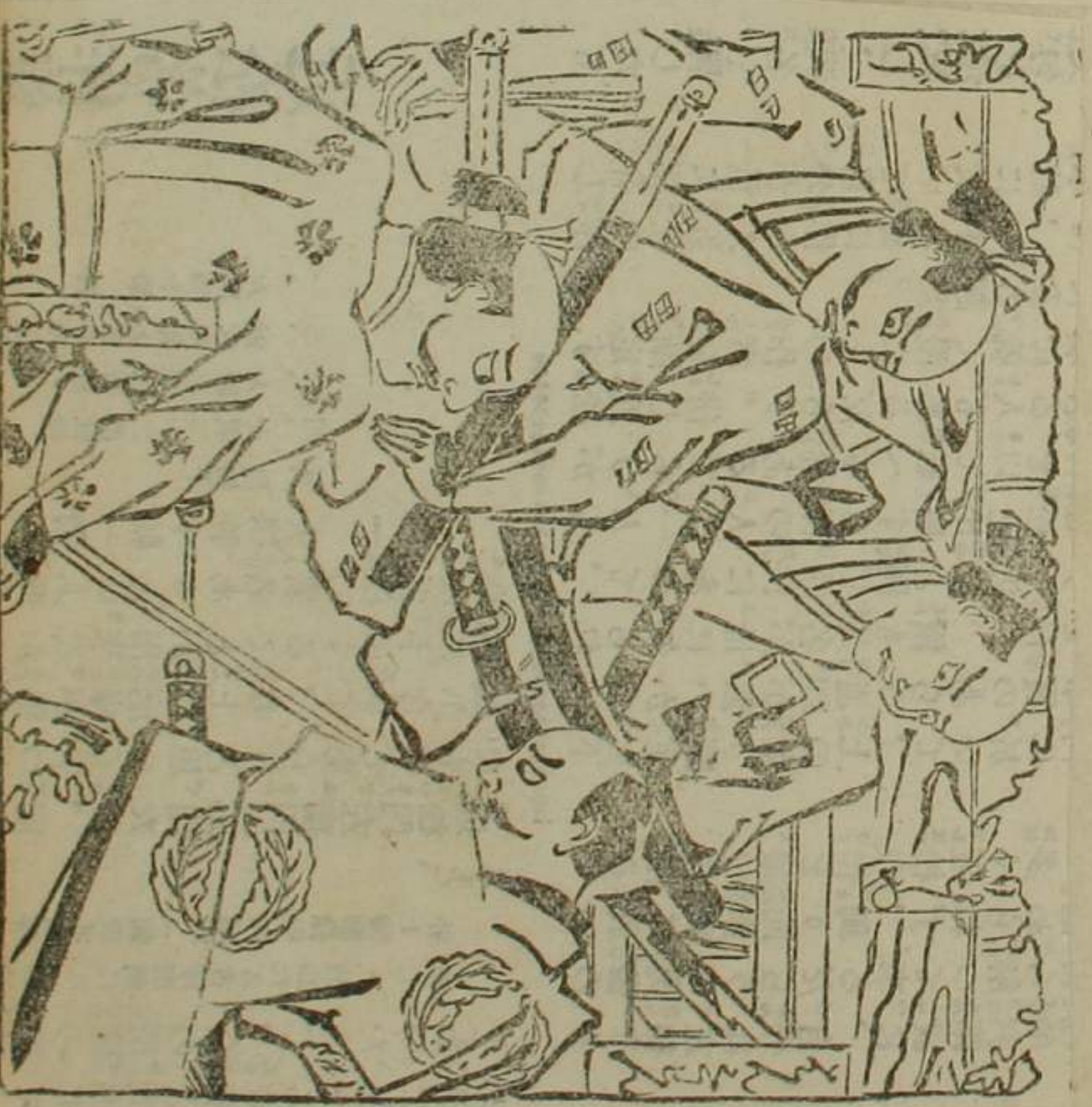
4多1
1392
2







先帝御真記



金平本の写本

故關特勤碑

彼蒼者天罔不覆讎天人相合寔寓大同以其氣隔陰陽是用別爲君長彼君長者本夏_同因_氏裔也首自中國雄飛北荒來朝甘泉願保光祿則愚好之深舊矣洎載文教施於八方武功成於一德彼蒼變故相革榮號迭稱終能休_釋修邊貢爰逮朕躬結爲父子使寇虐不作弓矢戰鬪爾無我虞我無爾詐邊鄙之不賴歟君諱闕特勤骨咄祿可汗之次子今必伽可汗之令弟也孝友聞於遠方威

斯豈由曾祖伊地米施匄積厚德於上而身克終之祖骨咄祿頡斤行深仁於下而子以生此賢也故能承順友愛成輔規略北庭眩靈之境西隣處月之郊尊襟梨之受屠者之寵任以親我有唐也我是用嘉稱誠績大開恩信而遙圖不騫促景俄盡永言悼疚于朕心且特勤可汗之弟也可汗猶朕之子也父子之義旣在敦崇兄弟之親得無連類俱爲子焉再感深情是用故製作豐碑發揮遐使千古之下休_光日新詞曰

沙塞之國丁寧之鄉雄武鬱起于爾先王爾君克長載赫殊方爾道克順謀親我唐孰謂若人罔保延長高碑山立垂裕無疆

大唐開元廿年歲次壬申十月辛丑朔七日丁未建

東大寺獻物帳

韻子昂云吁歎書藏書良
非易更善觀書者滌手焚
香拂塵淨几勿捲腦勿折
角勿以爪侵字勿以唾揭
幅勿以夾刺勿以他物隨
損隨修隨開隨掩後更得
吾書者并奉贈此法

大阪 臨濟堂藏



子孫永保
靈煙家
藏書記

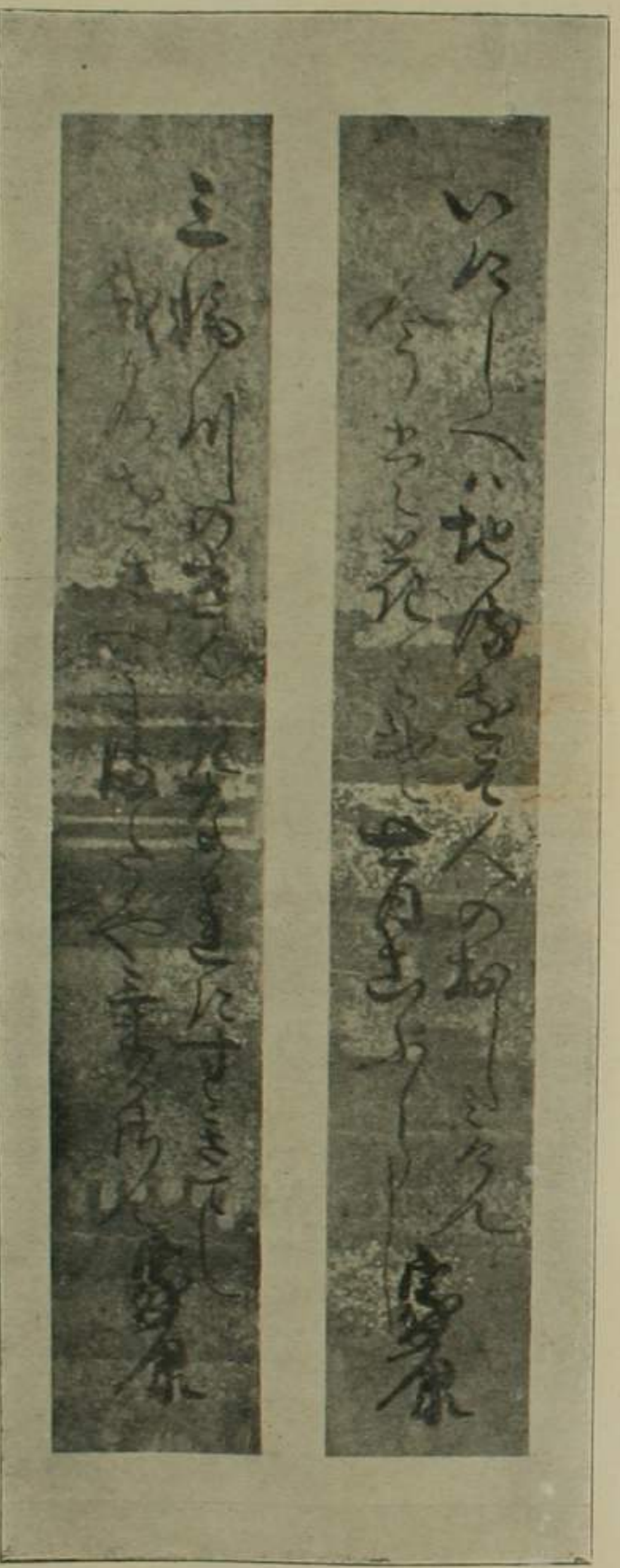
白雲書庫



華嚴經

水経

十金



(子爵小笠原長生氏所蔵)

徳川家康公親筆

源持資法躰像

藏未詳



寫實の圖海るたり入被を樂血の長艦城赤元阪故



名為不成不據種說或唯依彼能生現用立為聖性以
相翻故不令唯種異生成聖若唯現說聖者无漏不起
現時應非異生亦非聖者若依此說三乘之性見道已
前亦是唯成異生性句二乘得聖及迴趣大乘未入初
地名亦成異生亦成聖性二乘无餘是俱非句問答并
者問之性大乘及不定性能趣大者依二障種立異生

世界饒益衆生見釋迦牟尼佛及見多寶佛
塔禮拜供養又見文殊師利法王子菩薩及
見藥王菩薩得勤精進力菩薩身施菩薩等
亦令是八萬四千菩薩得現一切色身三昧
說是妙音菩薩來往品時四萬二千天子得
無生法忍華德菩薩得法華三昧

上

井

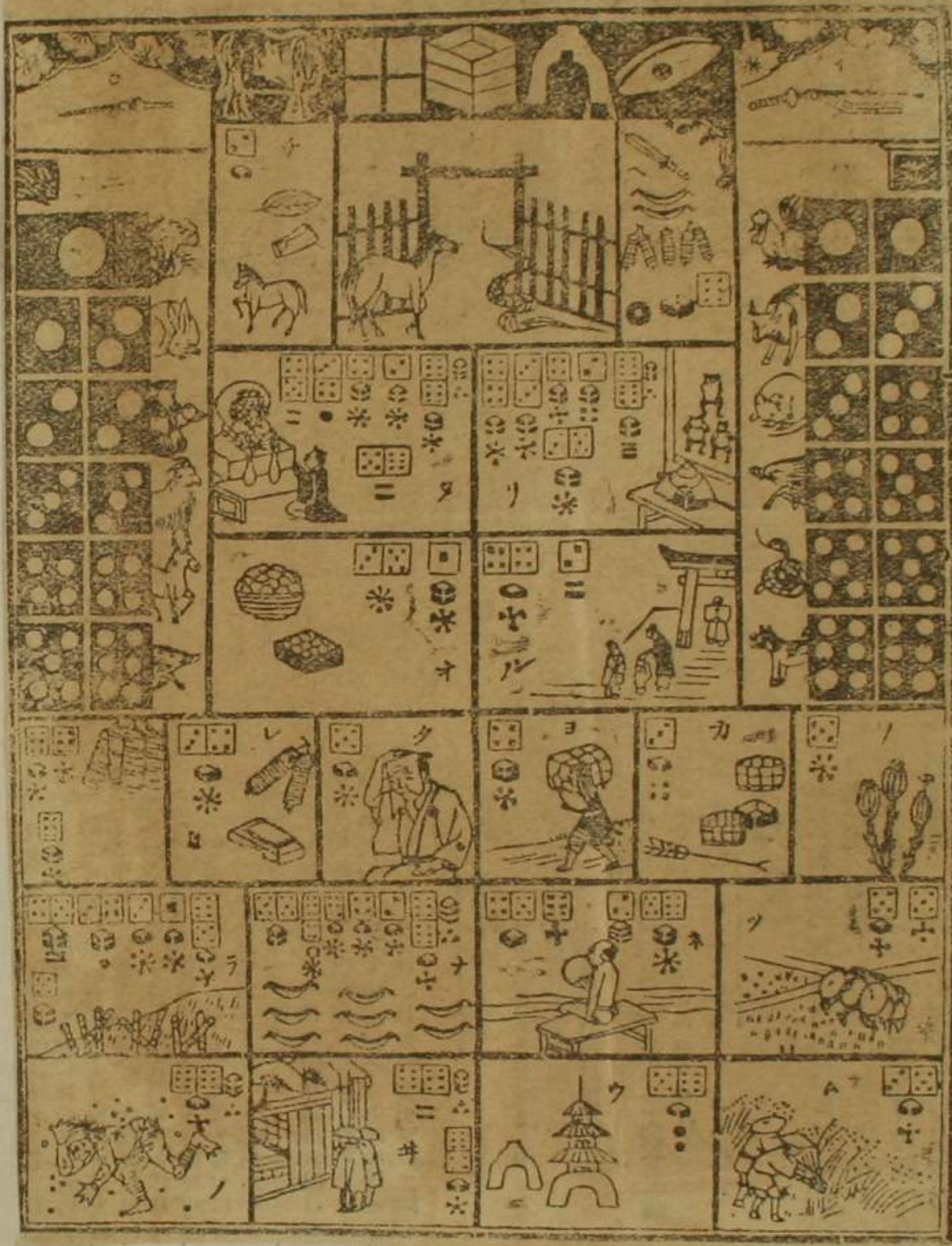
上

毅

百萬塔
背塔

十月十七日
田人

曆部南歳の丑四十三治明



(イ)大
(ホ)月餘
(キ)庚申
(ク)夏至
(ケ)二十十日
(カ)八せん
(キ)突入

(ロ)小
(ハ)紀元二千五百六十二年
(ニ)甲子
(ホ)八十八夜
(ソ)〃
(ラ)十方尊
(リ)節分
△桶の類は鉢(八)△重箱は(十)なり

(ハ)大の月
(ト)明の方
(ル)社日
(ロ)入榎(寄尊)
(ウ)植付
(メ)鎌入

(ニ)小の月
(チ)初午
(マ)ひびん
(メ)はんげ
(キ)土用
(ワ)冬至

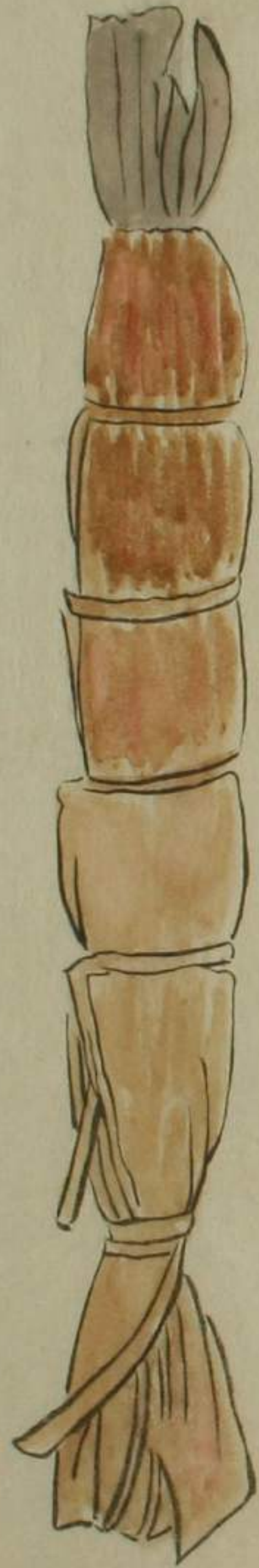
多者集りて於此の曆を定む
供ふとまふ



○お祭の杵杵馬

此の馬を競馬の的條の二貴きん其
をくそんを遊あこと云々
從江戸の富
士祭の此のめくま

羽州由利郡
同所々、キ蠟燭

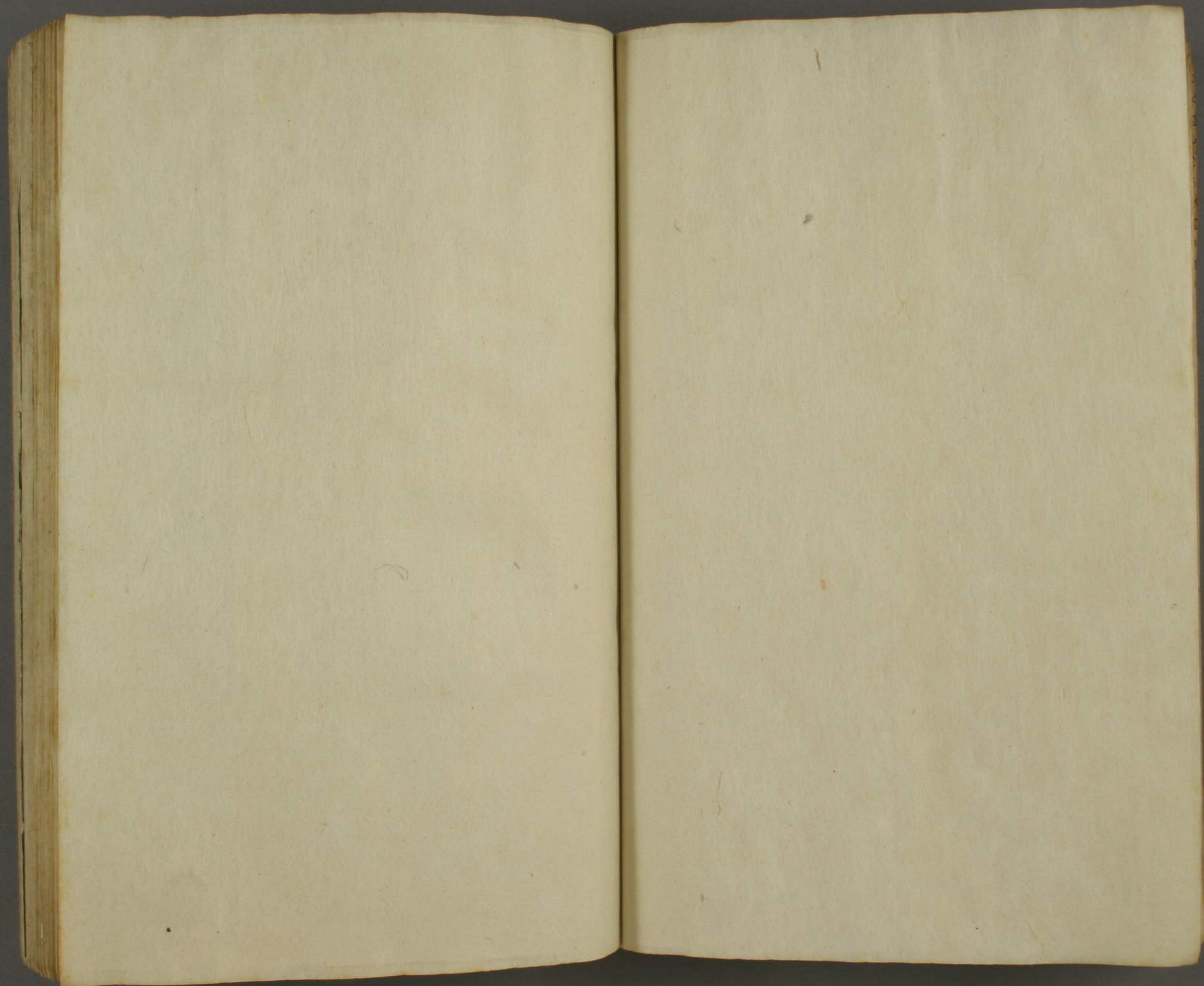


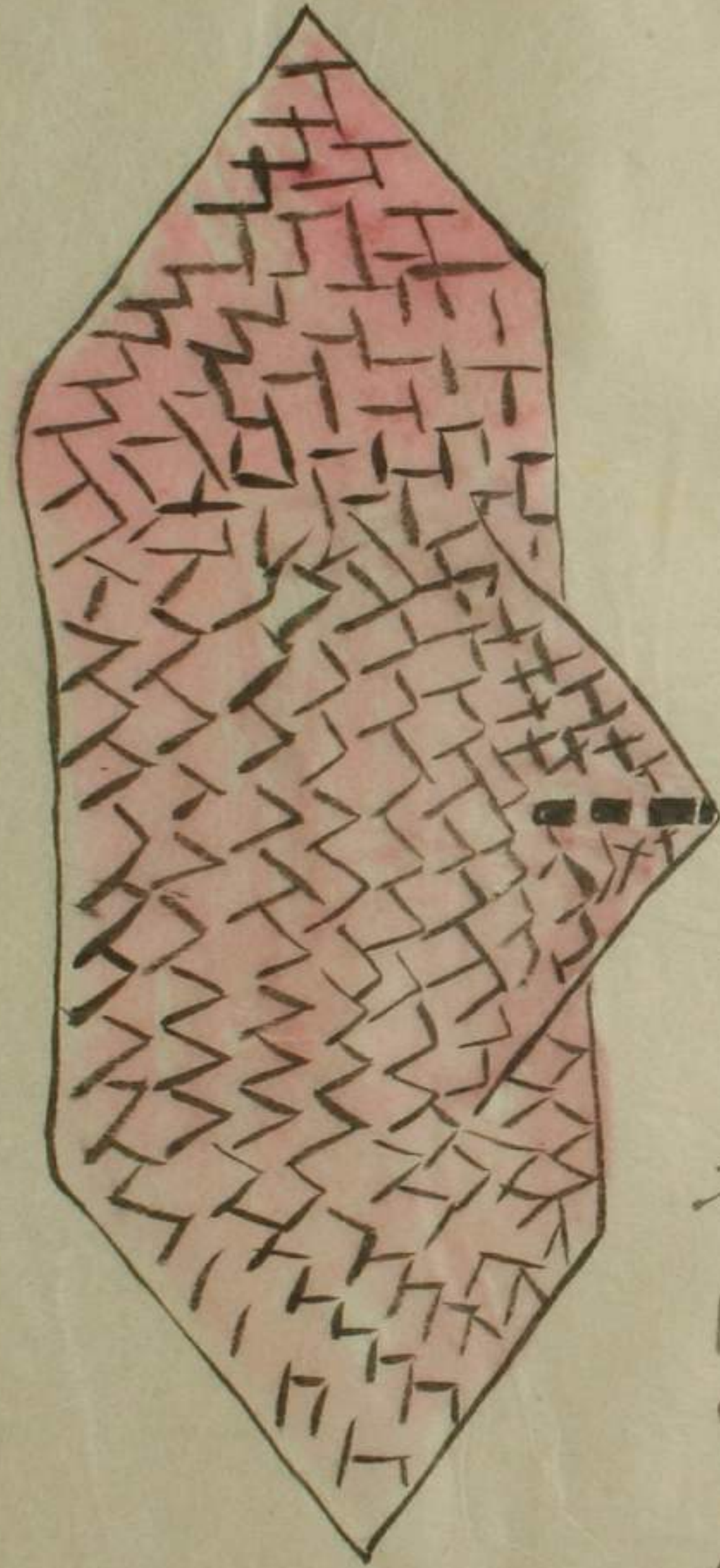
一名折拉蠟燭と云ふ松脂を鏡
の多うも包みしきりしきり
崎きぬを上の方をたけけ
ぬち明らるるきりしきり

ヤニアカシ 松蠟燭



此のヤニアカシハ松脂を文の竹皮
を包て火を点す徳奥四白河
奥まの用方といふお新田り
松燭燭と云ふと云

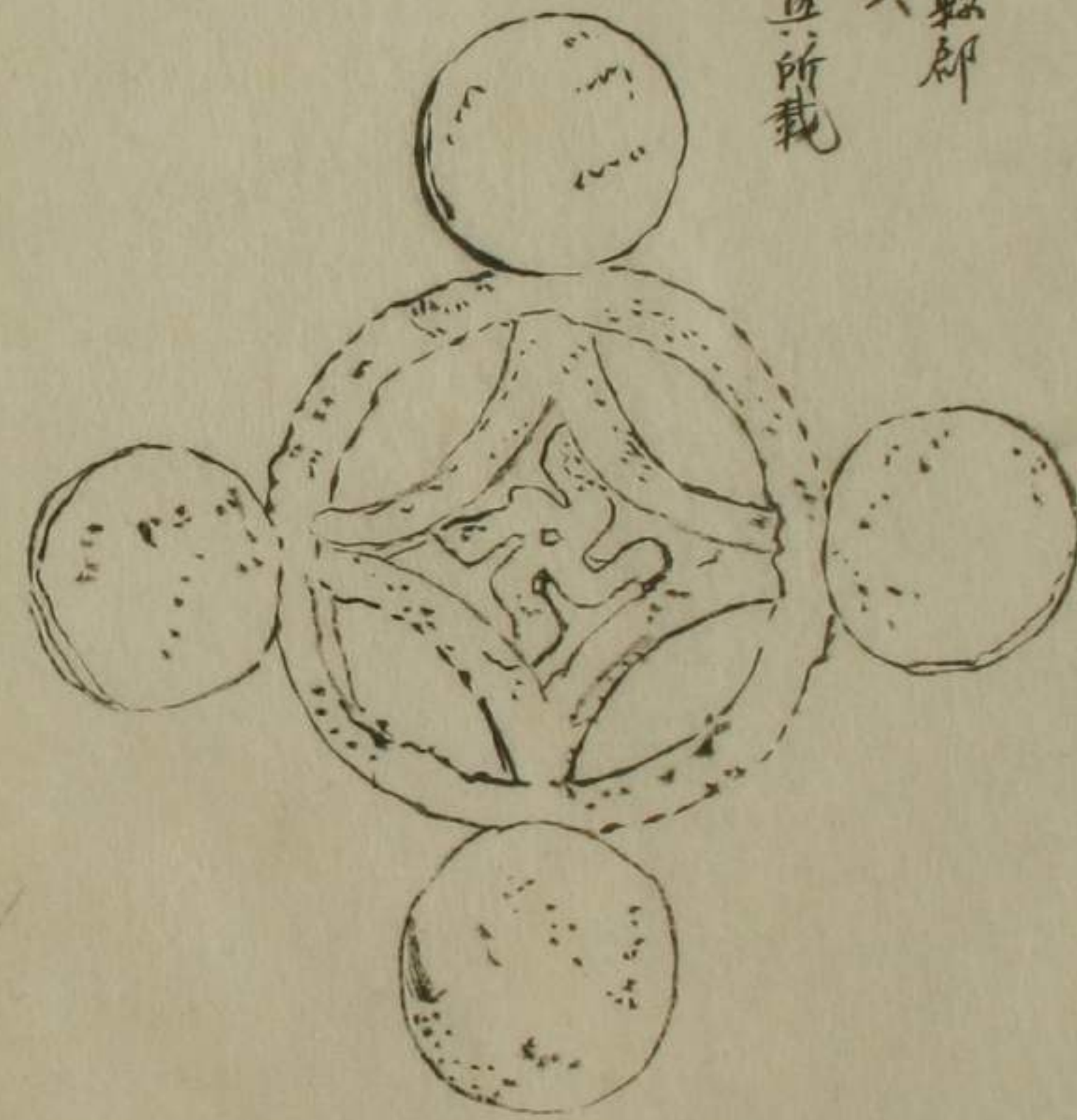




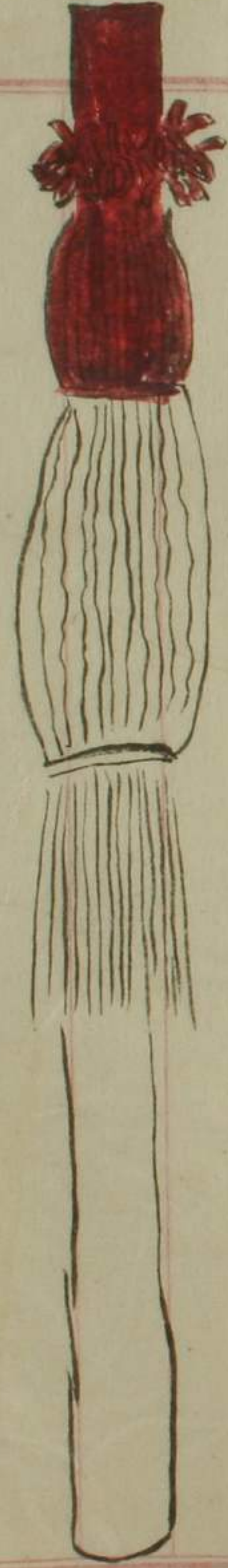
狩野の

坊一尺

三州狩野川の
青角の

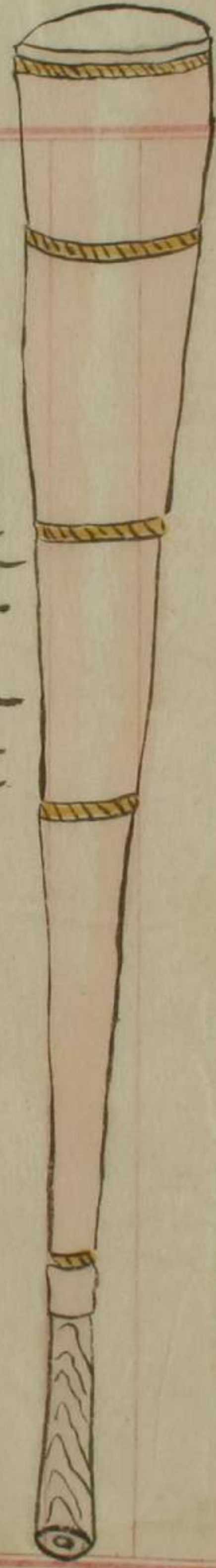


信濃國小縣郡
坂之万字鈴
按云此物所載



長二尺餘以柳也

同國音木イナケ持
是と正月十有サ一の非
祭の用也
秋の祭の祝木也



長二尺三寸

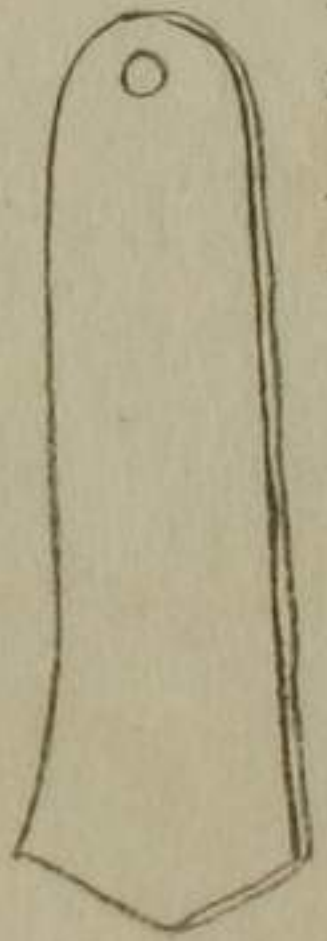
羽州秋の音コサの類也 以柳也
毎年正月十有板之メ飾と儀也
左右を吹拍
秋の音ハ貝といふ也

梅園寺堂下藏

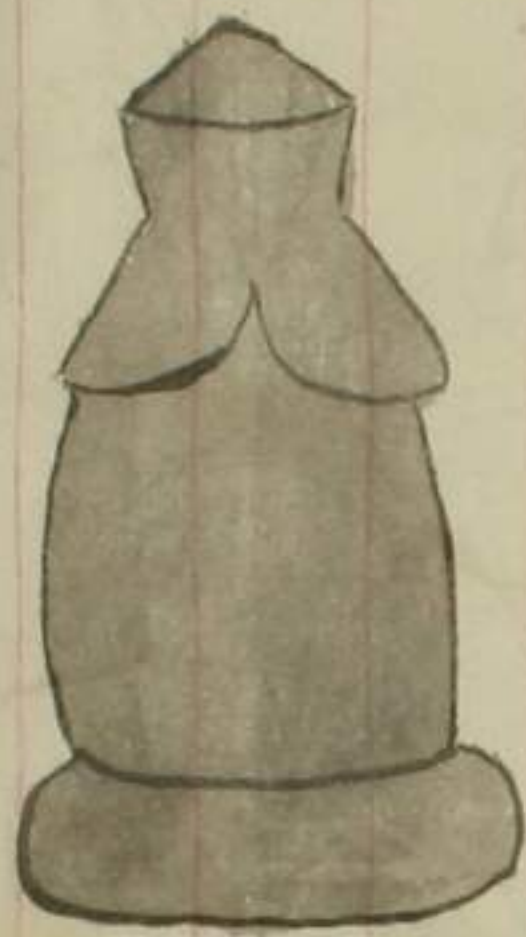
東寺大般若經藏



法隆寺法花經牙籤



振佛 ニギリホトケ



三ノ上代の和歌心よ
リ一ノ上代をくしとる
六十谷村南嶺山大
同寺の地中より振
出す子とて此寺と

大同年中慈覺大阿闍梨建長寺に
南嶺山とて之しあり大寺とて
今と名りての寺とて此佛を慈覺大阿闍梨の自ら作り
出さるるに依りて傳ふ而後此とて出づ

綾筒の皇

方二尺七寸

綾筒の五横

形袋の上布

子云

南都車太寺

所藏使州簡

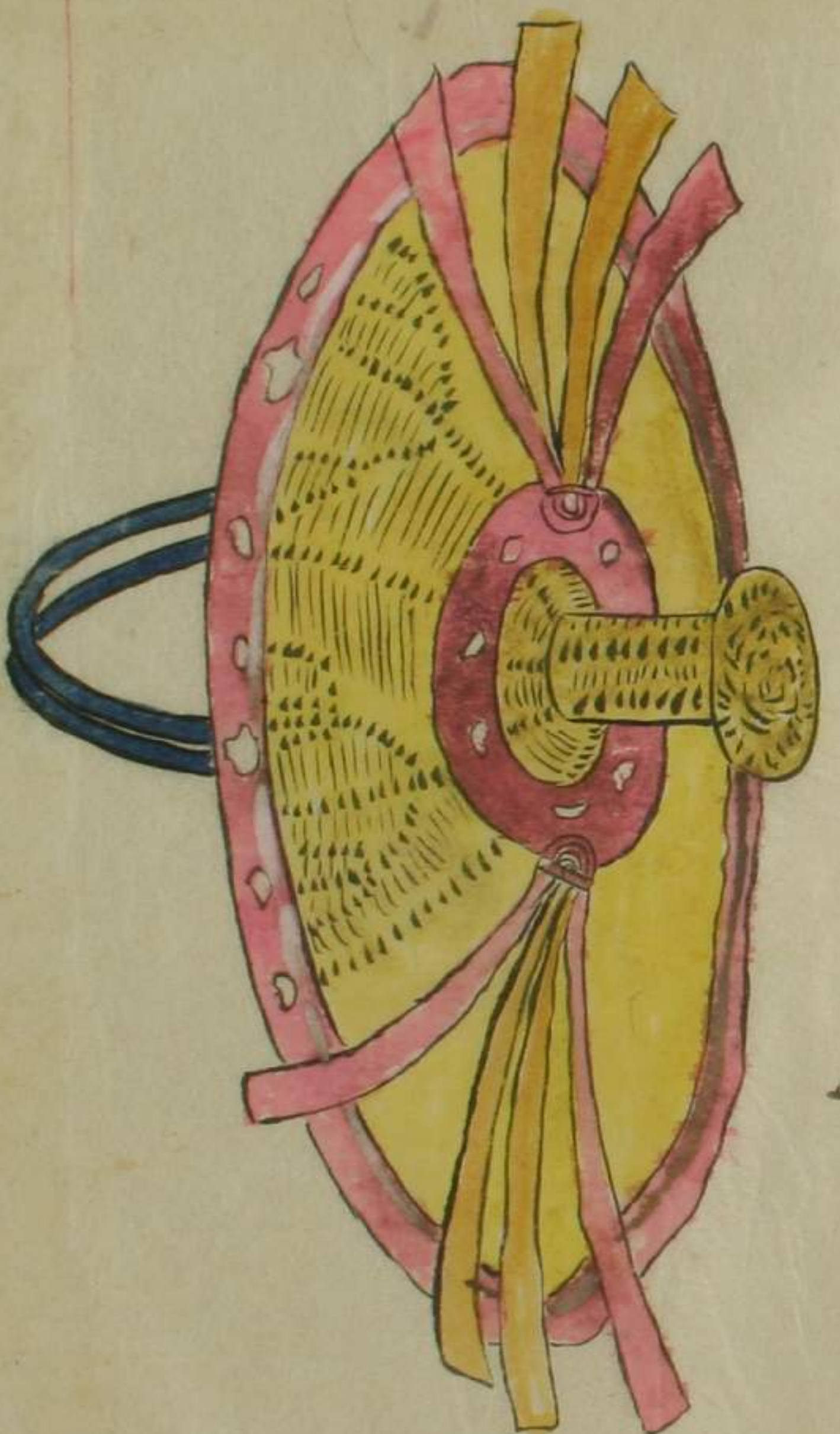
上圖

聖武天皇

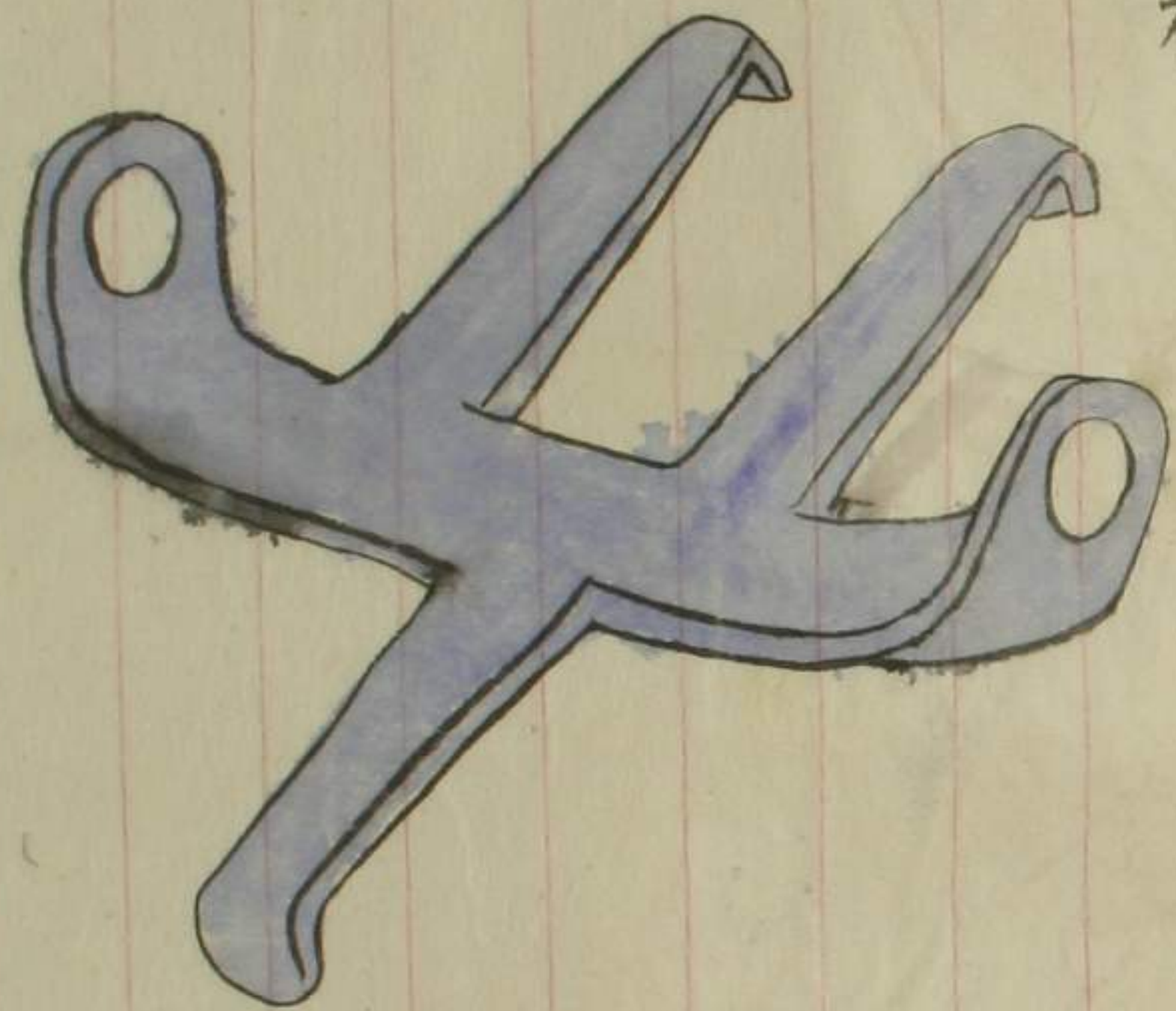
御物也直

和十二年

台覽



鐵標カキカンシキ



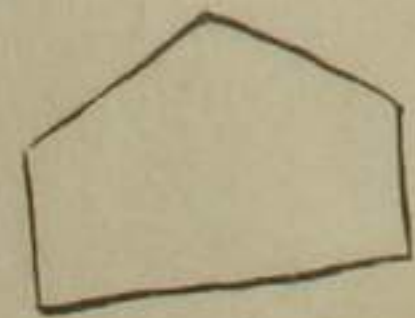
在々陸奥三十七
三十七
雲巾草鞋の
りく言つても也

吉野櫻本坊什
村上左四郎所持
丑本卒都婆之
鐔





星柄



京師昭閣寺花

東山殿七賢杯

朱漆其形似合子

內金書七人姓名

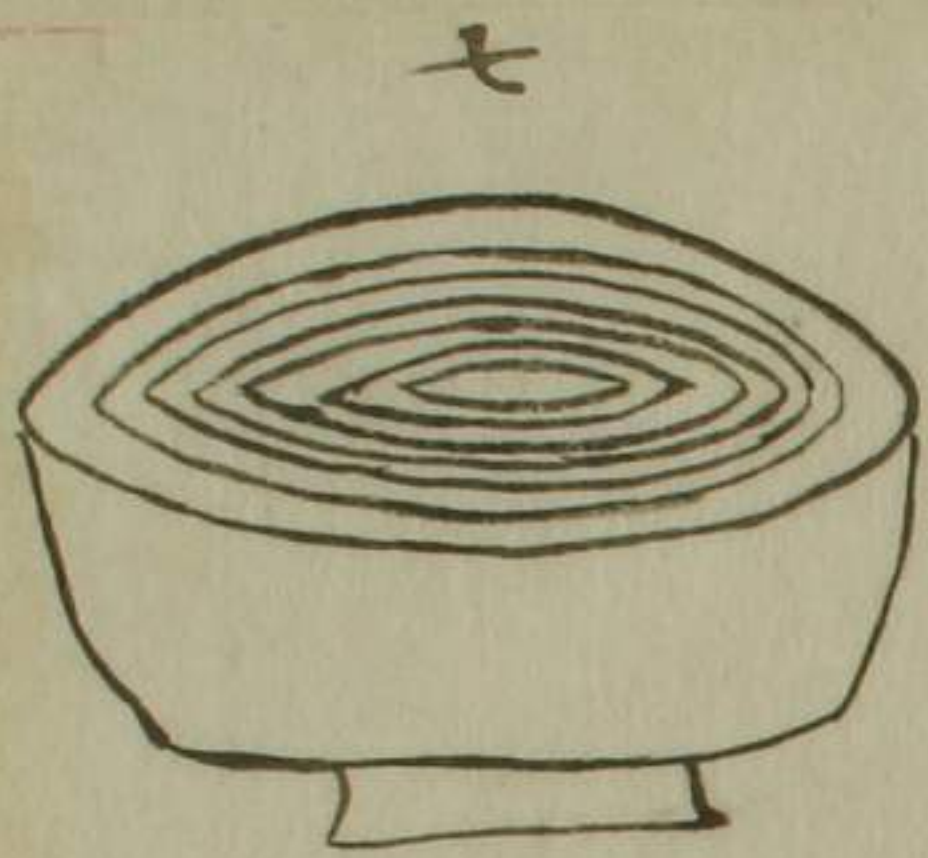
七	王戎	二合	四合
四	向秀	九合	五合
一	嵇康	八合	一撮
		二	阮籍
		三	山濤
		六	阮咸
			一合



深二分五厘
徑二寸五分內二寸四分
底徑一寸六分

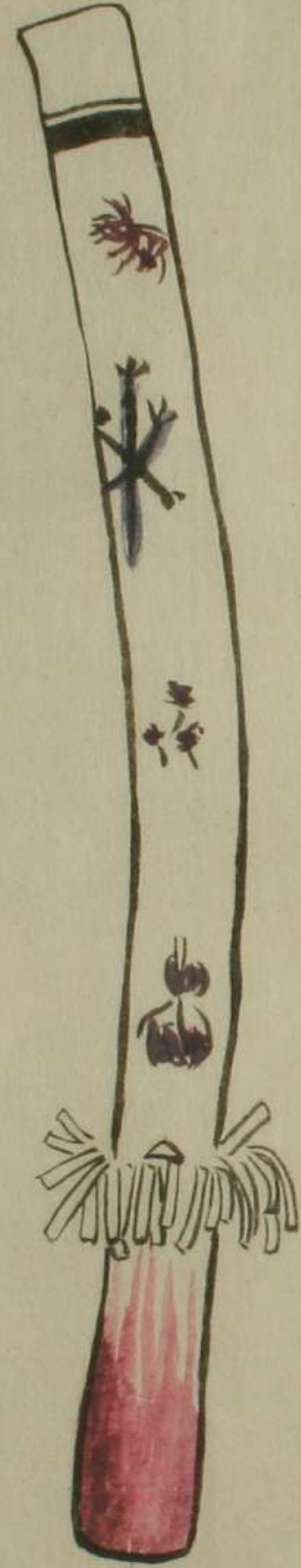


銘
行書

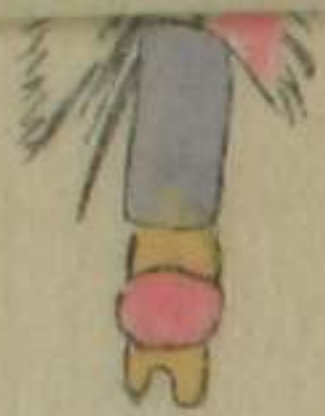


七
深一寸四分五厘
徑四寸二分五厘
底徑二寸五分
內四寸一分五厘

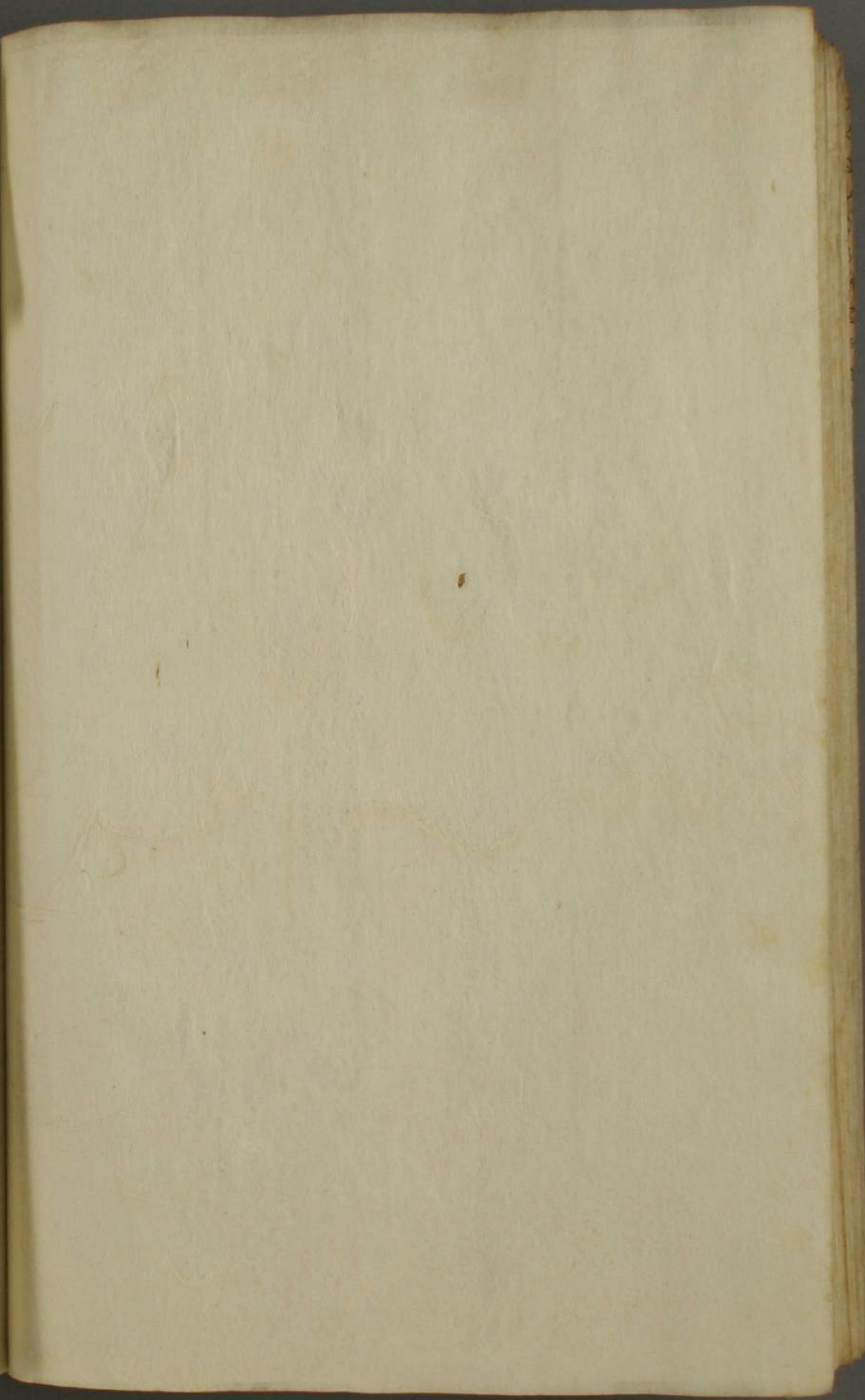
長一尺八寸



柳木玉満原郎其田より正月十日
衣幸神祭の白子供十五才持歩
木剣一名祝木



Handwritten text in a vertical column on the left page, possibly a title or label, written in a cursive script.

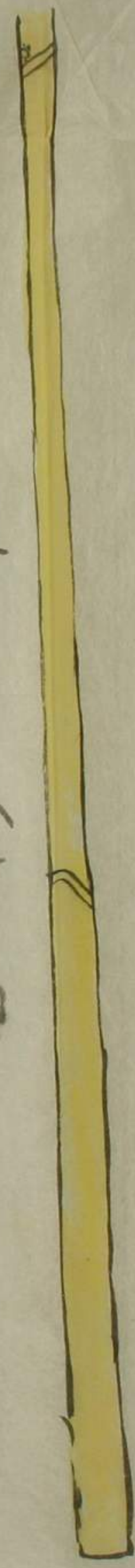


七の目

冬河かろ殿印の民可も 四等書と云 本紙



長廿 七人五寸餘



七の目

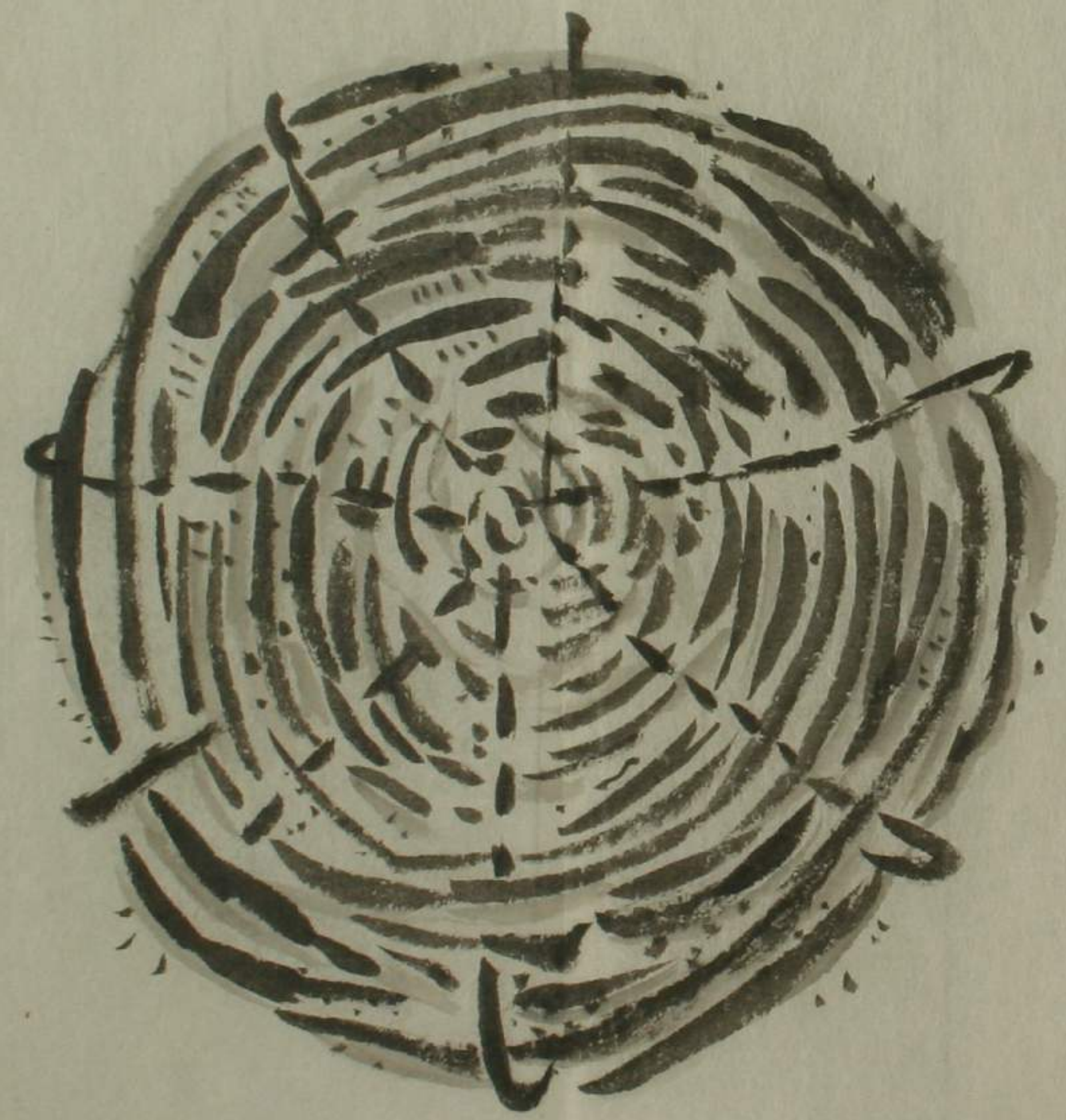
信取油心

三火巻

正月の巻

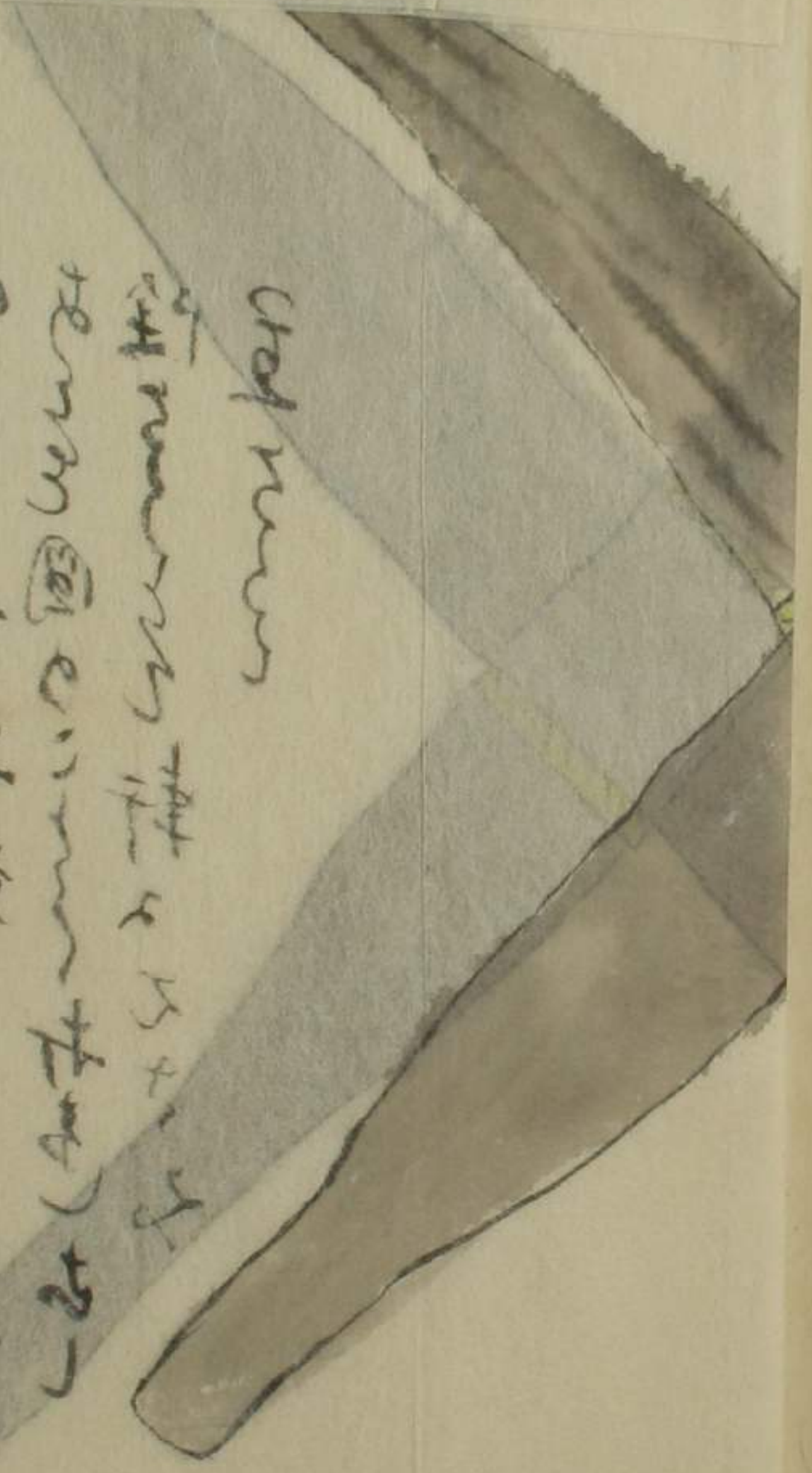
い子勝

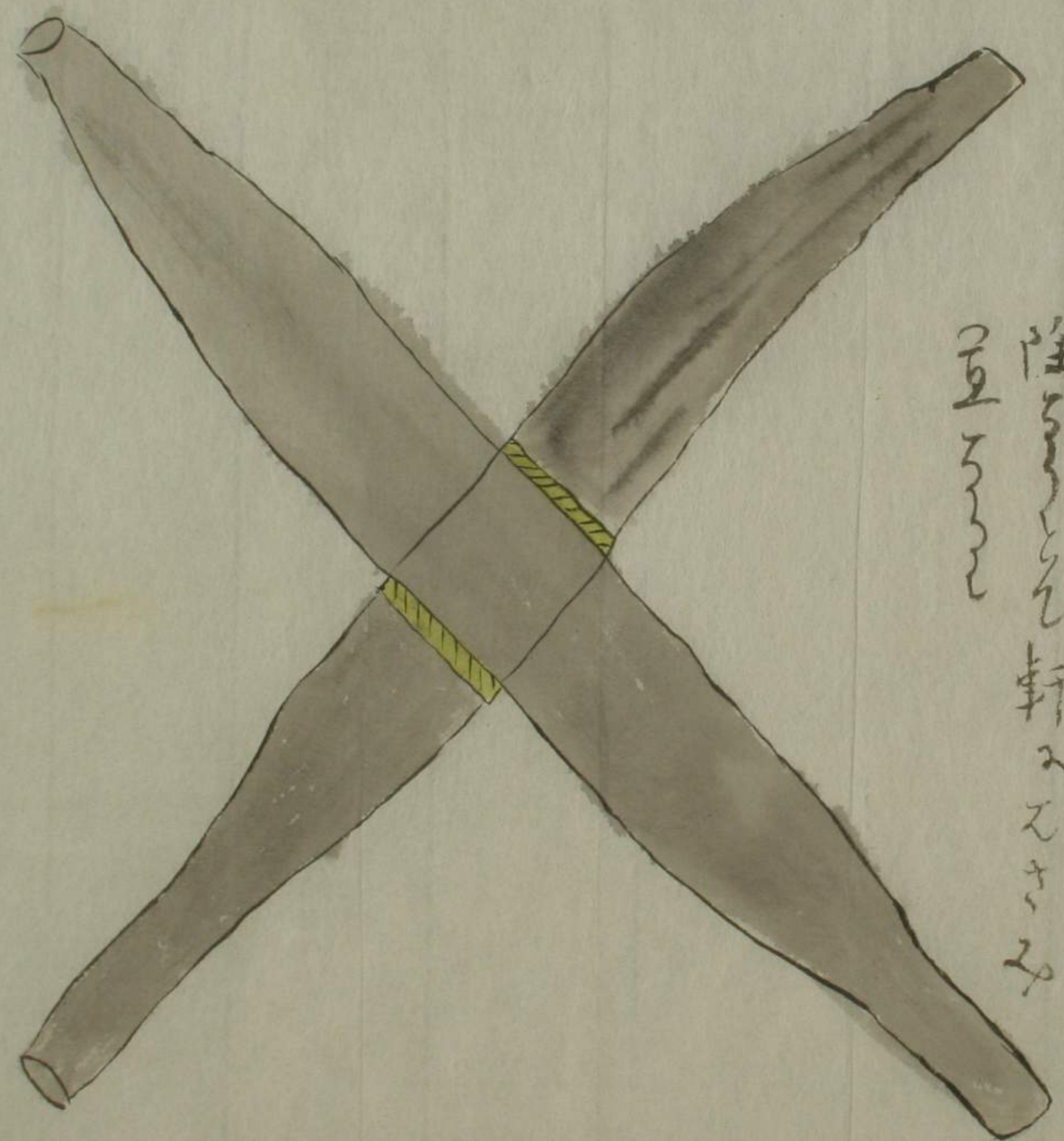
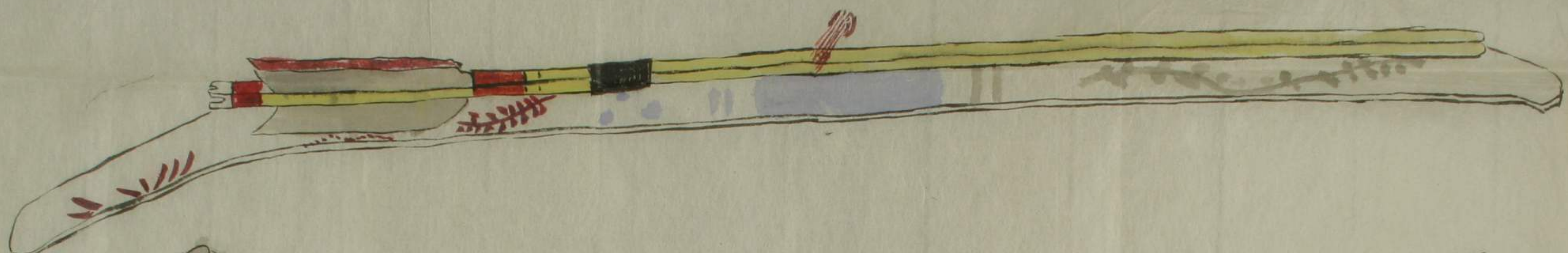
石





Handwritten text in a cursive script, likely a list or notes, positioned to the left of the grid drawing. The text is written vertically and includes several lines of illegible characters.

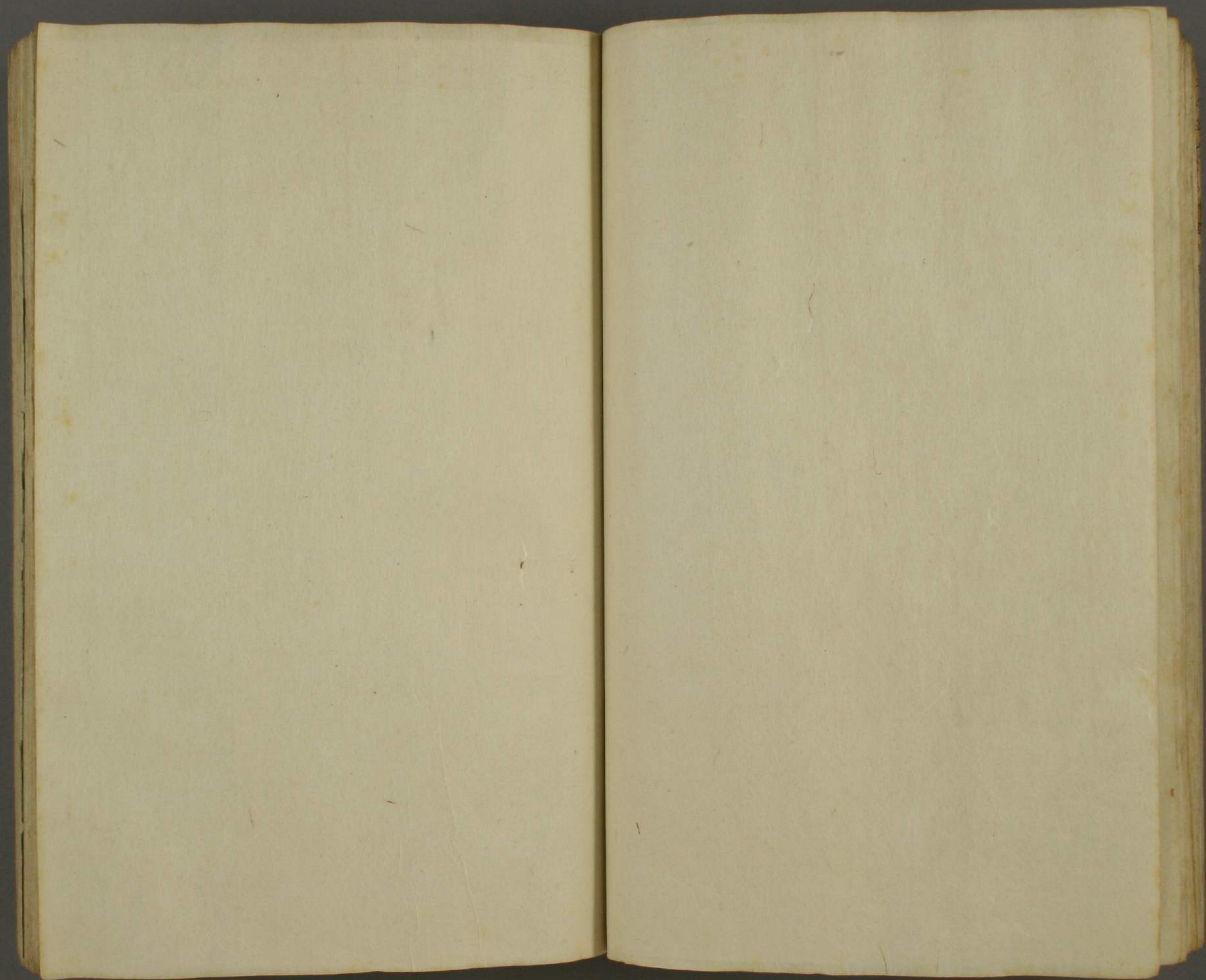




野の依久山のふゆめき

白糸のふゆめき

正月十日朝粥をいし用ひ
あしを圓のこころ打あし
陰をいしを軒みえさふ
つとらふ



○ 埃及の女性の指く状 左圖、性的埃及の指く
 の女より指くをいふ、背より肩より腕より指くは
 二種あり、背より肩より腕より指くは、
 指くを肩より腕より指くは、
 一人を上げると、
 又女の背より腕より指くは、
 のき、また、
 前より手を上げると、
 因より、
 又此の圖より、
 七あり、

風のかさ



東海道名所記所載



寛文頃劇場の圖

京鹿の子所載

四條通

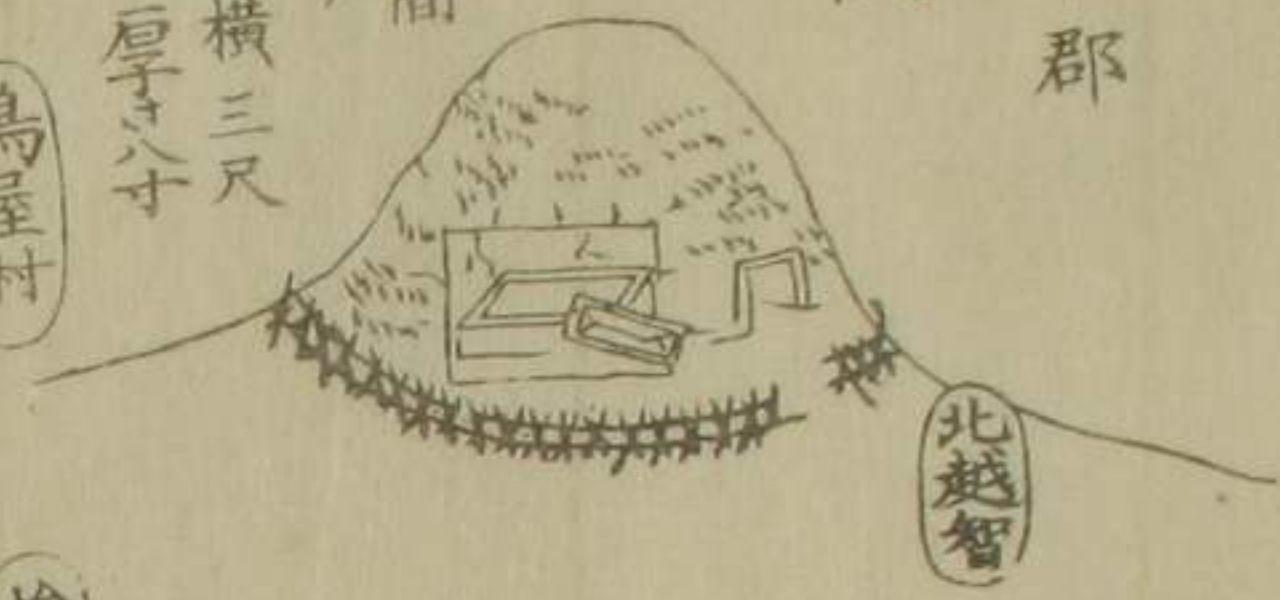


古山陵圖

大和國高市郡
字岩屋山
齋明天皇陵

高さ十四間
根回り百四十
三間
垣回り四十六間
内石棺あり
高さ三尺二寸横三尺
長さ七尺五寸厚八寸

鳥屋村



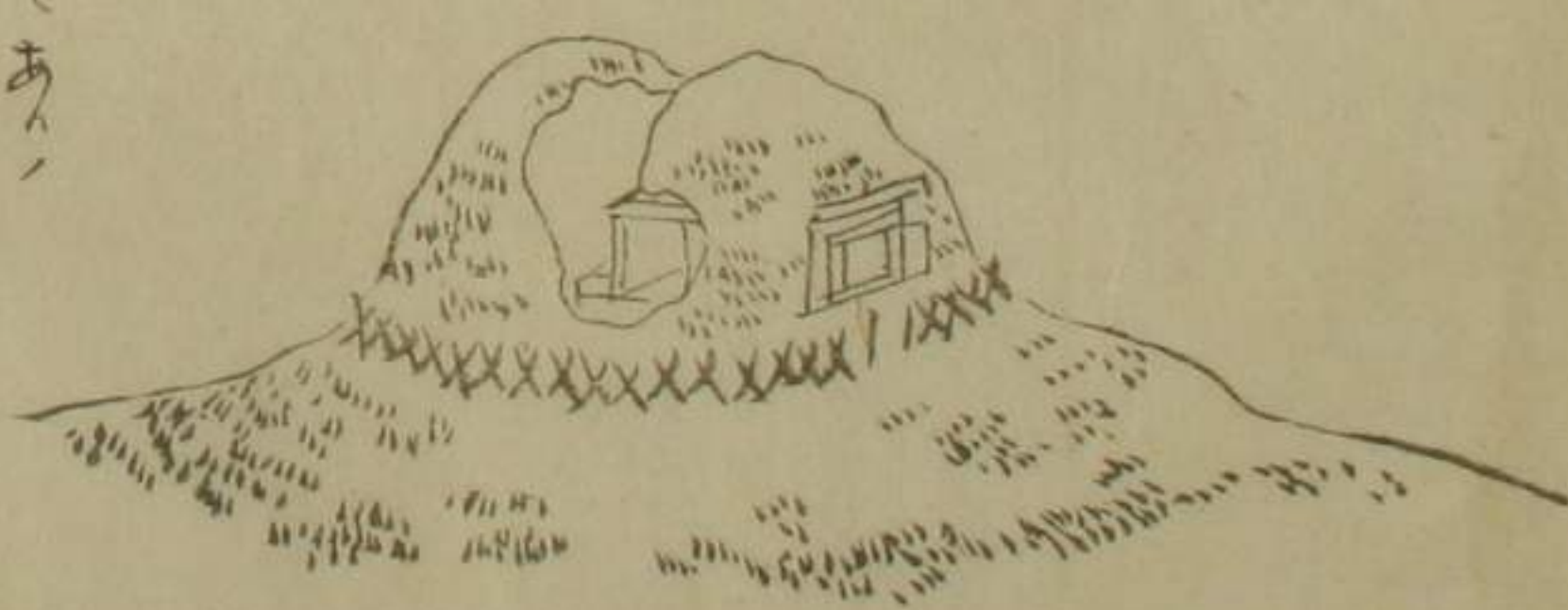
北越智

檜前

御棺を山に築きこり奉るが故に御葬の日
山作司と任せらるると記るを

同國同郡
野口村字
王の墓
天武天皇
持統天皇
合葬

山陵
高さ四間根回り
九十五間
垣回り五十八間
門口五尺四方
石棺われくだけてあり



文武天皇御陵

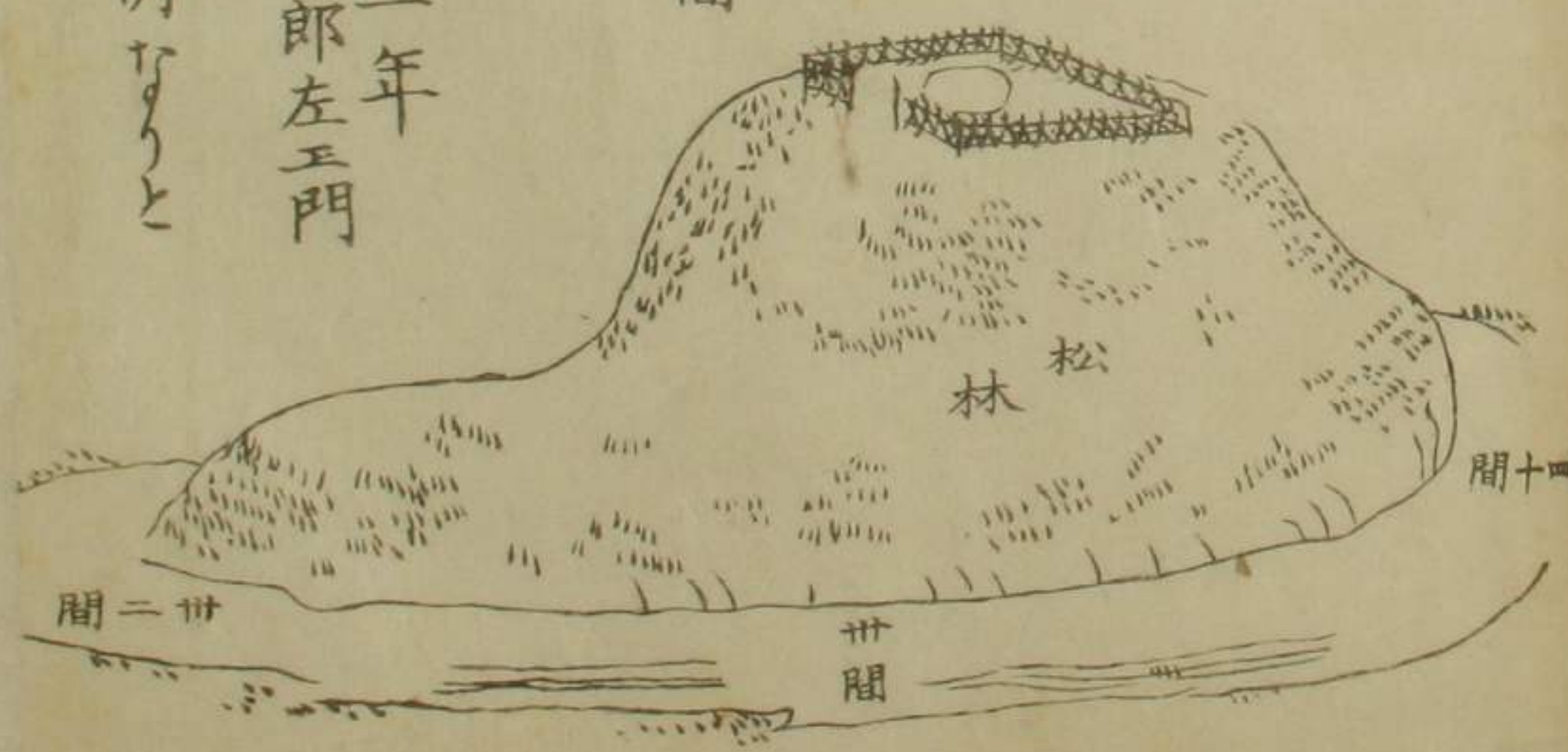
大和國高市郡
平田村字高松山

高さ二間二尺垣
回り二十七間



同國添上郡
法華寺村字
宇和那邊山
元明天皇御陵

高さ廿九間
根回り三百四
十六間
垣回り三十五間

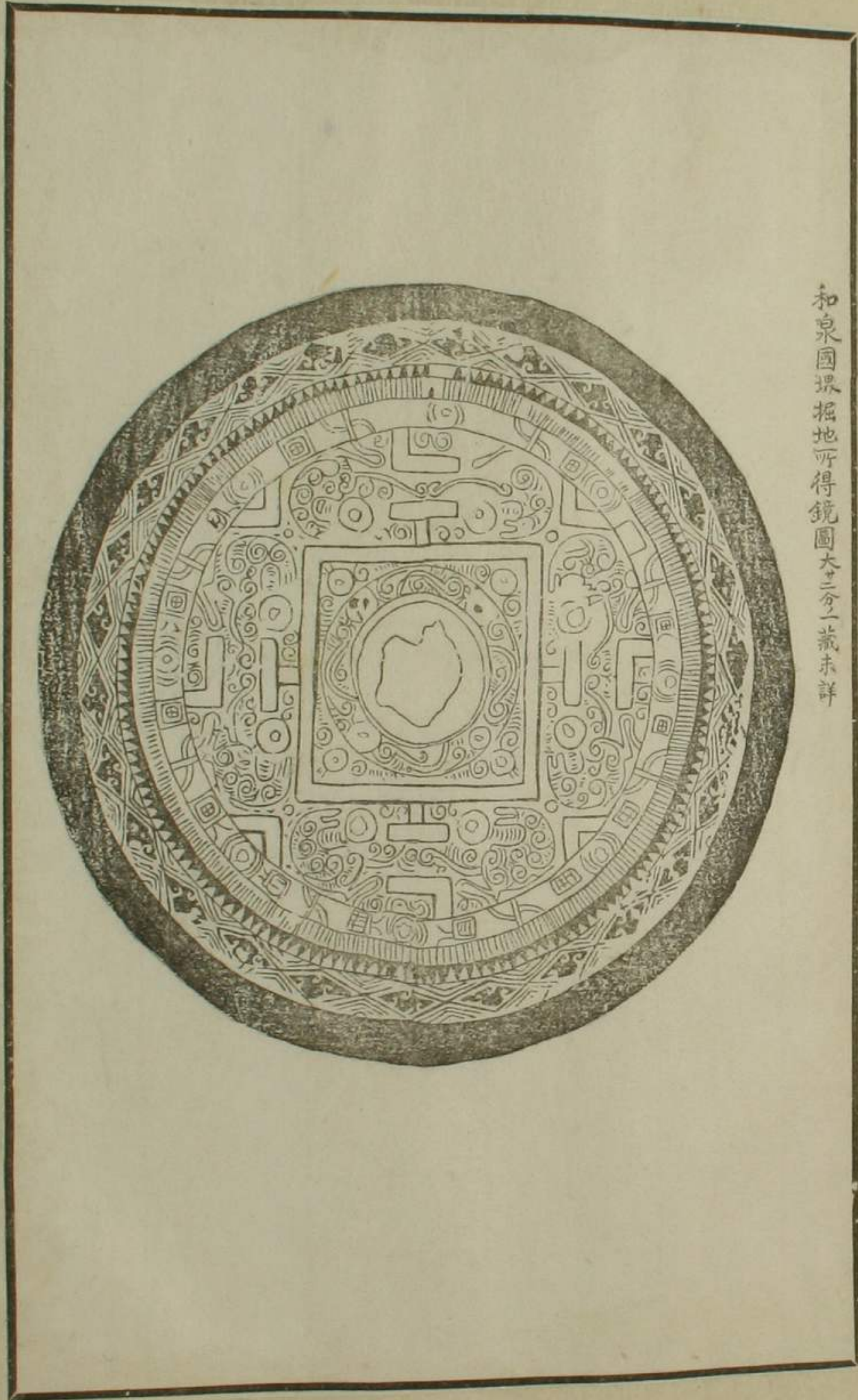


此四圖ハ元祿十二年
五月廿五日繪師三郎左五門
秀行
公命に依て記せし所なりと
云ふ

間二廿

廿間

間十四



和泉國環埴地所得鏡圖大三分二載未詳

尾張家御藏

此本淡文右取りし
實左より

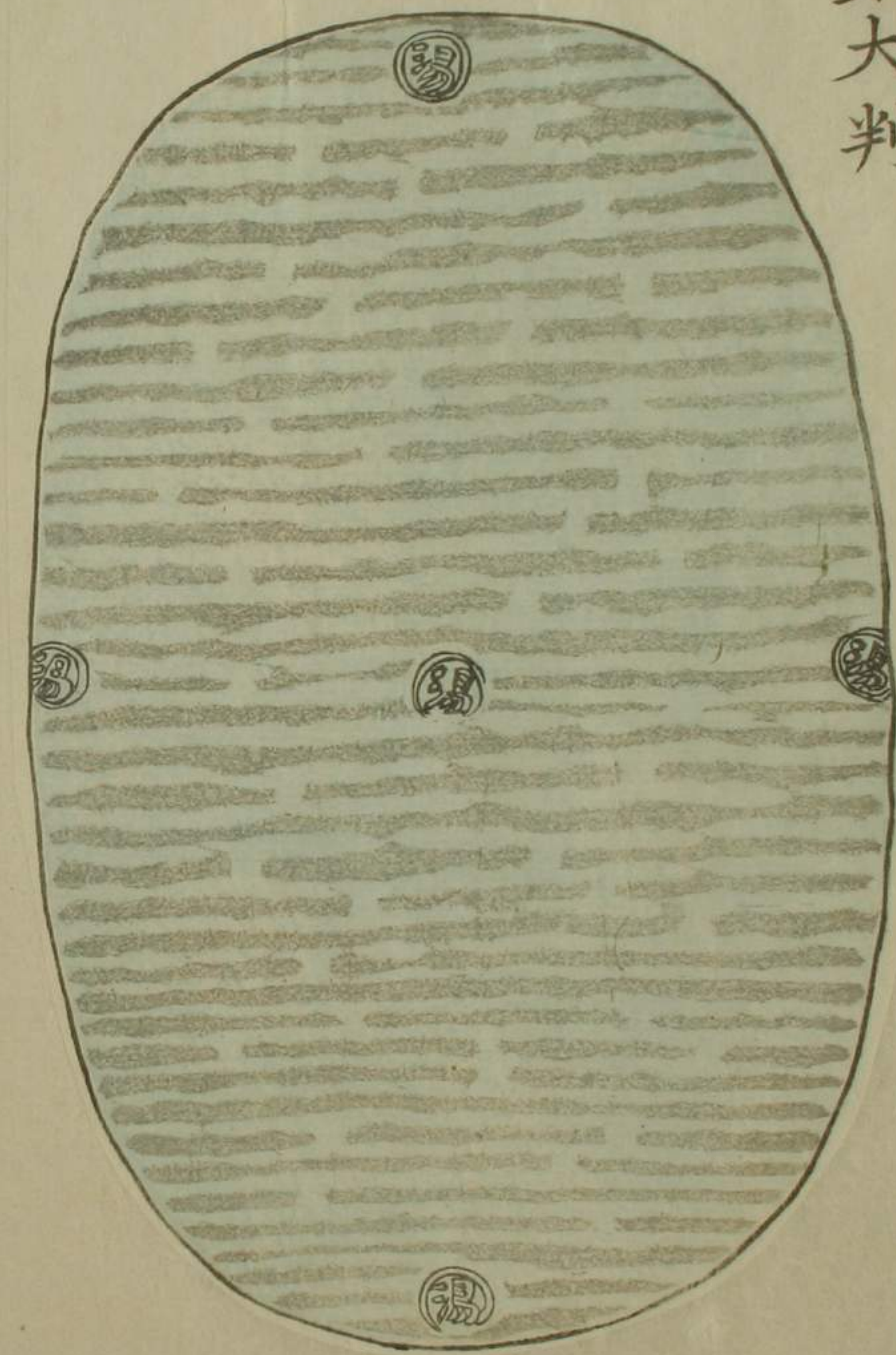
心すくふわが
 海にまよふる可き
 心すくふわが
 心すくふわが

加州家入本多玄蕃助藏

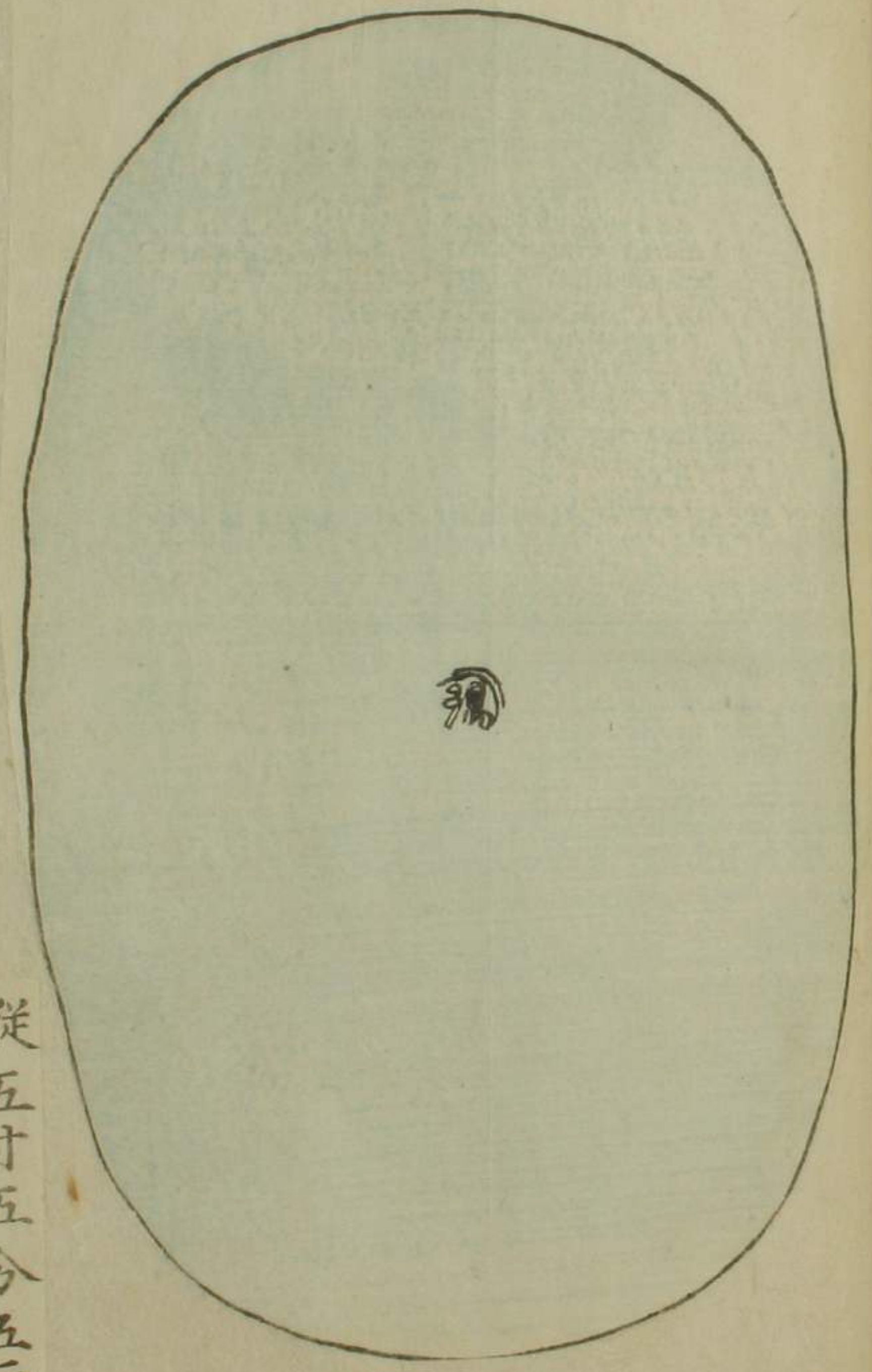
人になら
 海にまよふる可き
 心すくふわが

銀大判

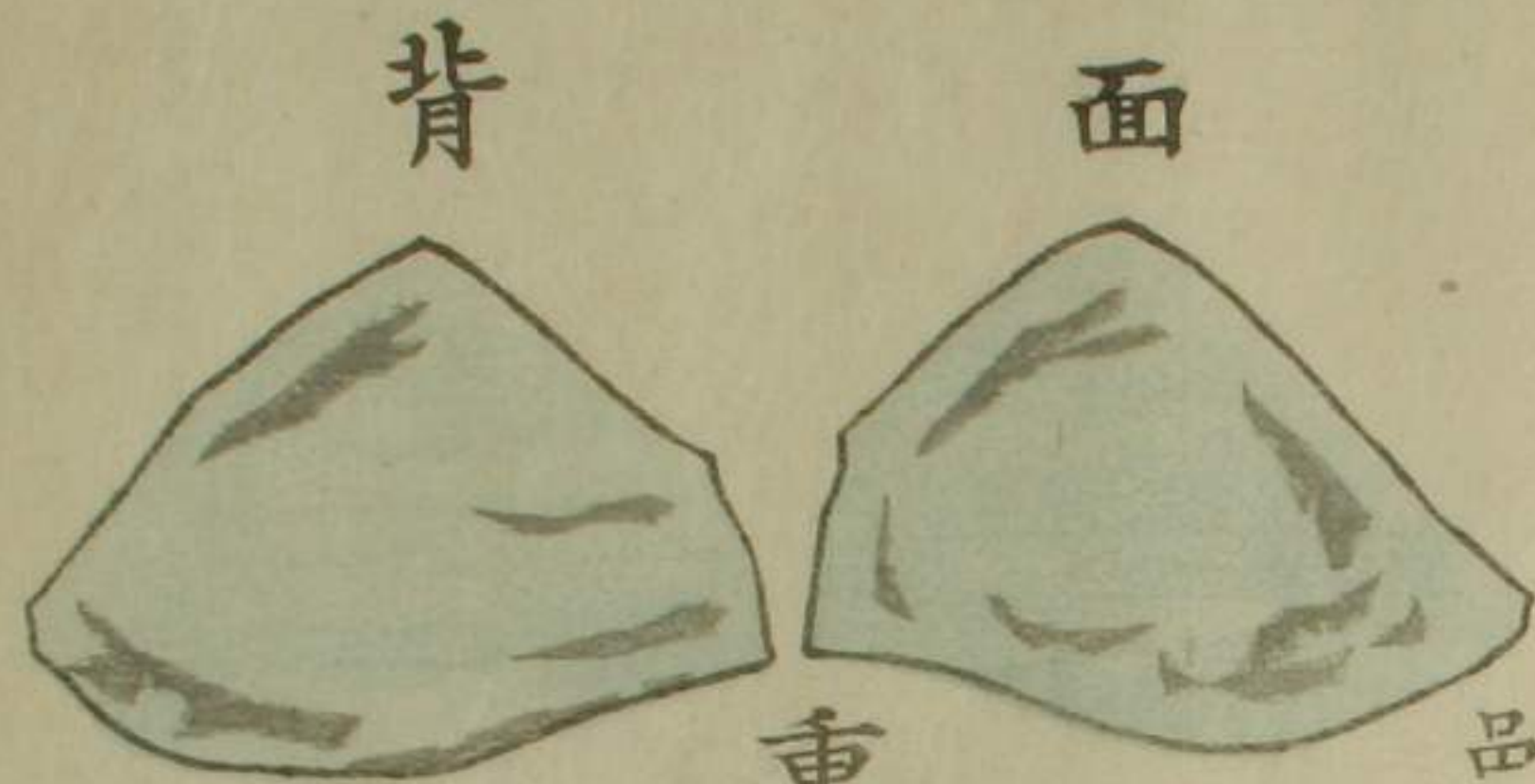
面



背

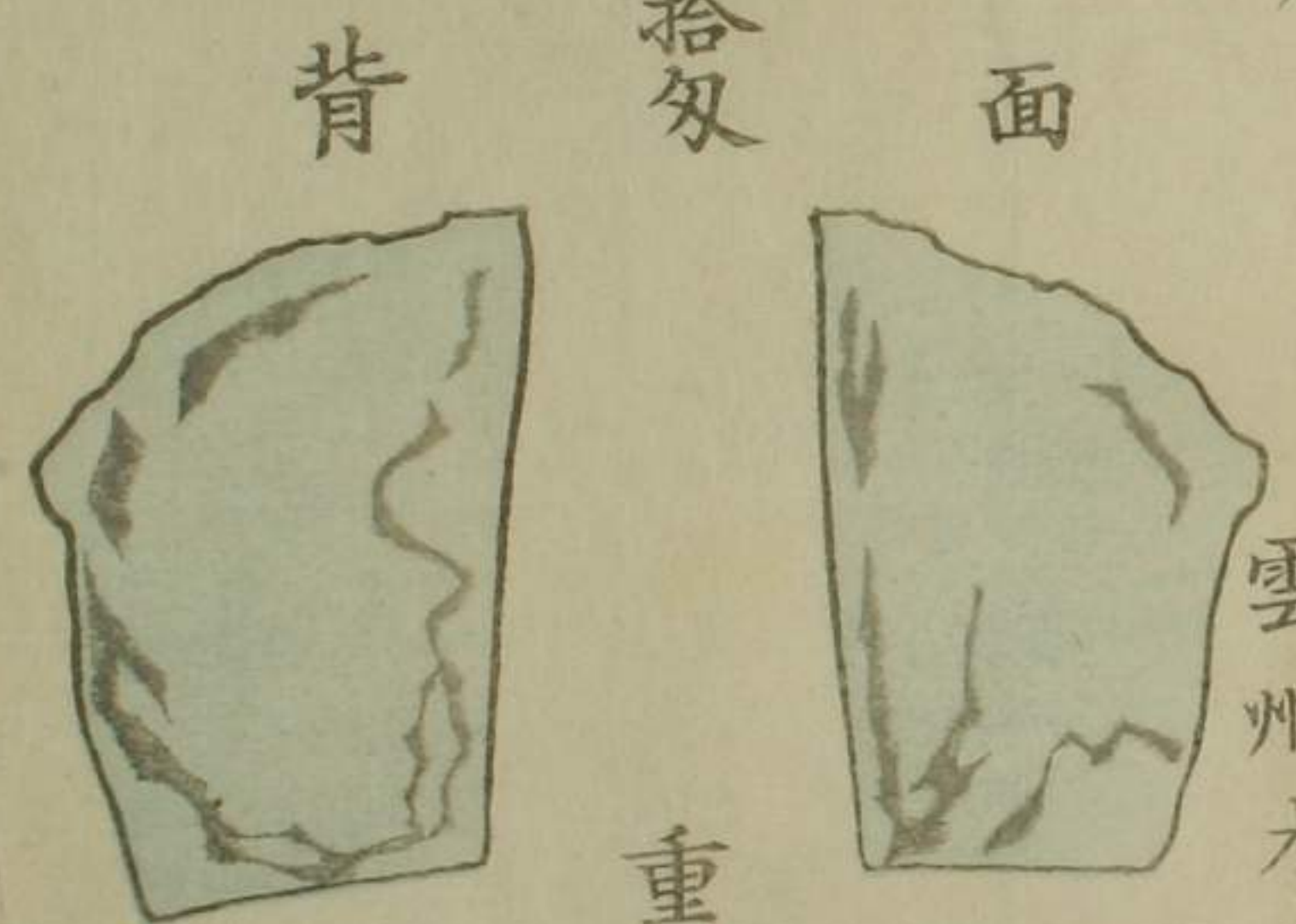


縱五寸五分五厘
 橫三寸六分強
 重四拾三匁貳厘八毛強



細銀 造幣寮所藏の
品あり

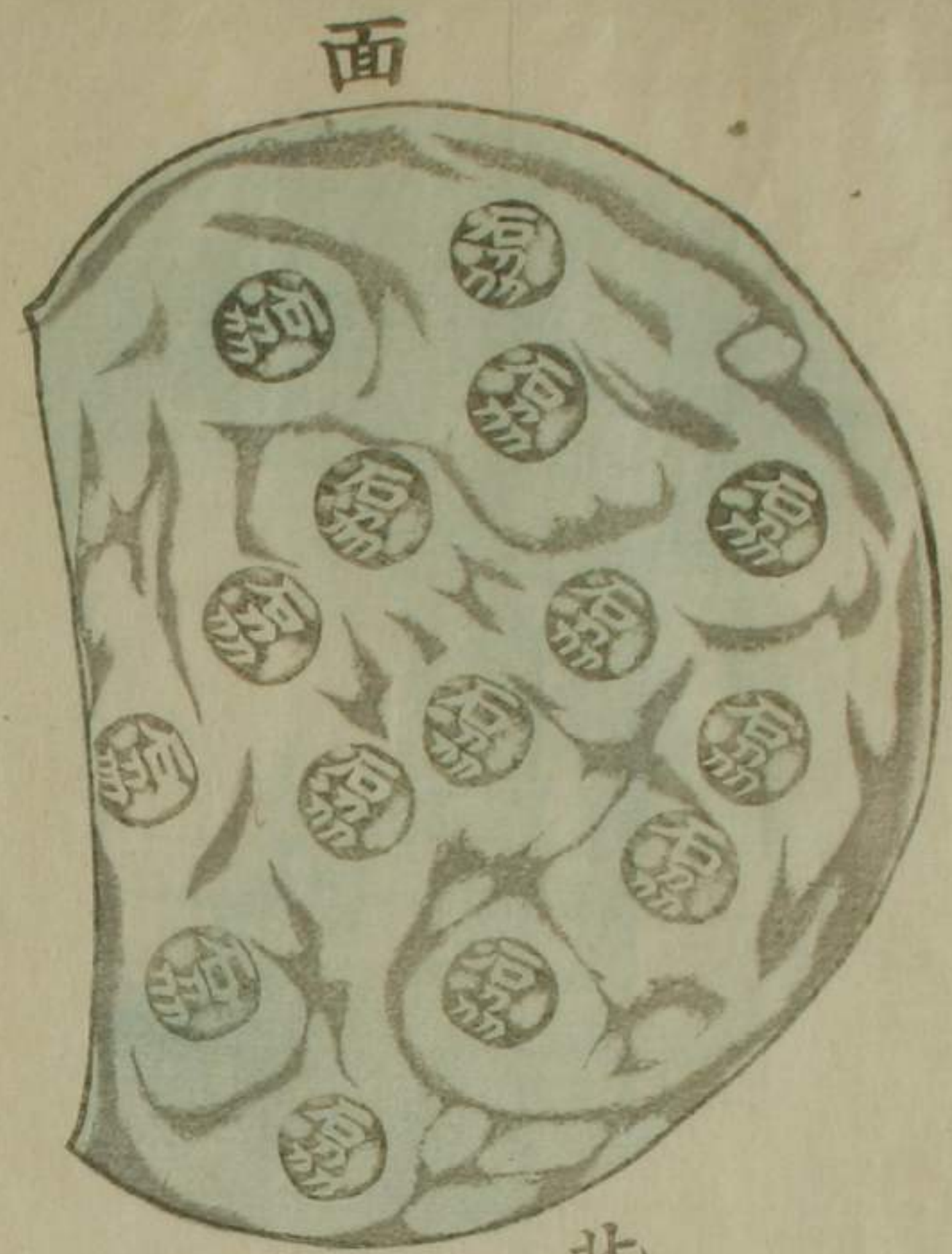
重さ貳拾匁



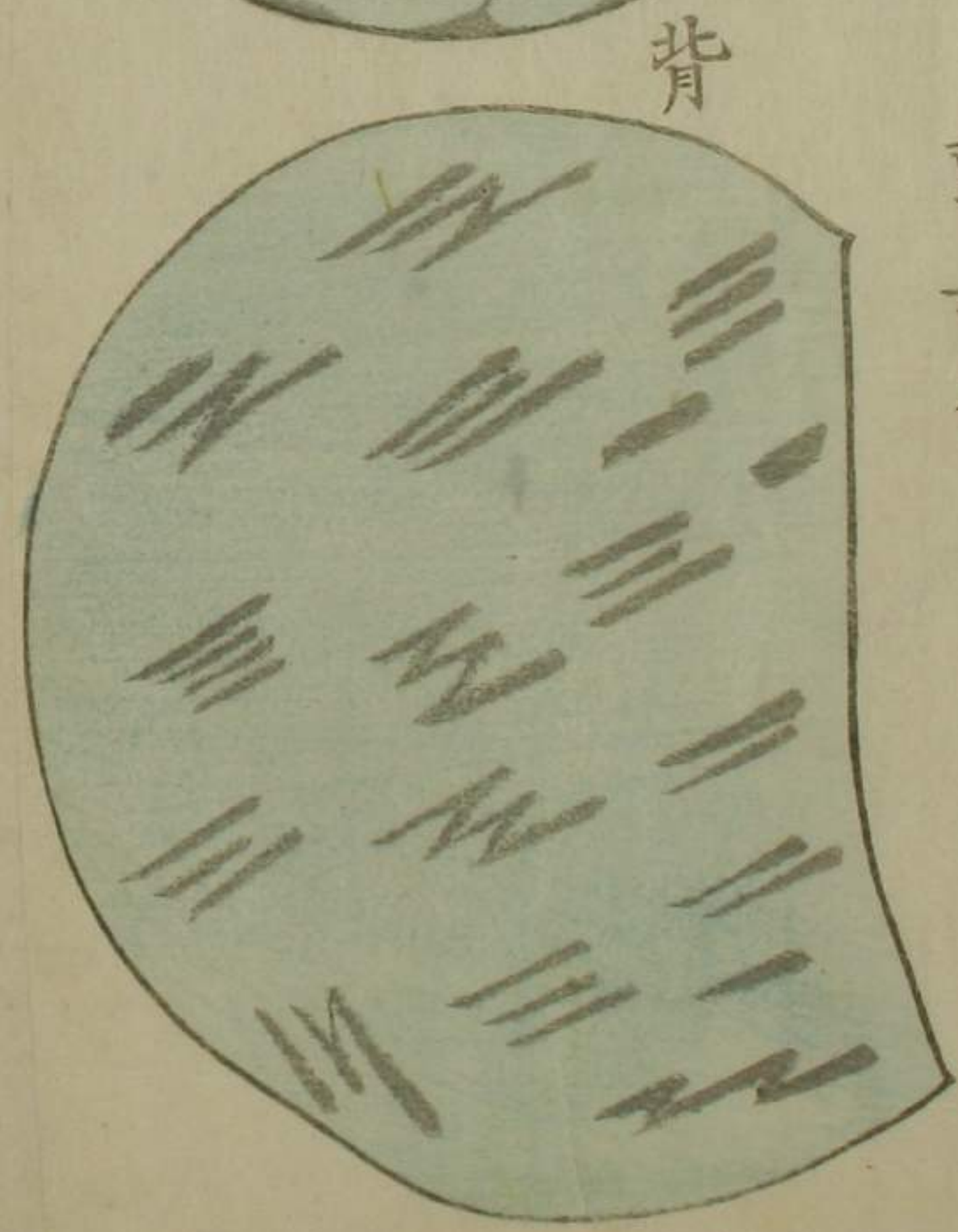
雲州木瓜判銀

造幣寮所藏品あり

重さ拾貳匁壹厘

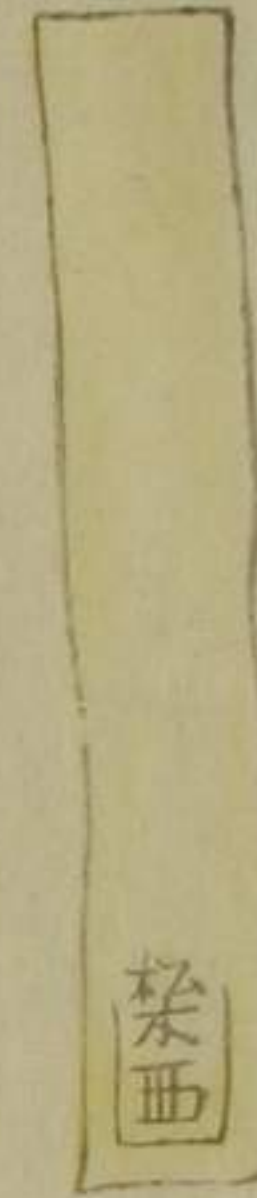
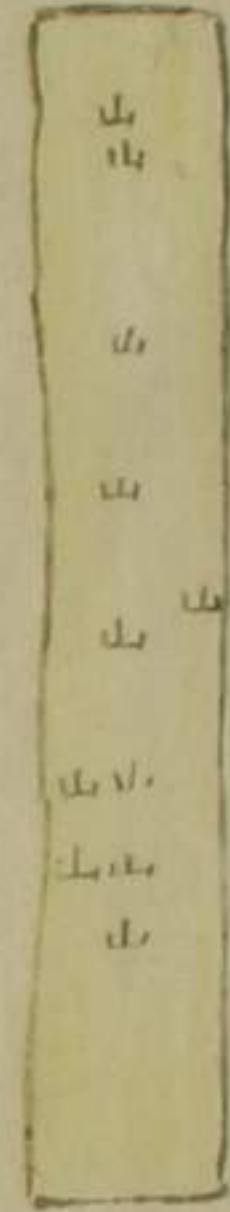


灰吹銀 造幣寮所藏の品あり

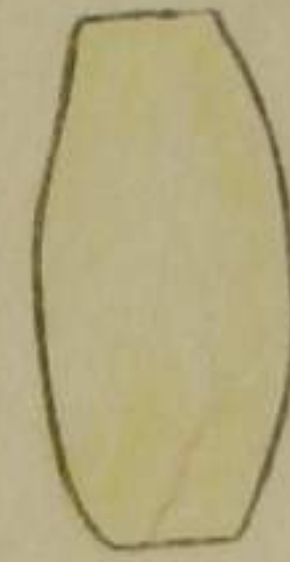
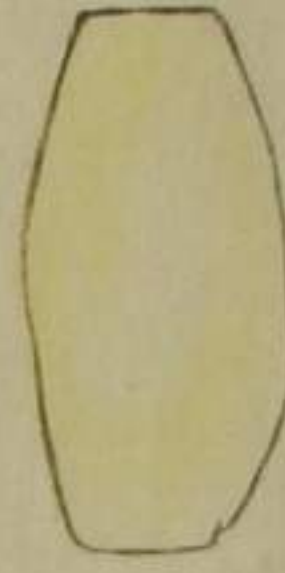


重さ百匁

延金 金銀圖録所掲の圖あり



延金 金銀圖録所掲の圖あり



甲州慶長金

三貸圖彙所掲の圖あり



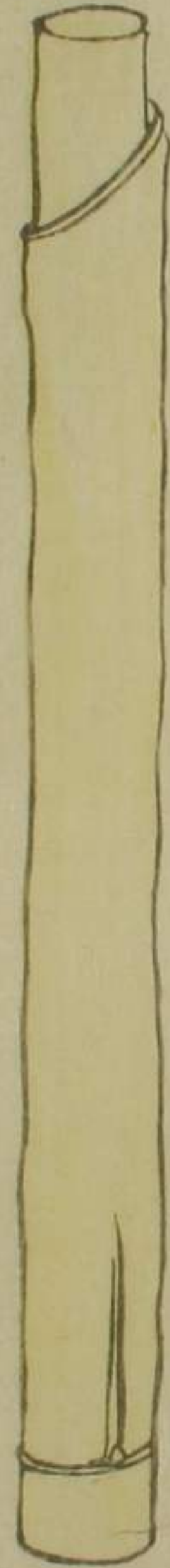
面



背

沙金筒

三貸圖彙所掲の圖あり



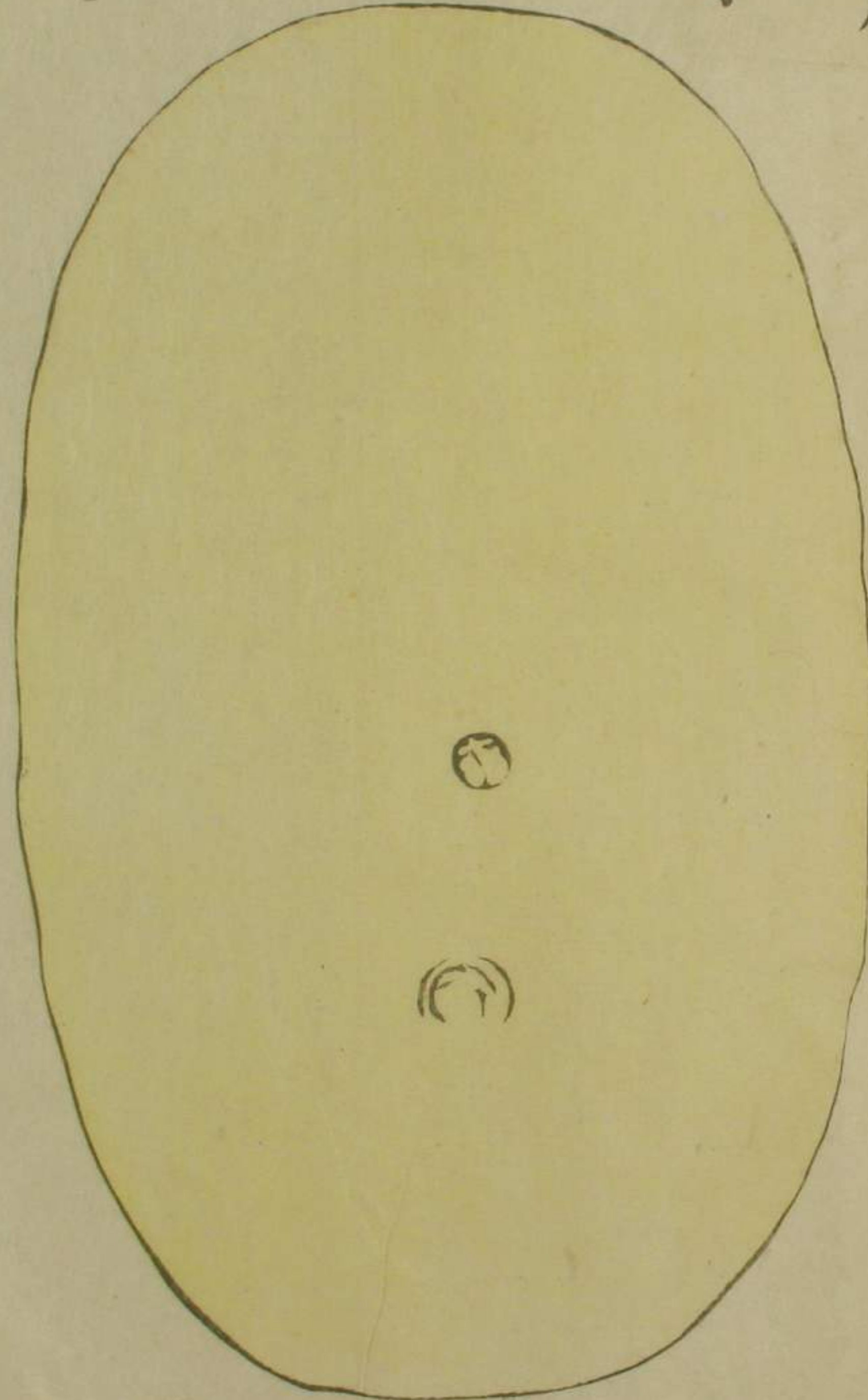
天正大判金
造幣寮所藏
の品なり

面



縦五寸六分五厘
横三寸四分
重四拾三匁三分

背

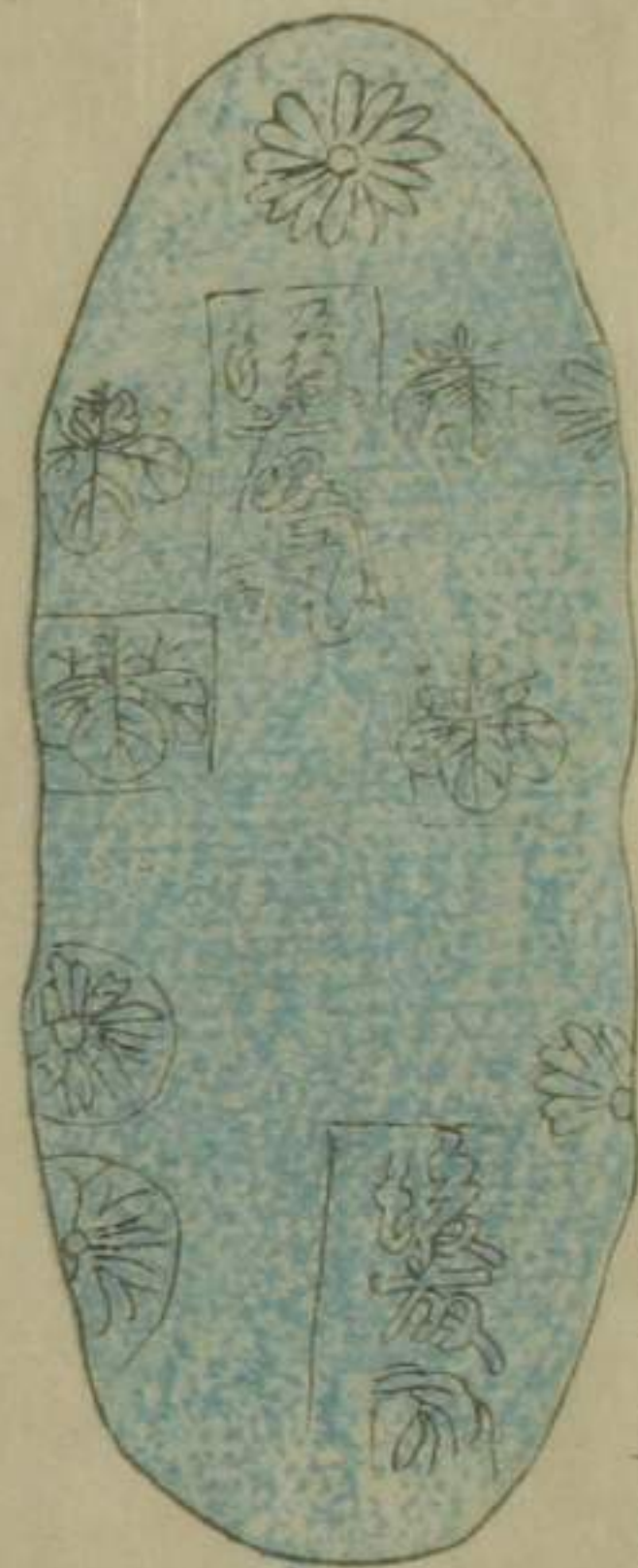


古丁銀

三貨圖彙所掲の圖あり

縦三寸二分
横壹寸二分
重四十三錢

面



背

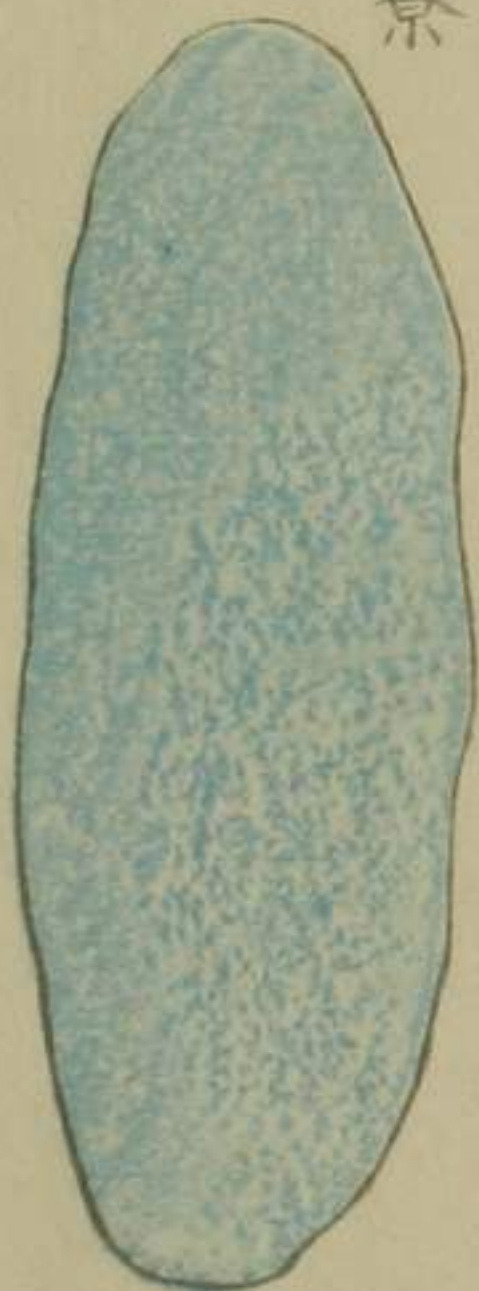


慶長丁銀

造幣寮

所藏の

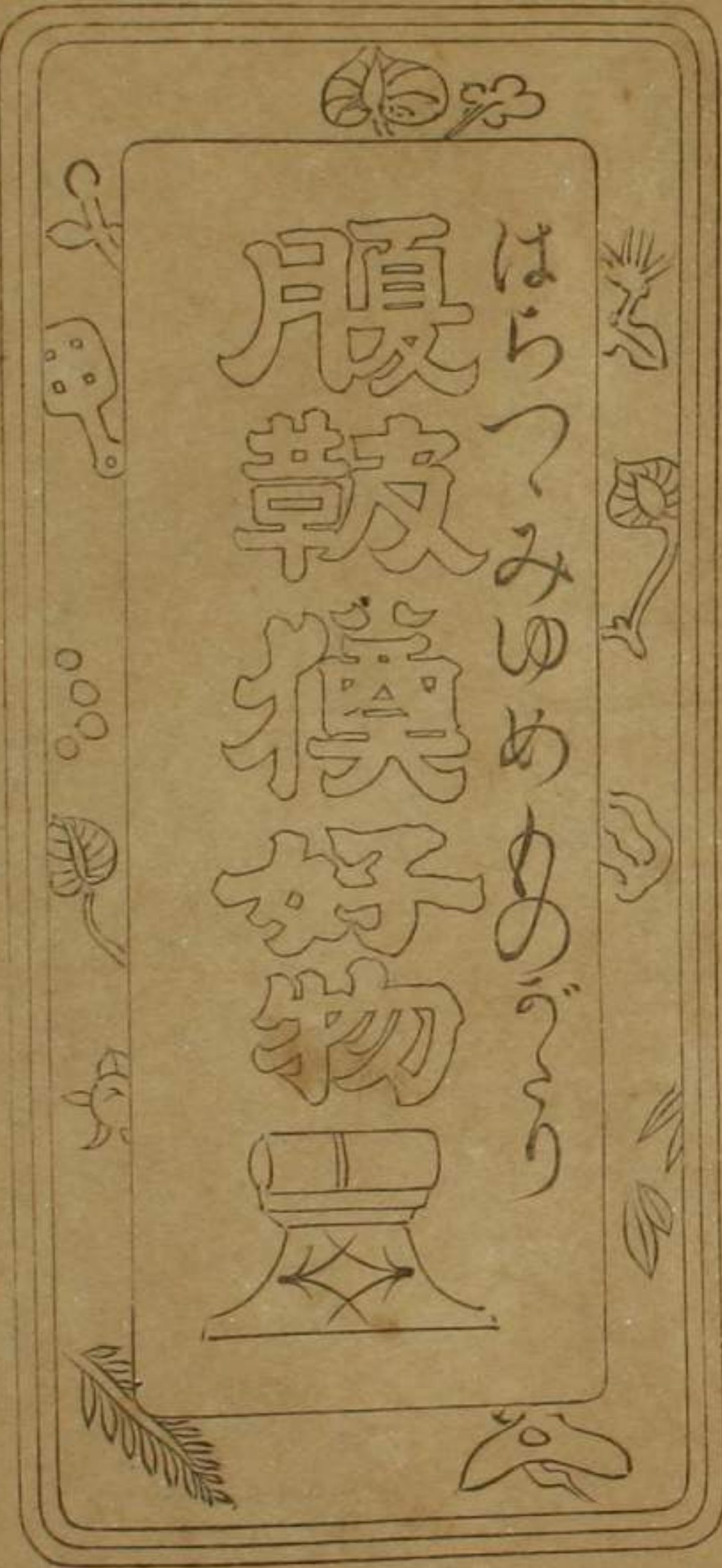
品あり



縦貳寸六分五厘
横壹寸
重三拾九錢

○幕末の政治的狂書なり井伊氏遭難の頃の世相にして櫻田の變、

薩幕の關係、横濱の貿易商、物價騰貴等推考すへし



夢の懸へる間にまどろみ「都府の塵土が夢は五十年の榮華を見しは唐人の寝言は同じ浪花なる松岳山人去年の冬ホンネらいめに大三十日寄せくる
敵を口先で道ちらしたる宗祖にホットつかれて骨杖まどろむ夢のふしきこそ編て兒童に見せければ我もくど望まれて今はあたまをかく斗星デヤ
困ると板行して諸君達のなやさまに出して見せるも見る人も得き」をさめて貝給へかし願升

さまくの事を五願に煩ふも覺て日出度あけの春かな



「コイツにあつた
らかなわんく
もふあやまつて
早ふにげにやな
らん
コツイ
ハア

「ひなさんも
此雪でつめ
たいく

「これをもつ
ていられん

「此せつは
ふとごろ
がだん
くさび
しくなつ
た

「おねにづがあるゆへく
びをどつて
さらへるの
ががんくびもどせヤイ

「此清書はよのじがえい

ゆへ書き直し
たらよがよ
うなつた

「ほうとうもマア無事に
仕あがつて
めでたいく

「これもおづま素立だ大切ない新
はふまぬがよめをあいて見よ

「これの生れば西園だ其
大事の苗をうまつにし
たらこれがかんく

「勝手にせつあいらせ
れもじろもない
どろろんでじつとしいよ

「世間の爲にはりがみ
をしてたこ

用心にさをつけてやめ



「いたいめにあわぬ先
どころへにげにやならん
ゆるせ

「世間の爲にはりがみ
をしてたこ

用心にさをつけてやめ



「これま
でつれ
てのぼ
るのか

「皆の衆こ
ざれん
もふ下り坂じゃナ
ヨトやすんでいこ



「こんなやつめ
まこたすため

正直なまこ
せうか

「うきもつて十ッのつか
のまこたへより合じや



「家おくだけて
かなしやく

(九)

玉命新片 木槌心
卷

此言清祀：卯

舟部第二百八十三

凡舟四字

舟 之由心書者濟大川用汝作舟楫周易黃帝創木為舟
毛詩就其深矣方說舟之傳曰舟楫也又曰船舟字傳曰舟

人主濟渡者也山海番禺是始為舟世本共鼓貨狄作舟
墨子巧倕作舟呂氏春秋虞枸作舟考工記舟以行水暉

人之作也尔雅天子造舟諸侯維舟大夫方舟士特舟韓詩舟
滿水中曰造舟方言自關而西或謂之舟或謂之梳說文象形

也周礼雞彝鸞彝兪彝虎彝蟺彝皆有舟鄭眾曰舟尊
下臺若今時養槃也毛詩向以舟之惟玉及瑤傳曰舟槃也

玉篇六

若身之有二耶一可終
 十日拂若將為人所
 留之意如得是已此
 山樓石川西十德波
 過仰望中意如

京師真報寺沙門慧如少精勤苦行師年行川行川之反
 奉道至法海大系中因坐禪定過七日不動亦皆歎
 異之以為入三昧也既而慧如開目涕泣交流偈尔恠因之
 登日火燒脚痛待視瘡畢乃收尔逾恠可甚如日被响罪
 王法川道七日南王閃頭見先王之知識如登日欲見二人
 王之遺像一人唯見羅木祇慧如之目中後出而去又一
 人名云罪重不可喚令就見之使名別慧如至獄門之間
 甚固使者喚守者有人應聲使者悟慧如師急趨道
 某為門立如始避而門開大火從門流出如鍛鐵為一星迸
 着如脚如被拂之舉目視門已閉視竟乃曰相見王祇
 銷州近固解不許云已遣遠後持亦僧爭往後方視之則
 銷在床矣王脚燒瘡大如錢自餘日乃愈武志初碎其
 碎為之念化後者是也

此書臨外祖音云所立常所遊觀每聞蜀氏
 說立尔

玉篇卷第廿二

凡十四部
六百卅一字

山部第三百卅三

山部第三百卅四

嵬部第三百卅五

山部第三百卅六

厂部第三百卅七

厂部第三百卅八

高部第三百卅九

危部第三百五十

石部第三百五十一

磬部第三百五十二

佀部第三百五十三

阜部第三百五十四

隄部第三百五十五

土部第三百五十六

山部第三百卅三

凡一而卅七字

山 所問及頁易艮為山周禮大司徒掌辨其山林

鄭玄曰積石曰山韓詩主高大有石曰山說

文山者宣也宣氣散生萬物有

石而京也廣雅山產也

獄 凡角反尚書二
貝東巡狩至于

岱宗五月南巡狩至于南岳八月西巡狩至于西岳
十有一月北巡狩至于北岳尔雅泰山為東嶽霍

以礼有三讓達國死三五列三賓者政考子礼
 大祭鄭玄曰言礼者陰大數取法於月也方言
 祭分也曆日祭郭璞曰謂分昏也皇名為祭字
 音所令反在品部祭老不文曰為祭字音楚令
 反在竹部

玉篇卷第廿二

玉篇卷第廿二
 月十五
 為典藥頭宅書

文臺は... 輪池屋代... 松浦神社古鈴...
 あら... 松浦神社古鈴...

肥前
 松浦神社古鈴

嘴ヨリ尾ヨリ三
 寸四分堅肉
 六寸中横肉
 六寸輪差肉
 八分長一寸
 五分



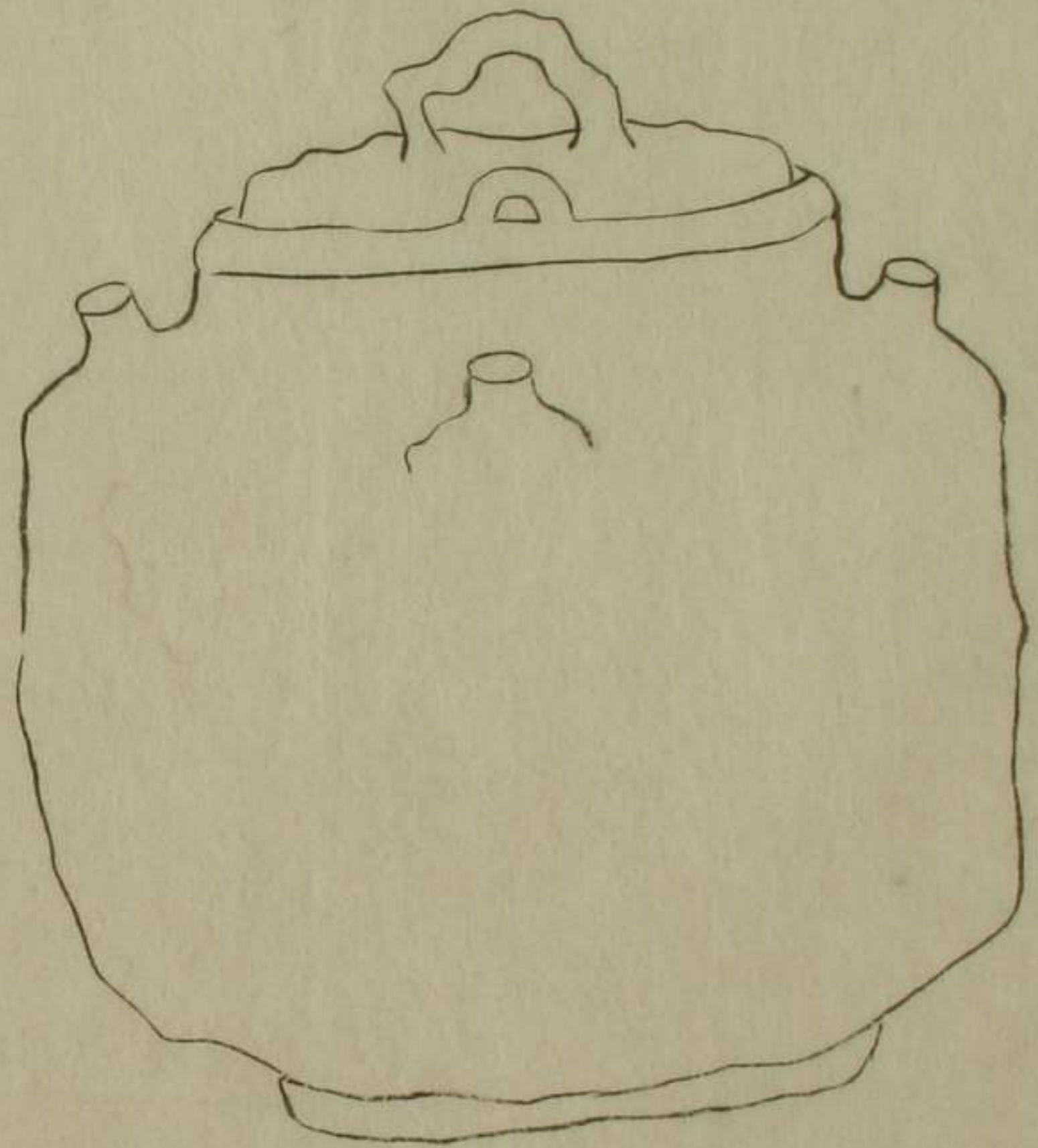
表



裏

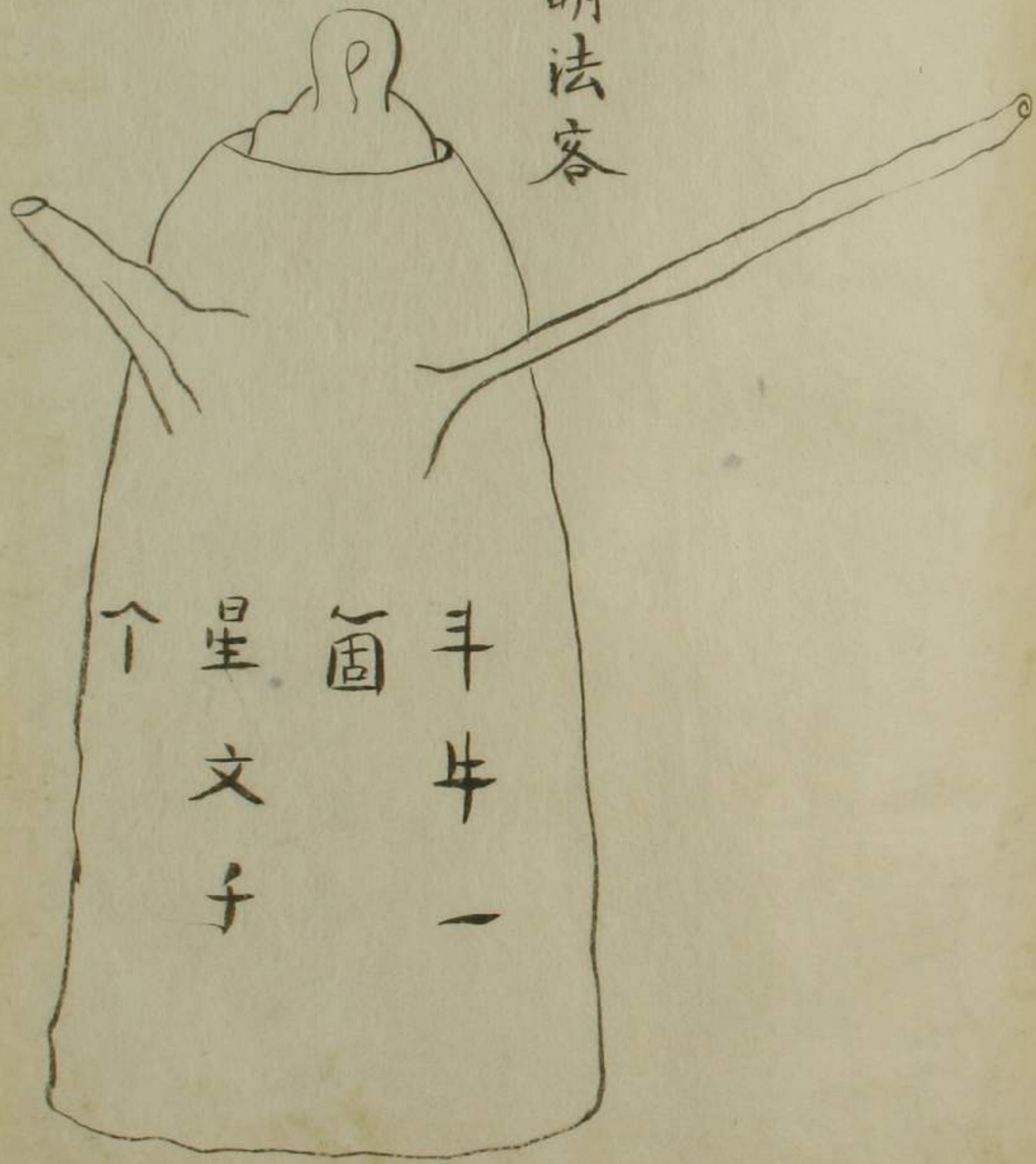
東山殿什物
茶瓶四玉呂
之內奇昌三
種

梅子牙
黃石裁

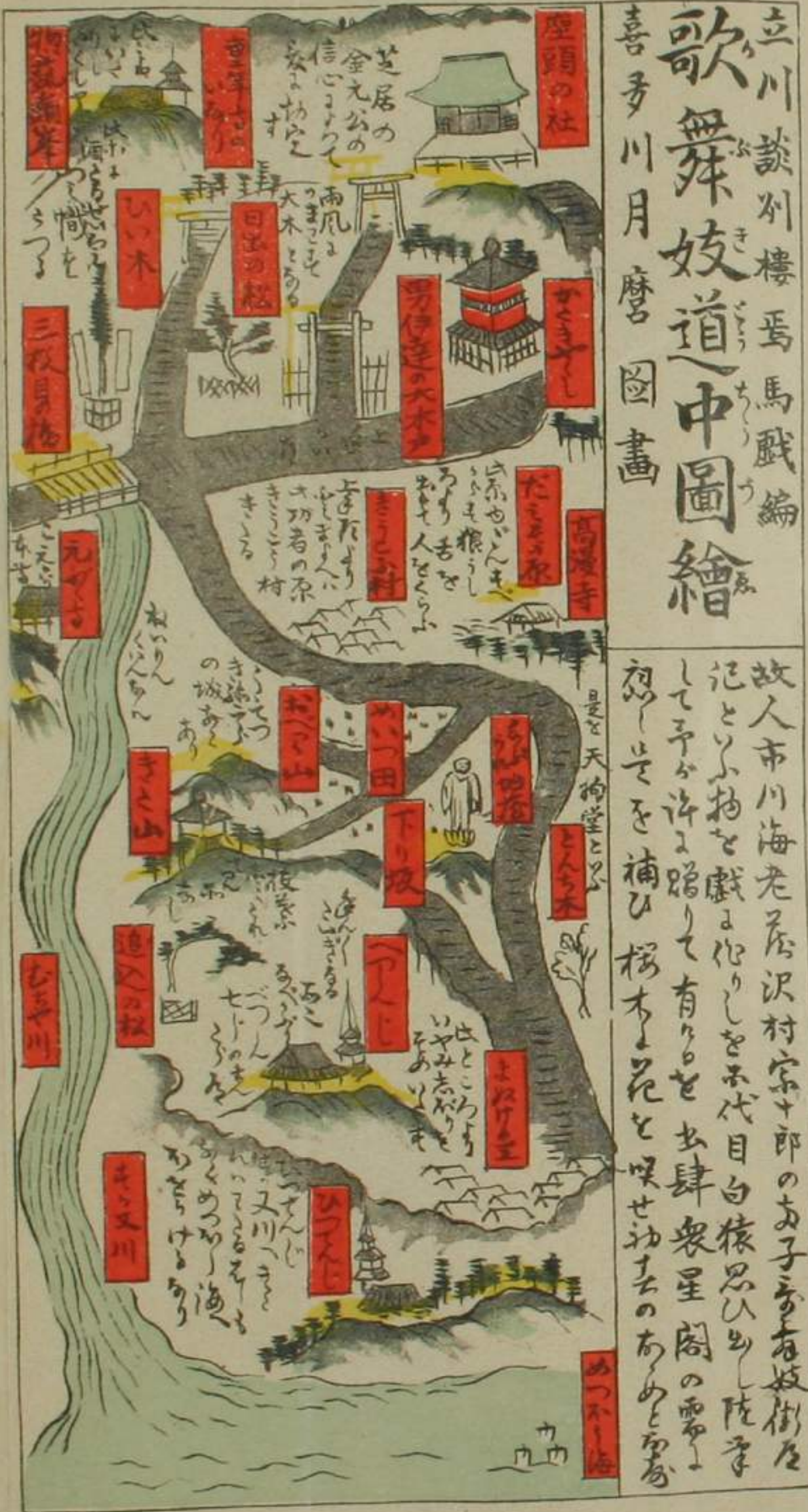


乾坤洞

明法容



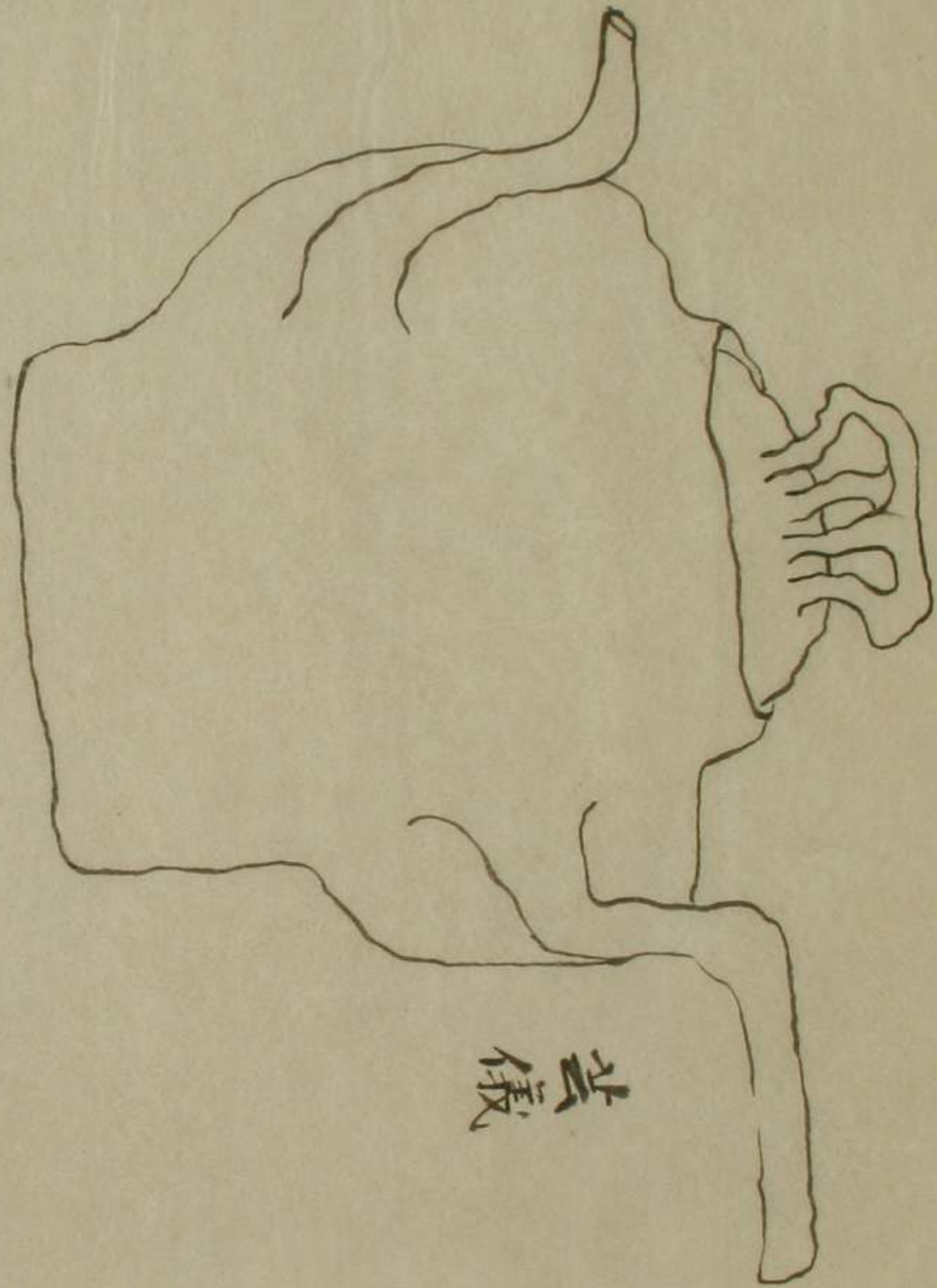
斗牛一
箇
星文子
个



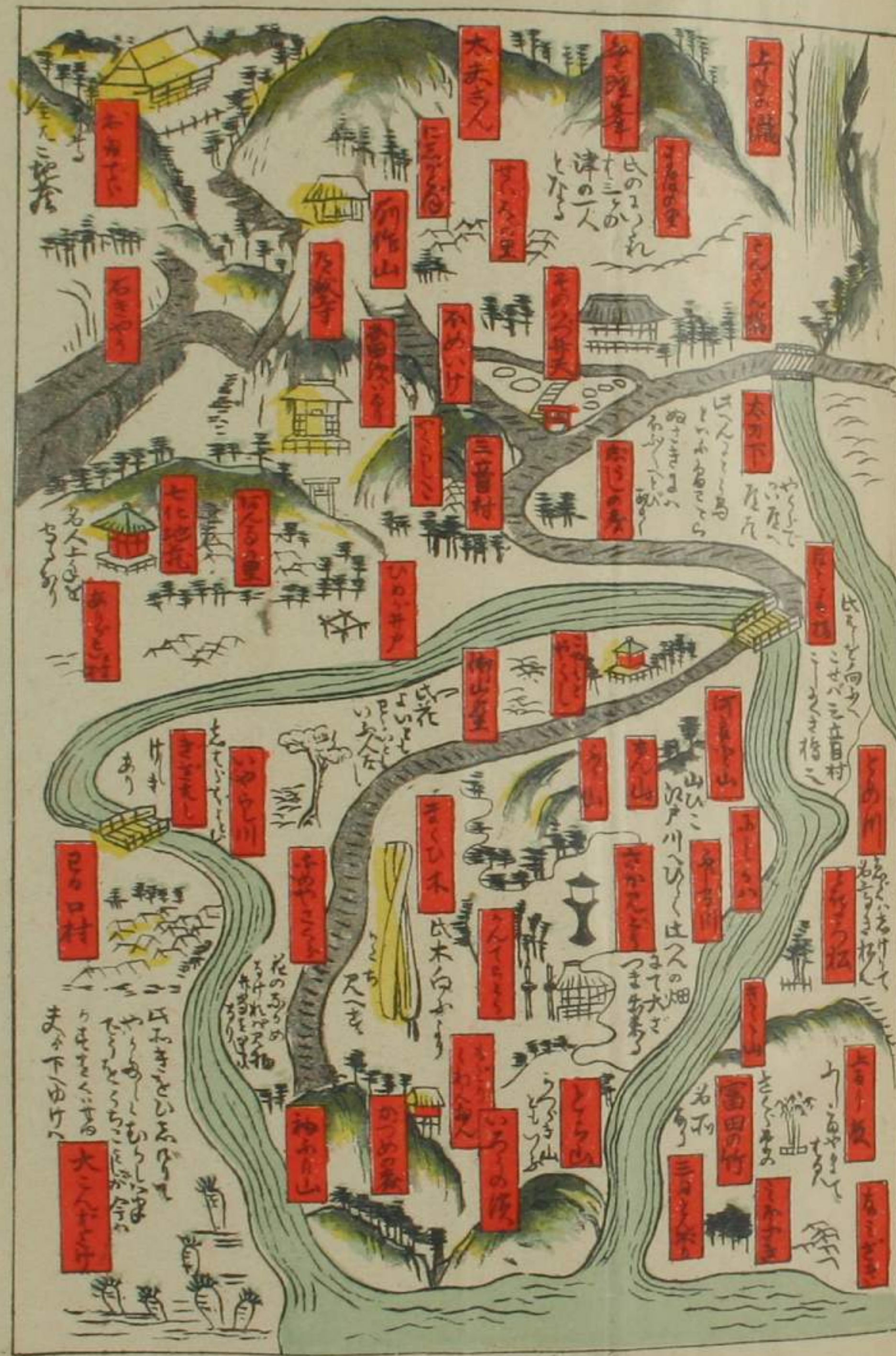
立川談別樓馬戲編
歌舞妓道中圖繪
喜多川月磨 圖畫

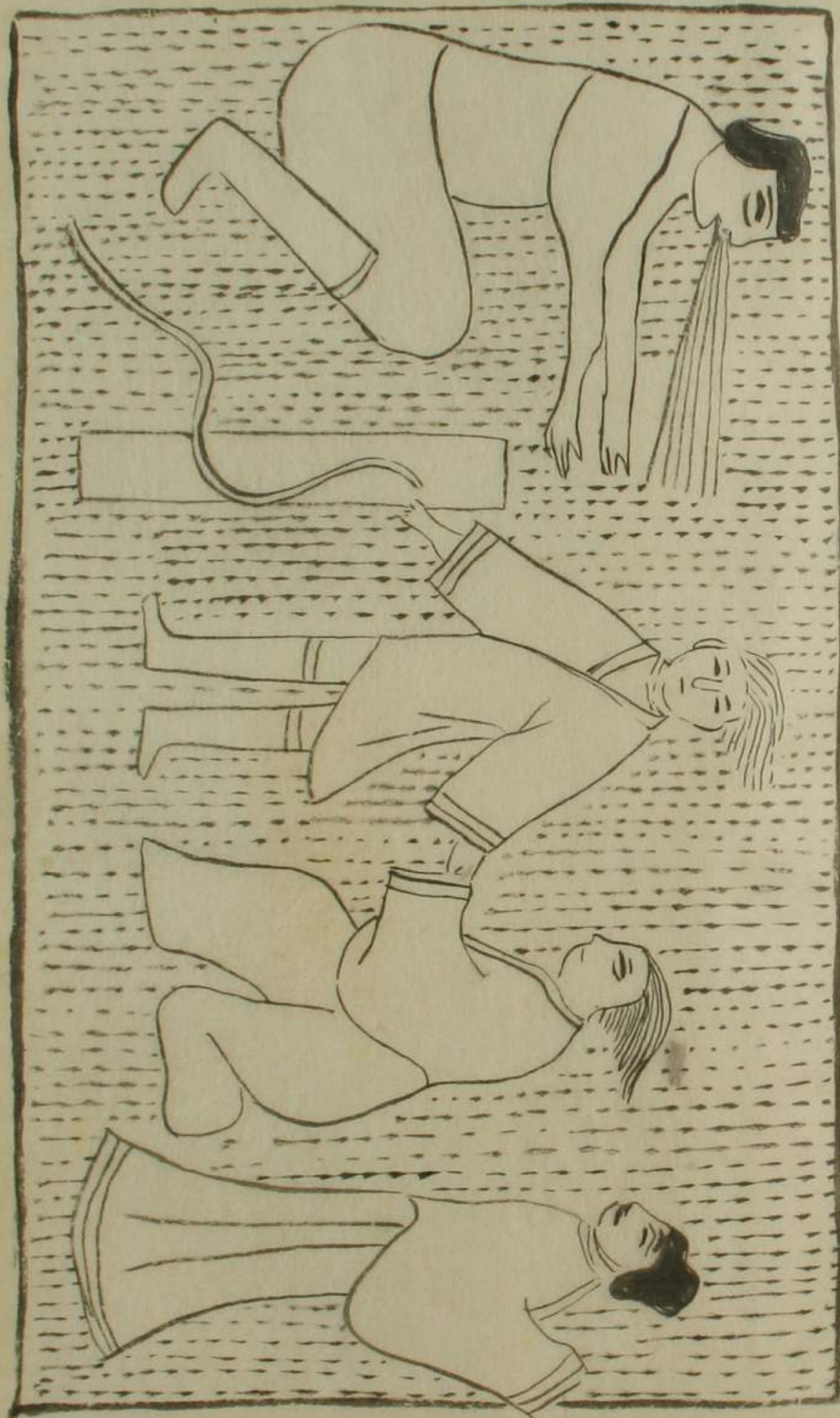
故人市川海老屋沢村宗十郎の女子が有妓街を
記といふ物語を戯し化りしを末代目白猿忍びの陸軍
して予か許し踏りて有りきと出肆衆屋閣の帯一
忽しそを捕ひ桜木と花と咲せ功主のあめと帯

川行今いかに後をしりて年ち好むに
ねりてしもの



此儀





吐火施鞭之狀

洪福院漢畫像石之

蘇祥劉村

斷雲連雁

法石玉珉銘龍鈕



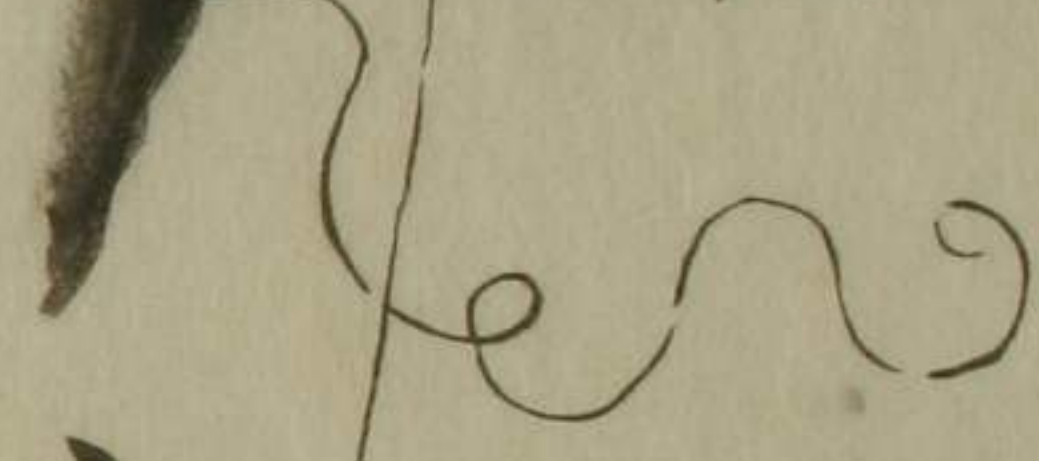
媚清詞館藏

丁未石自慎真後曰
篆於文字源室之
瓶梅玉環
七年老人好石坑造



石畫所載

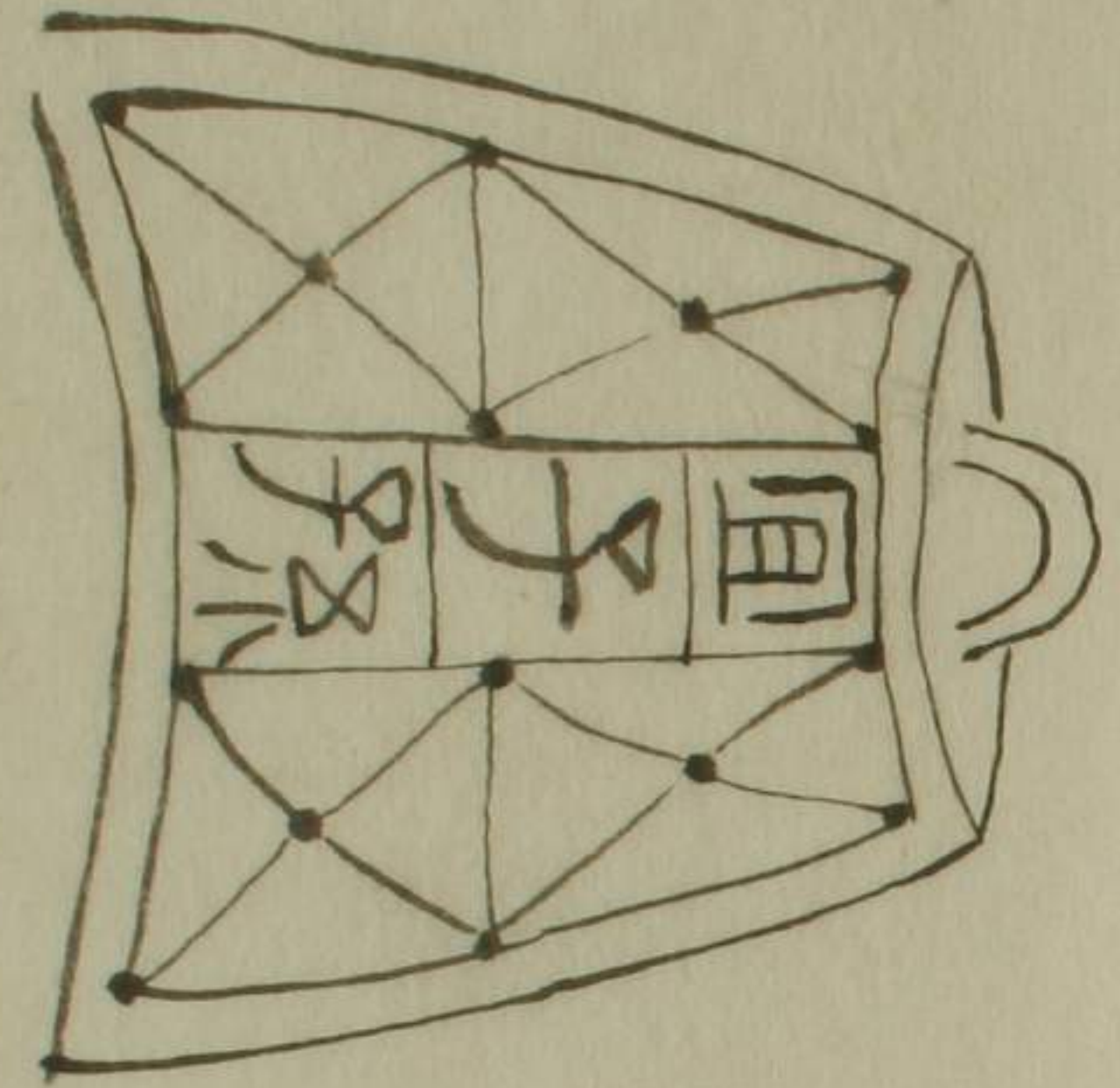
狀
牧畫子孫像卷



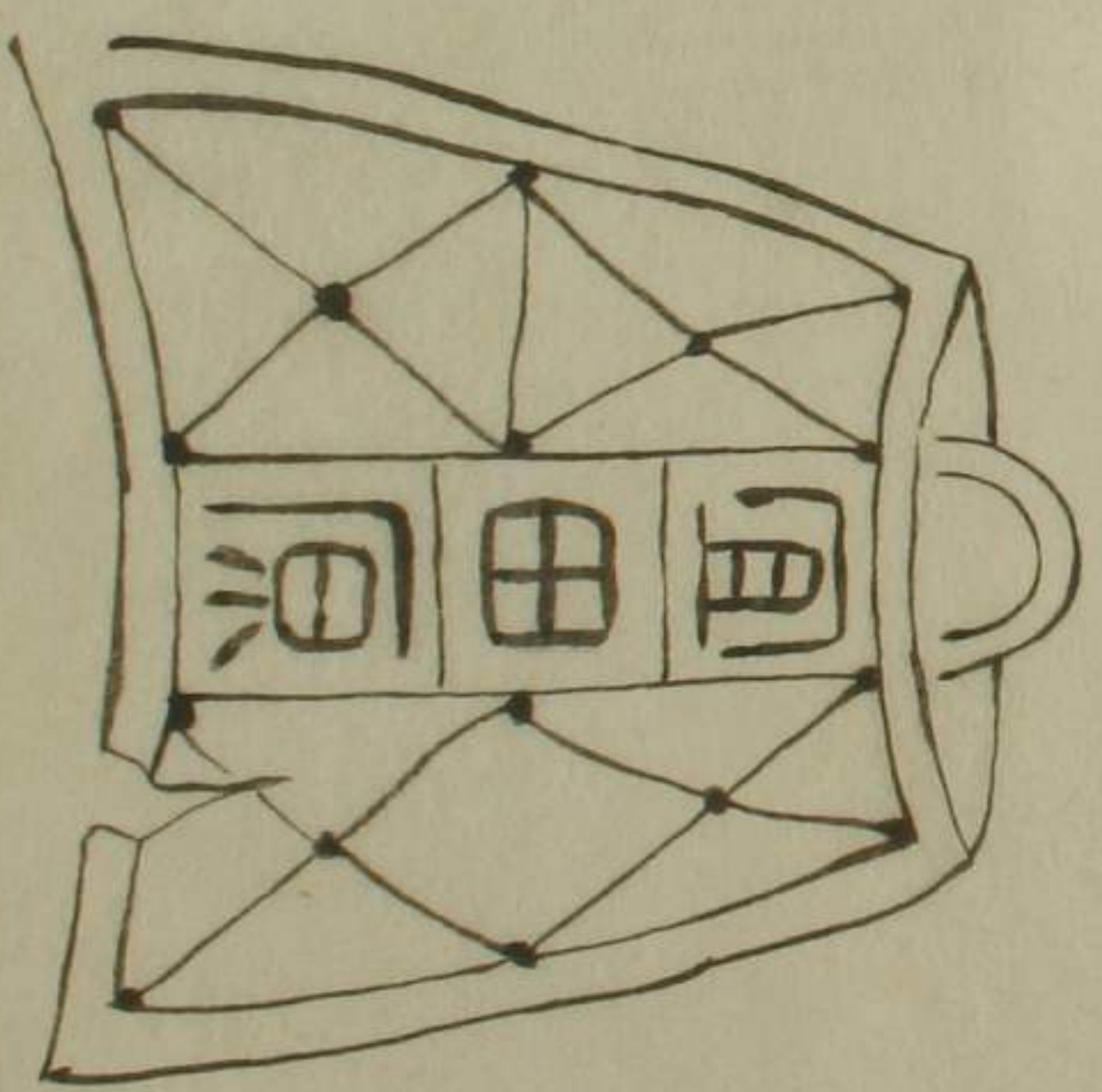
翻
漢不其令董昆



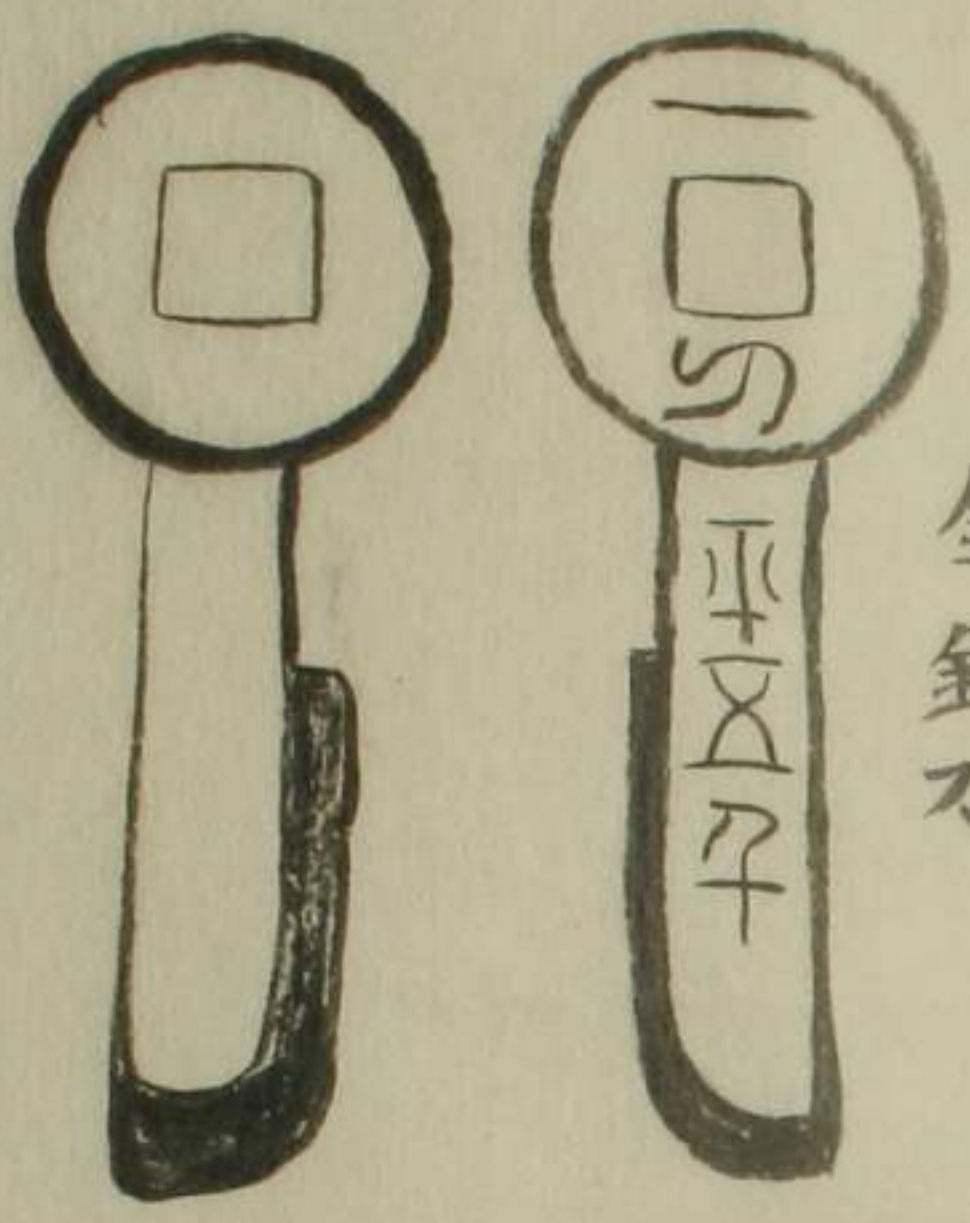
背
宜子孫
文



漢牛
宜田原
文
石畫所載



蕩心
錢時
代
丹鉛錄及
諸確類考
皆定之漢
制



金錯刀

蕩心
錢

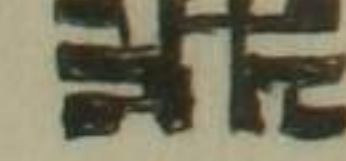
平頂



面



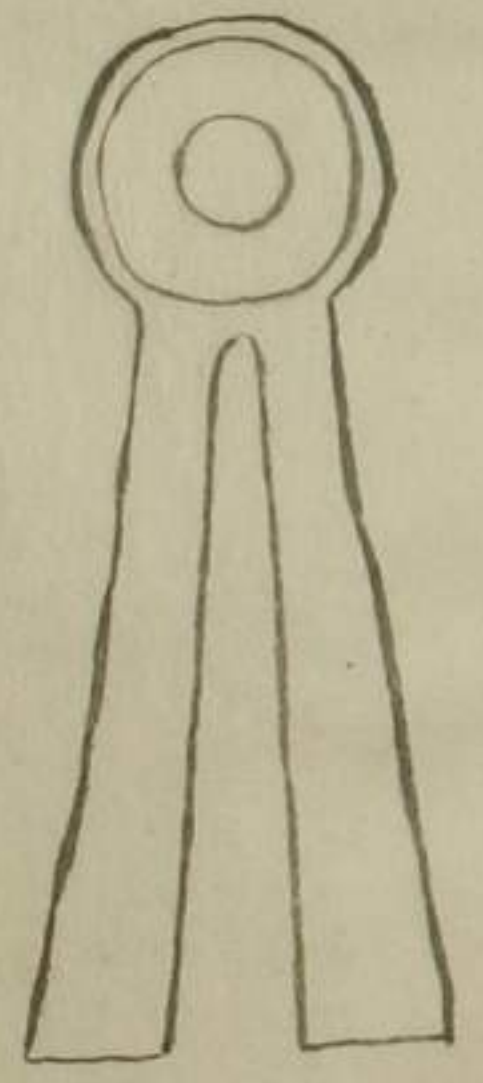
底



左側



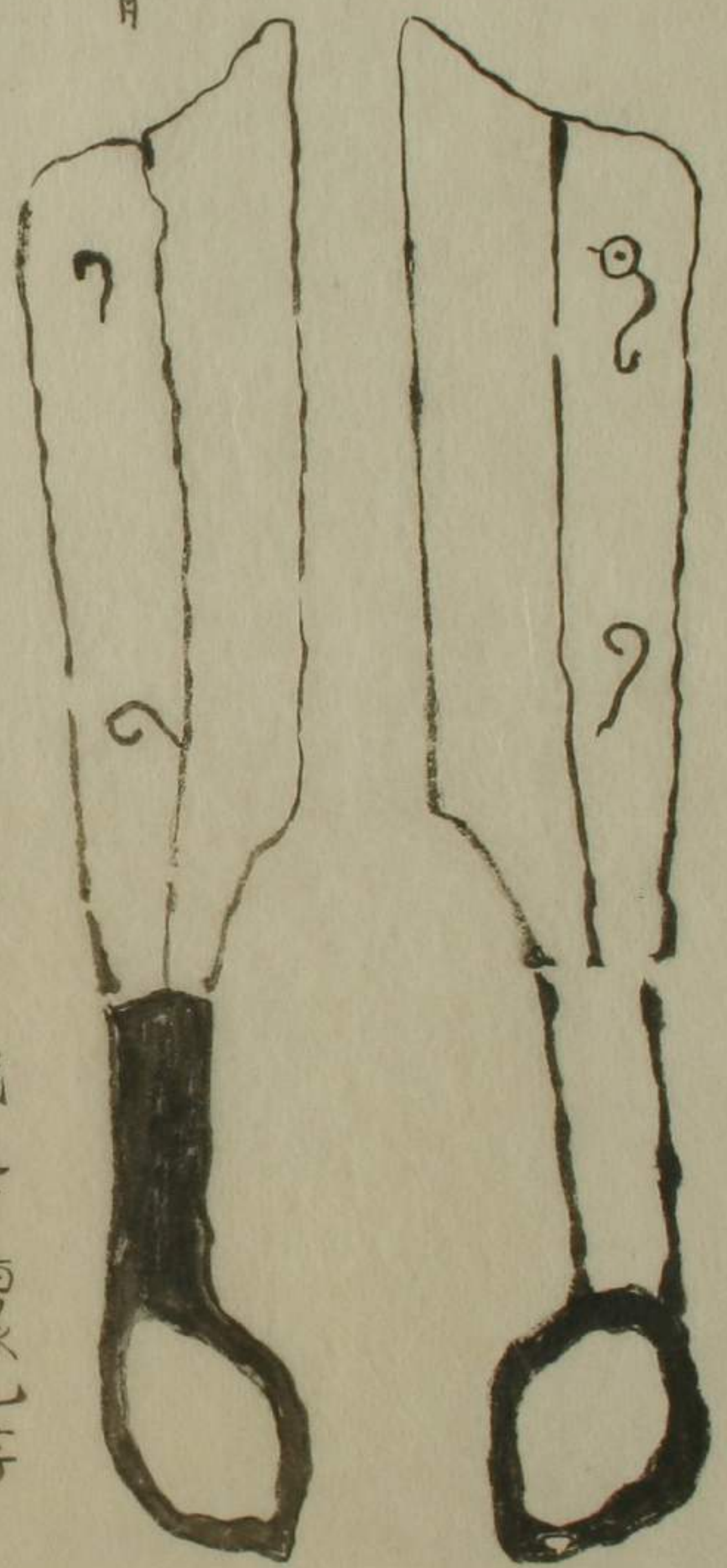
右側



錢如夾
而無文
甚奇

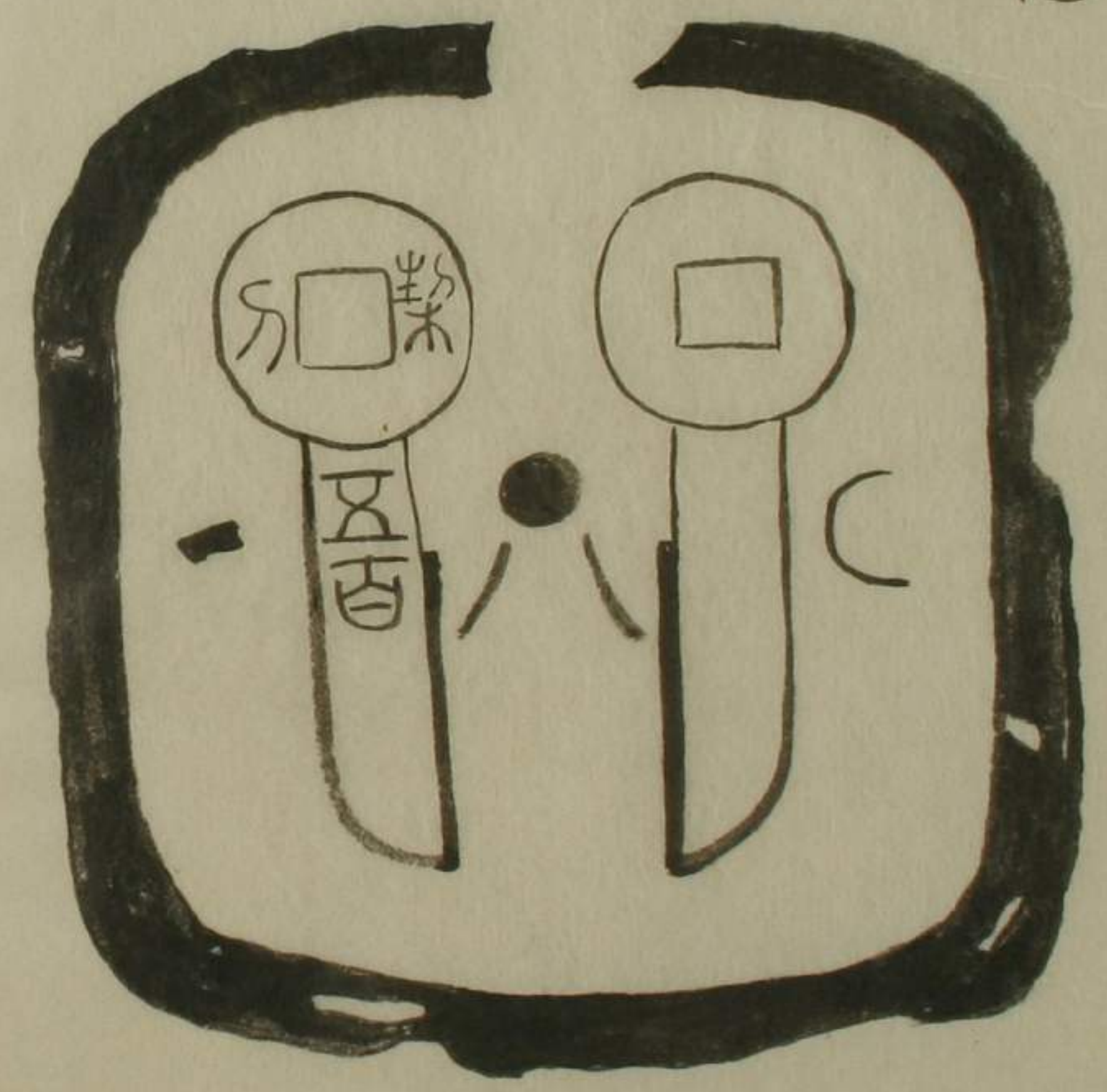
古刀

背



刀正背各二字不可識其首或走古鳥篆乙字
餘刺蝕莫辨今已而改

新莽刀范
所載





この四人の伝 (四の三十九年七月
十行新巻と掲げし也)

古き扇の画に書る

鎌倉に

頼朝の大将軍

富士野

狩の圖

ふどる煙の
まぐら跡し



とく
五取丸

少母乃其世帯稲を村山に送る所を記す
其のころは東の方ありてはあまのふり
け醒睡笑瑠璃をほく又やうちこれ万治三年上
せら安樂菴策傳七十年元和九年の作也写前冊を

醒睡笑瑠璃之五

娘

音治は女院へある時おぼろけなる
を所きふりありしに後始るれ
ん何ともいふありてたへいふ
わきどり。月くねんてPさ
さしつゝはよと作ある時
たは右のひきとふねい
わうかりておぼろけなる志
醒睡中
せら女院の作あるやうにこれき
いこおぼろけなる志
十六

時頼

おぼろけなる志

細川 忠実の娘

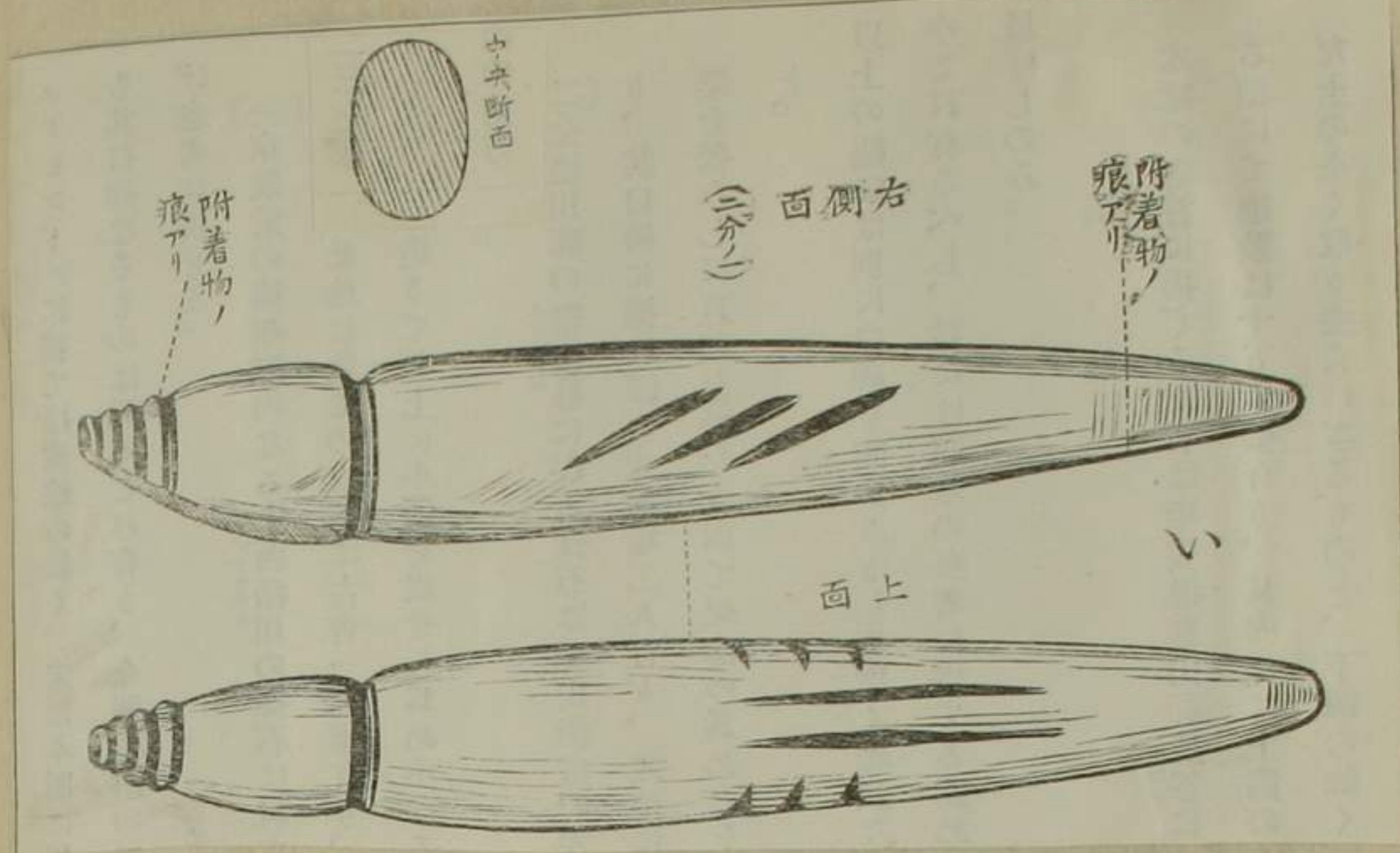
石椁のクコノ郡山慈道安平國韓



東京帝國大學理科大學人類學教室所藏 八木英三郎君撮影
石椁のクコノ郡山慈道安平國韓

Photo. by S. Yagi, Anthropol. Inst., Sci. Coll., Imp. Univ. Tokio.

Ancient tombs (?) at Nōkoku in the district of Cha-san, Phyōng-an, Korea.



魚形は湾の底を待つ

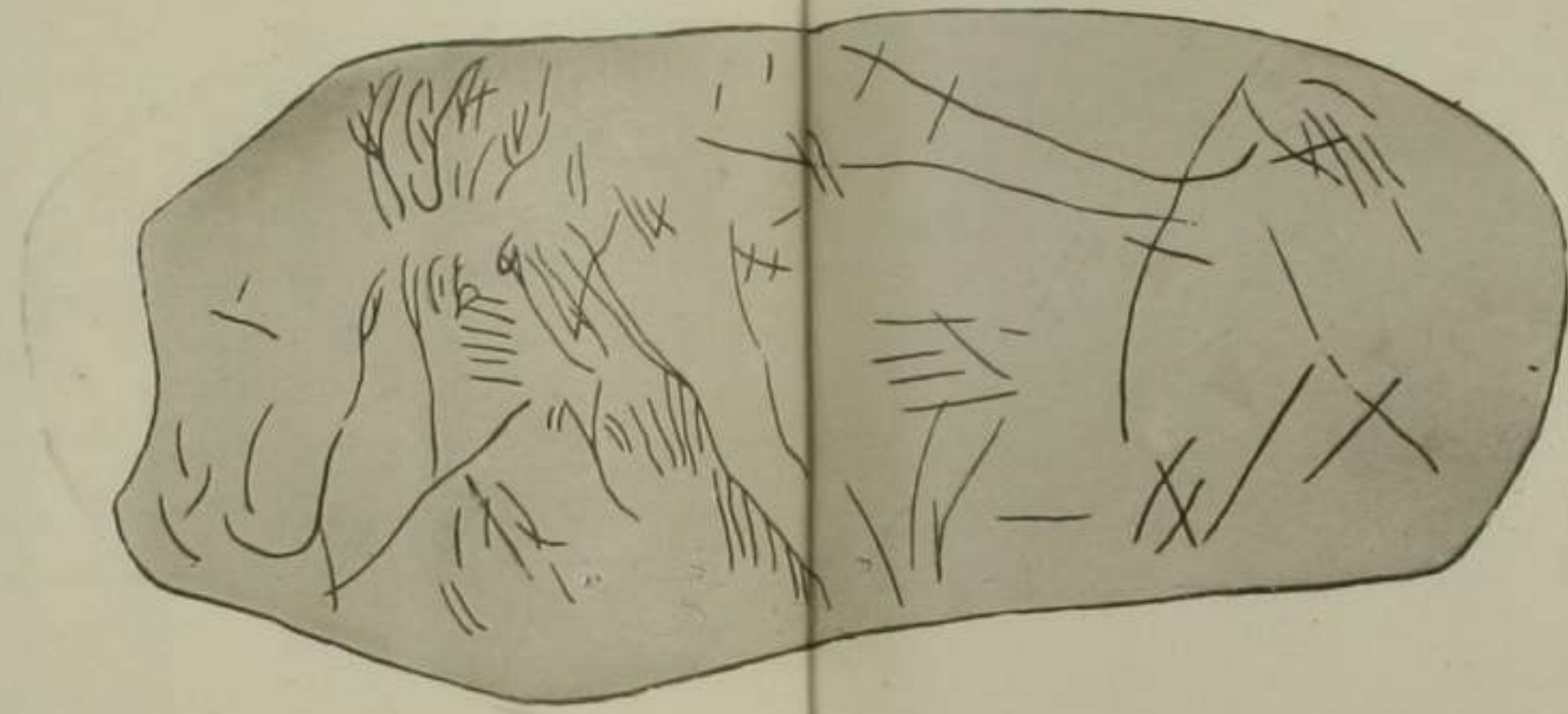
余思ふ是一種の漁具などにあらざるか、而かも其全體は魚形を象り兩側腹部の三本の斜線は鱗を現し其背の二直線は背鰭に象りたるに非るか、而かも其兩端に何物かを附着して水中に上下せしめ得べき或一種の錘石か或は魚形を模したる一種の釣具か、



四



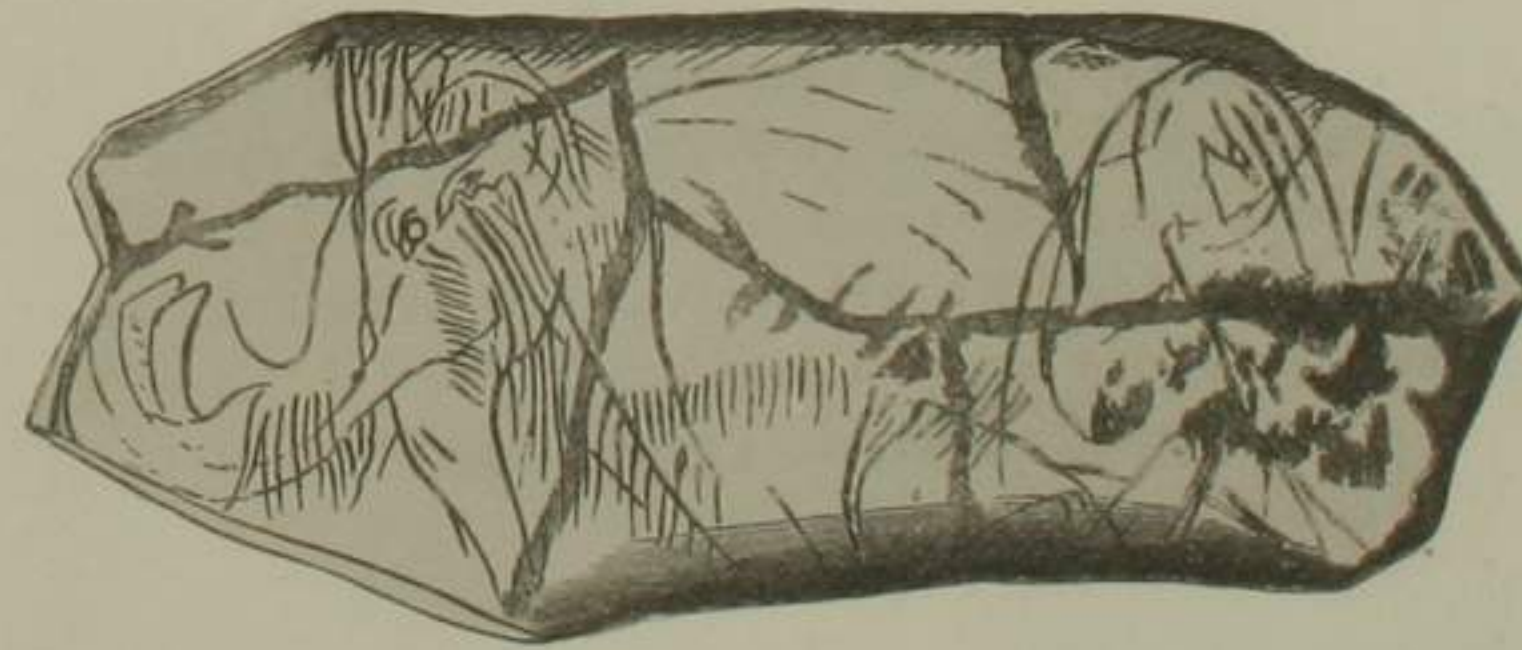
二



一

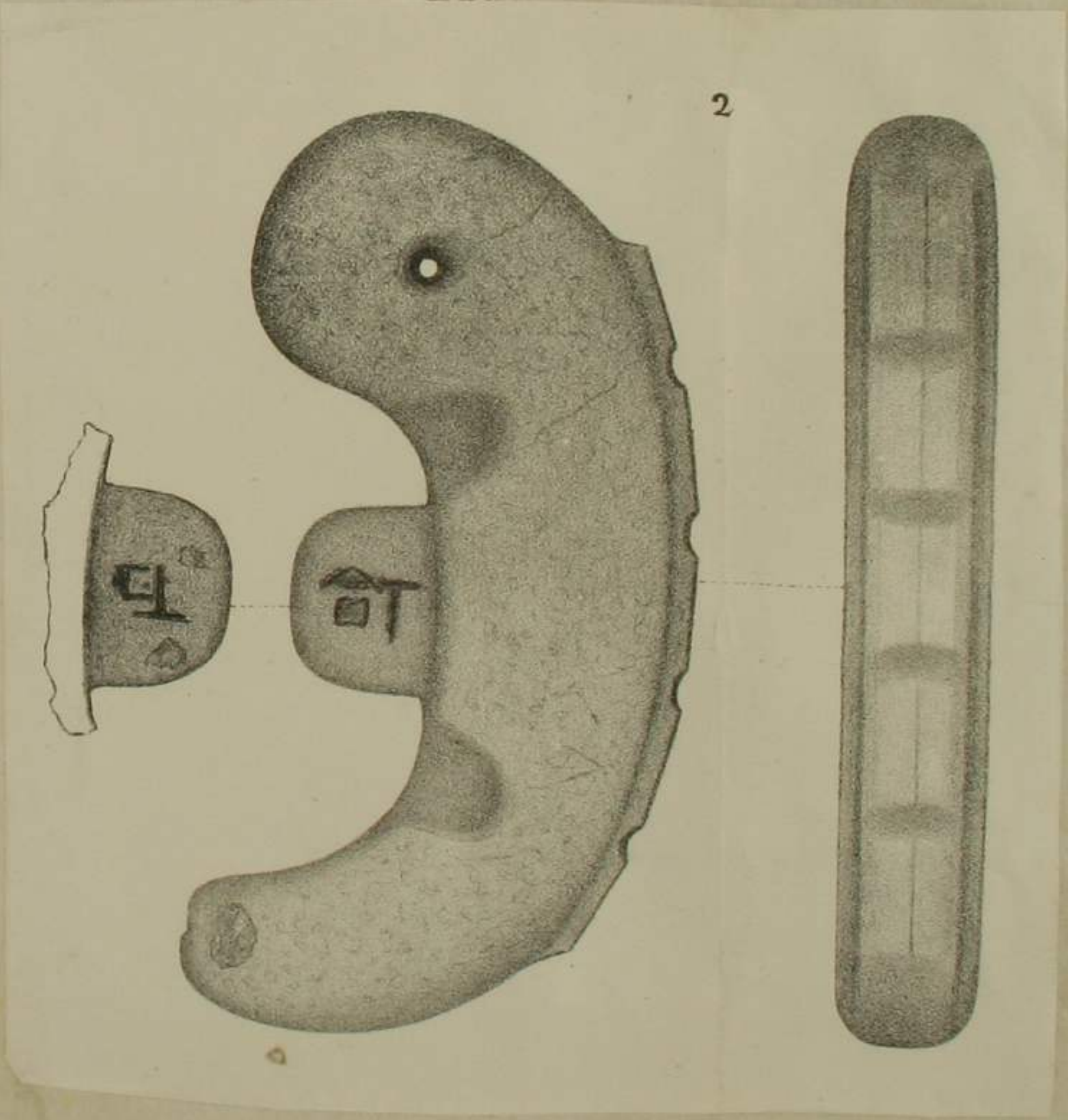
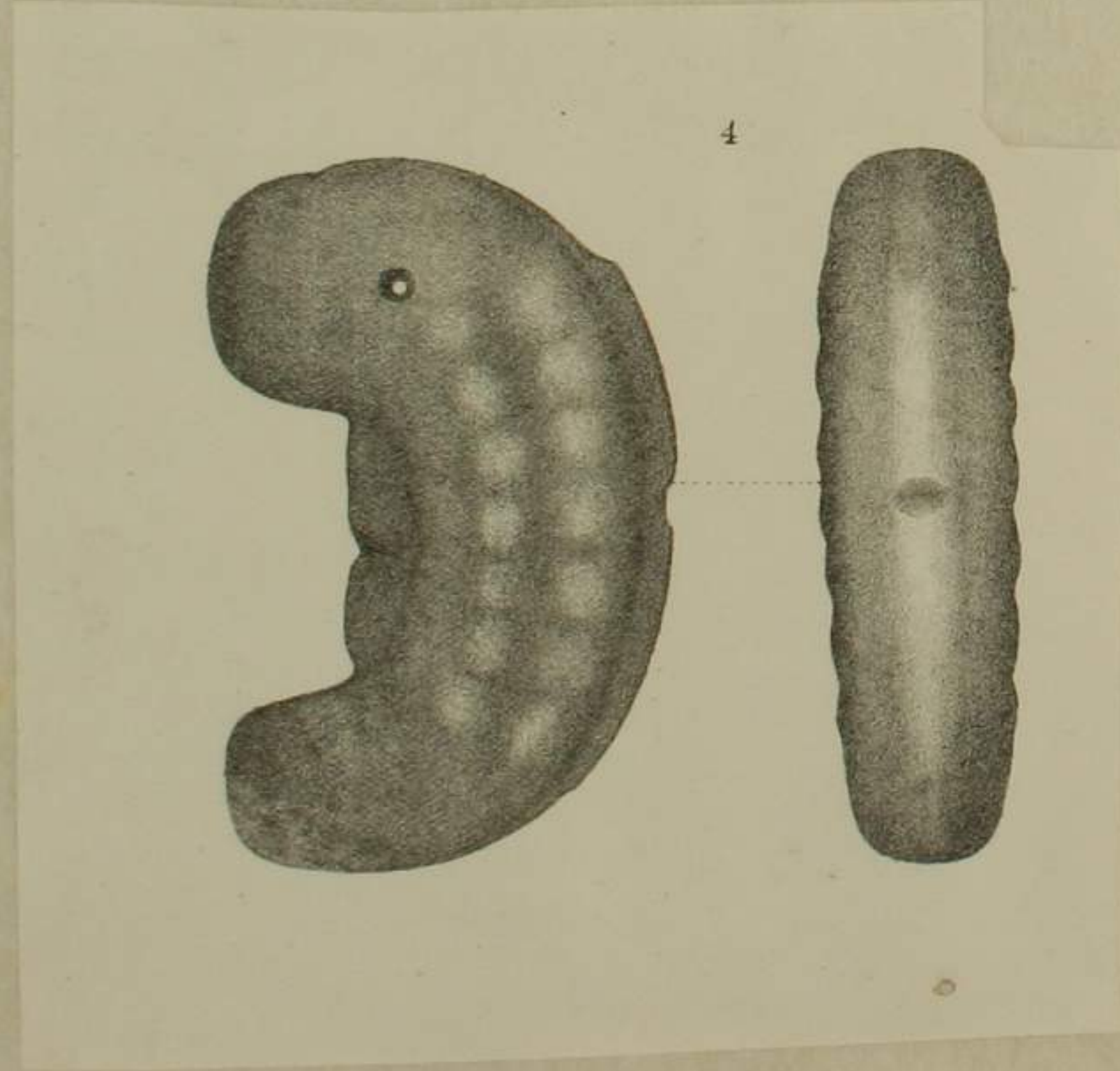
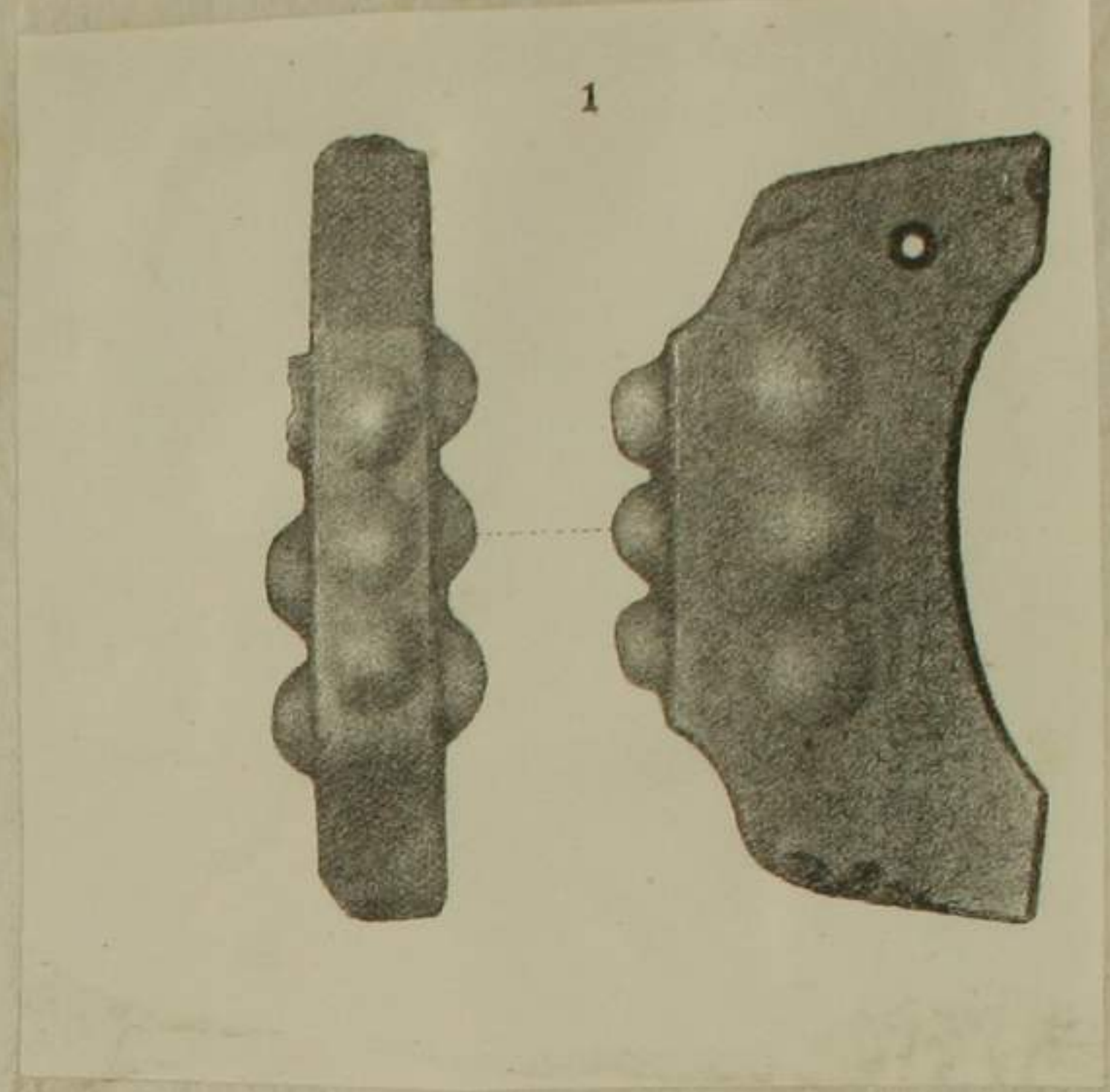
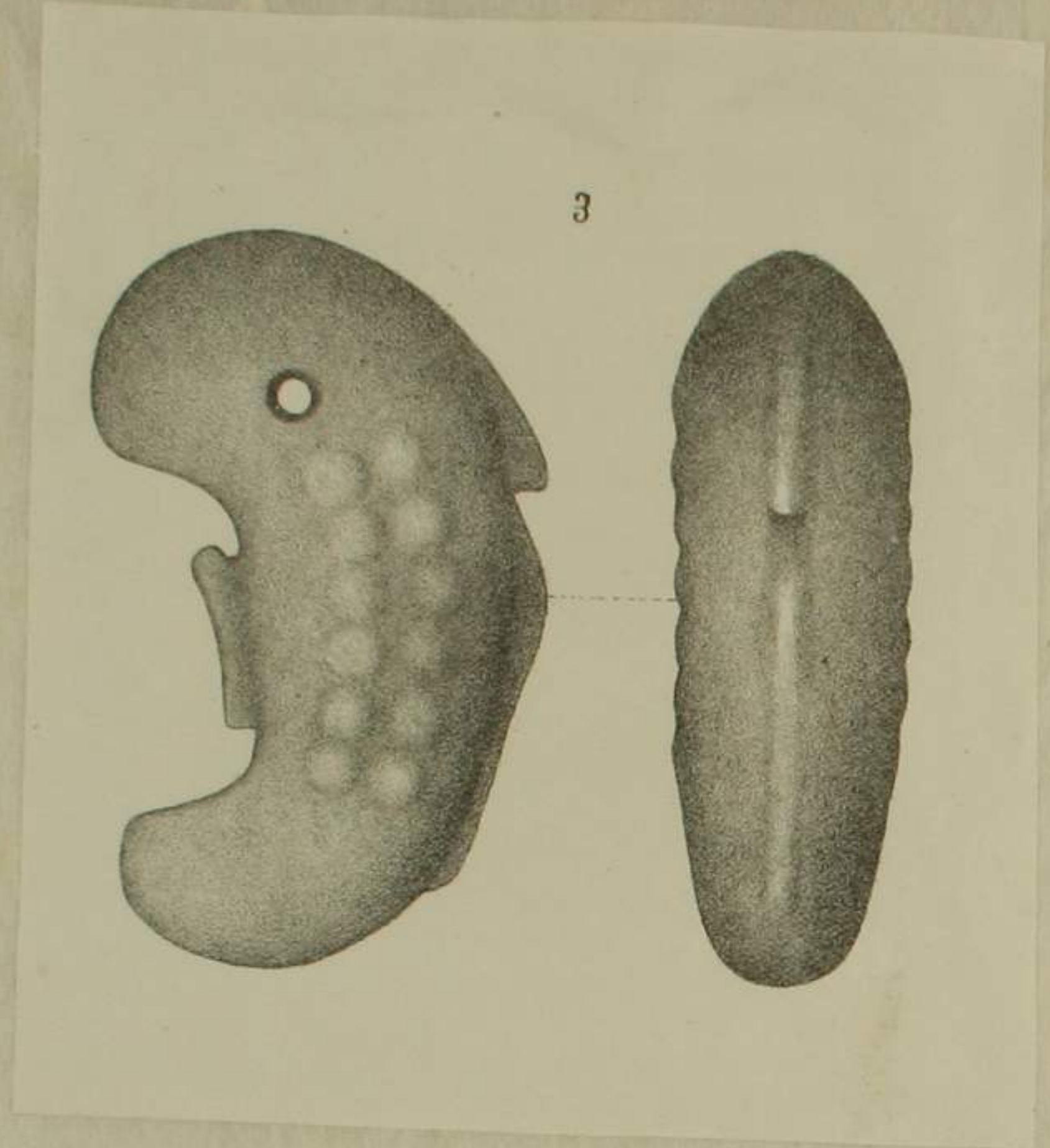


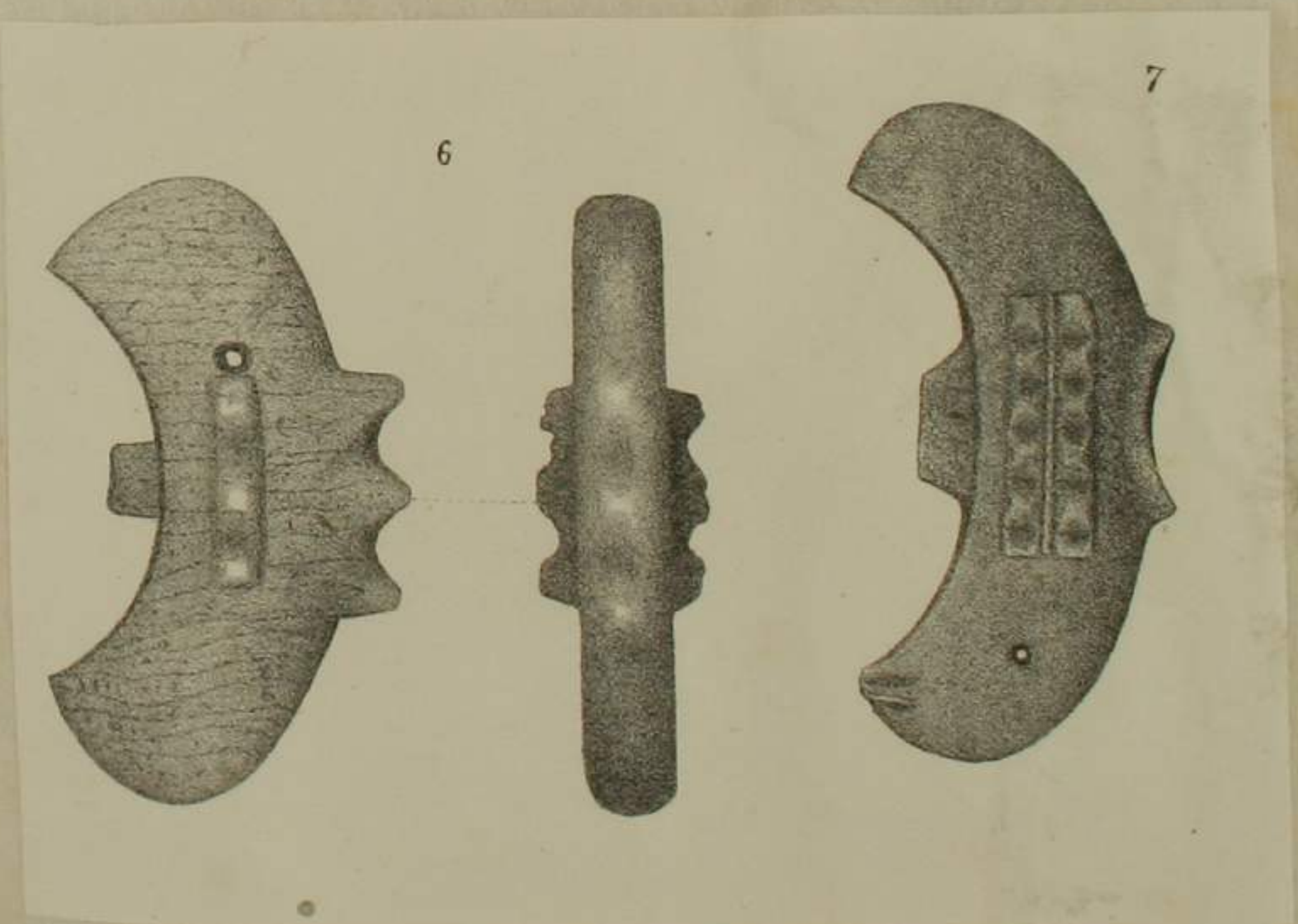
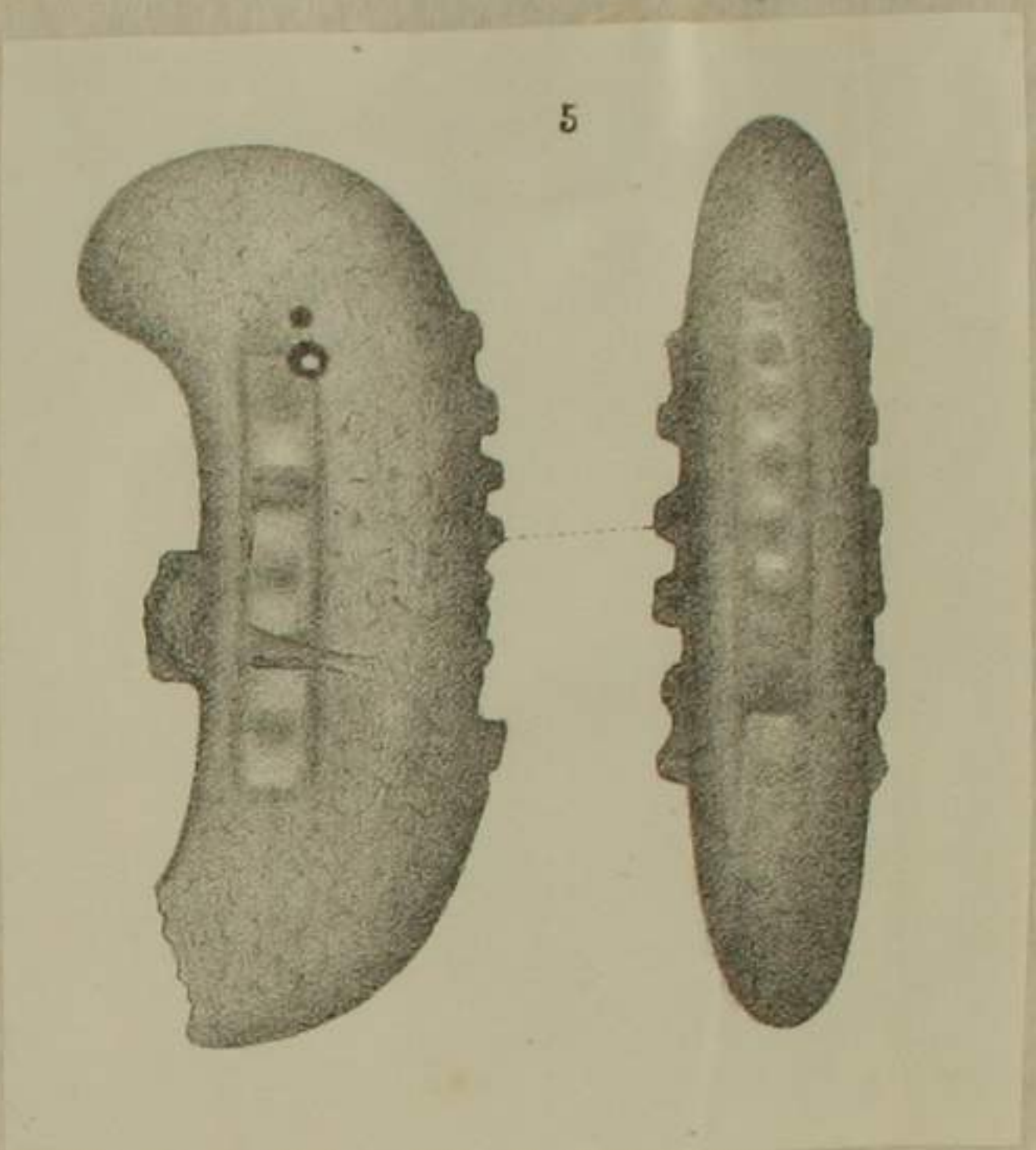
五



三

種各圖の牙のスムンマ

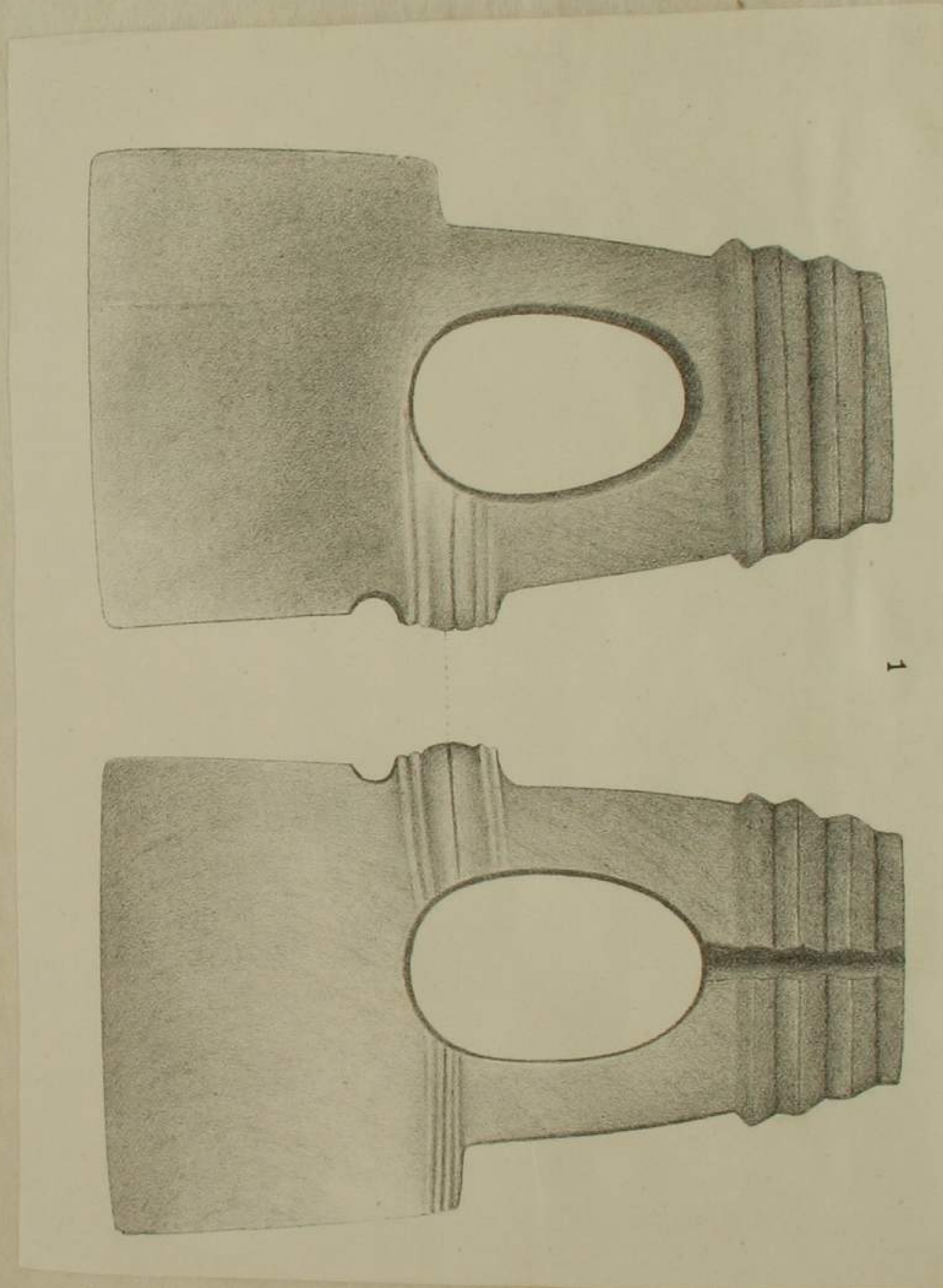
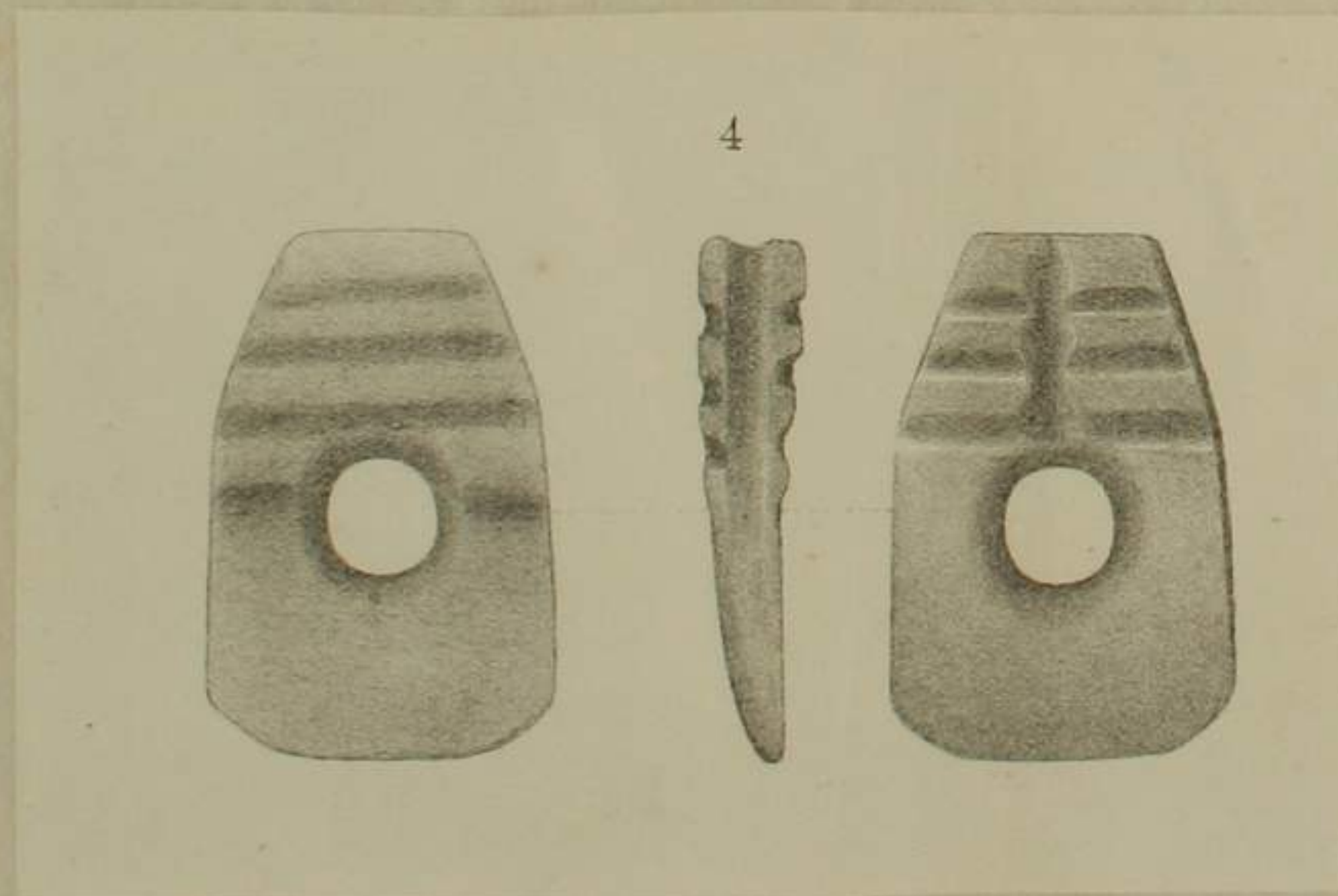
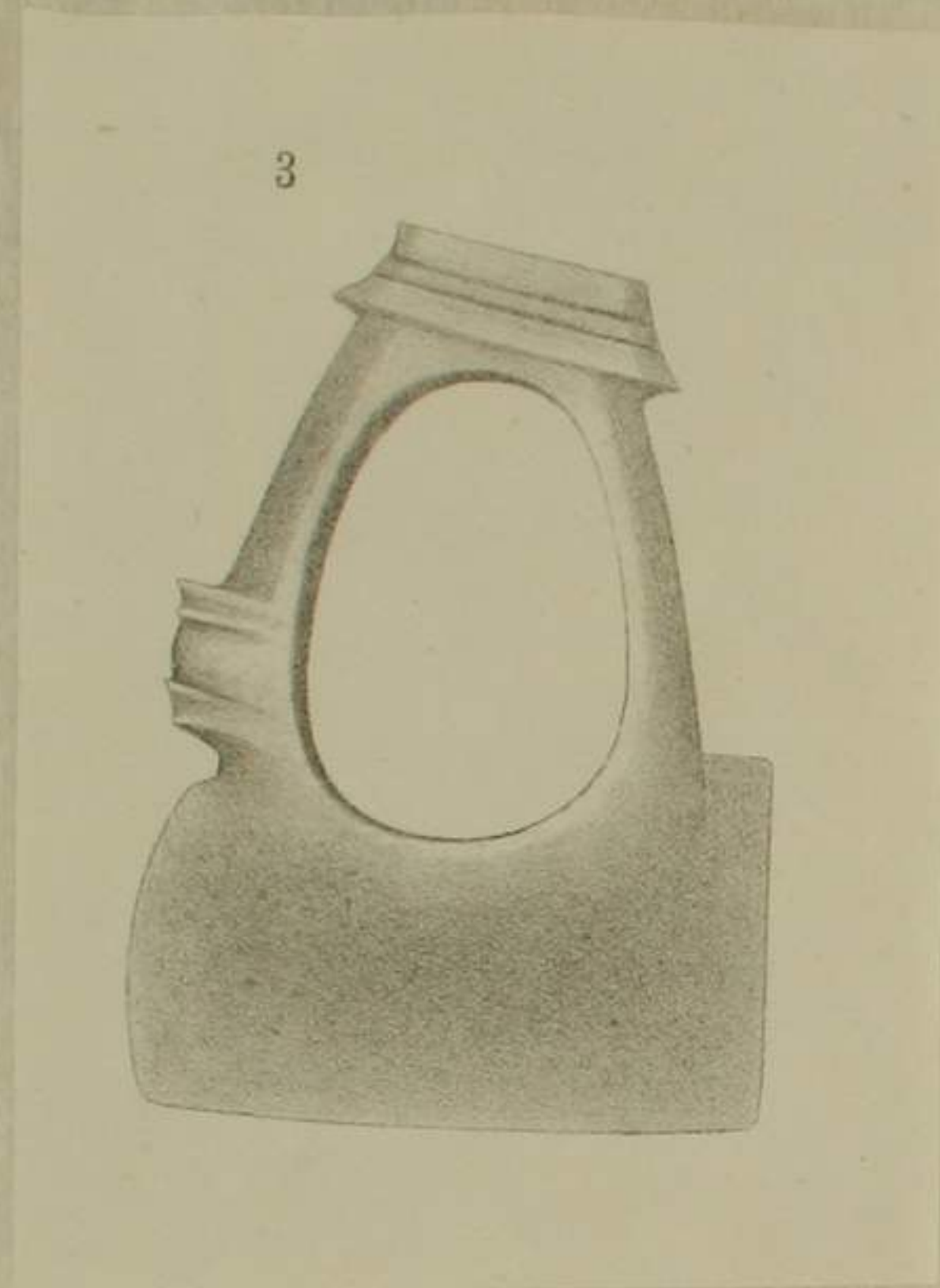




SEKIKENTO OR STONE DAGGER-HEADS.

Note.—All figures on this plate are drawn one half natural size.

- Fig. 1. Without any knob in front. Mica-schist.
 Fig. 2. Largest specimen of the kind. Lime-stone. The characters E and ŋ are found on the knob in front. According to Hirata Atsutane's "Hifumiden" and Ban Nobutomo's "Kajihommatsu" E has the sound of *to* and ŋ that of *ŋu*. The former writer considers these to have been ancient Japanese characters while the latter identifies them with the ancient Korean alphabet. The meaning of the inscription is unknown.
 Fig. 3. Serpentine.
 Fig. 4. Green serpentine. Very beautiful.
 Fig. 5. Steatite. A little broken.
 Fig. 6. Steatite. Locality of discovery,—Province of Yamato.
 Fig. 7. Serpentine.

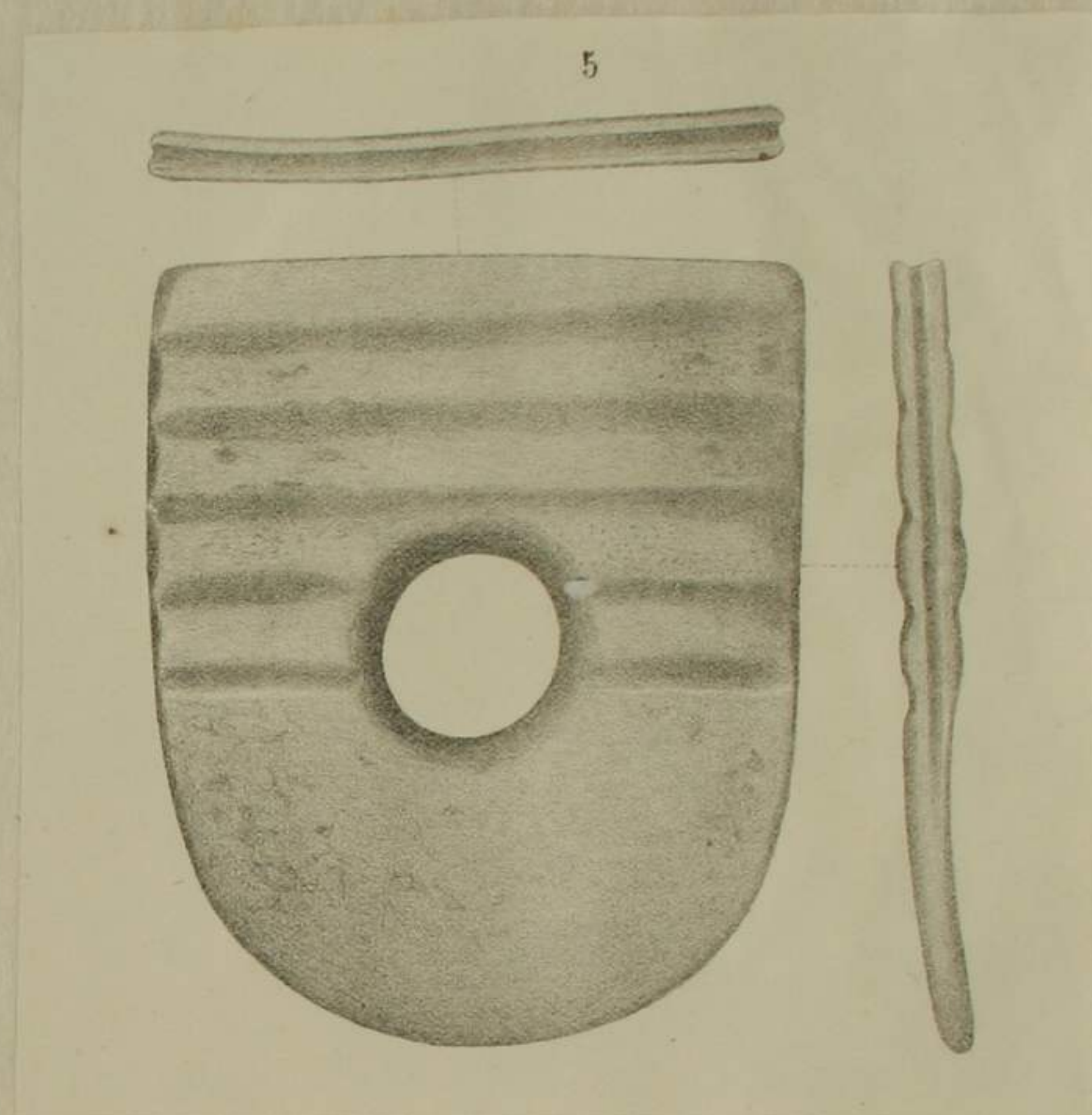


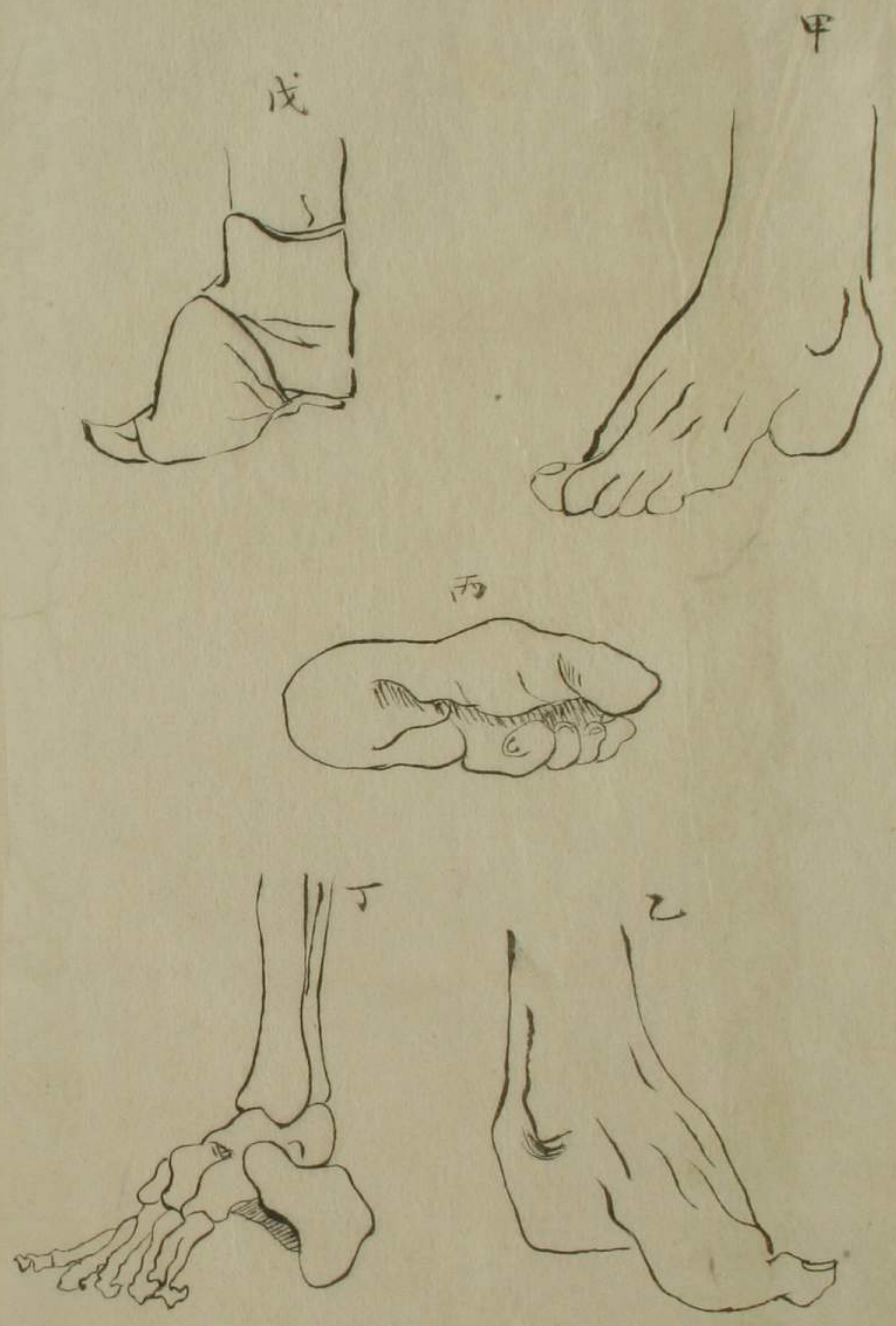
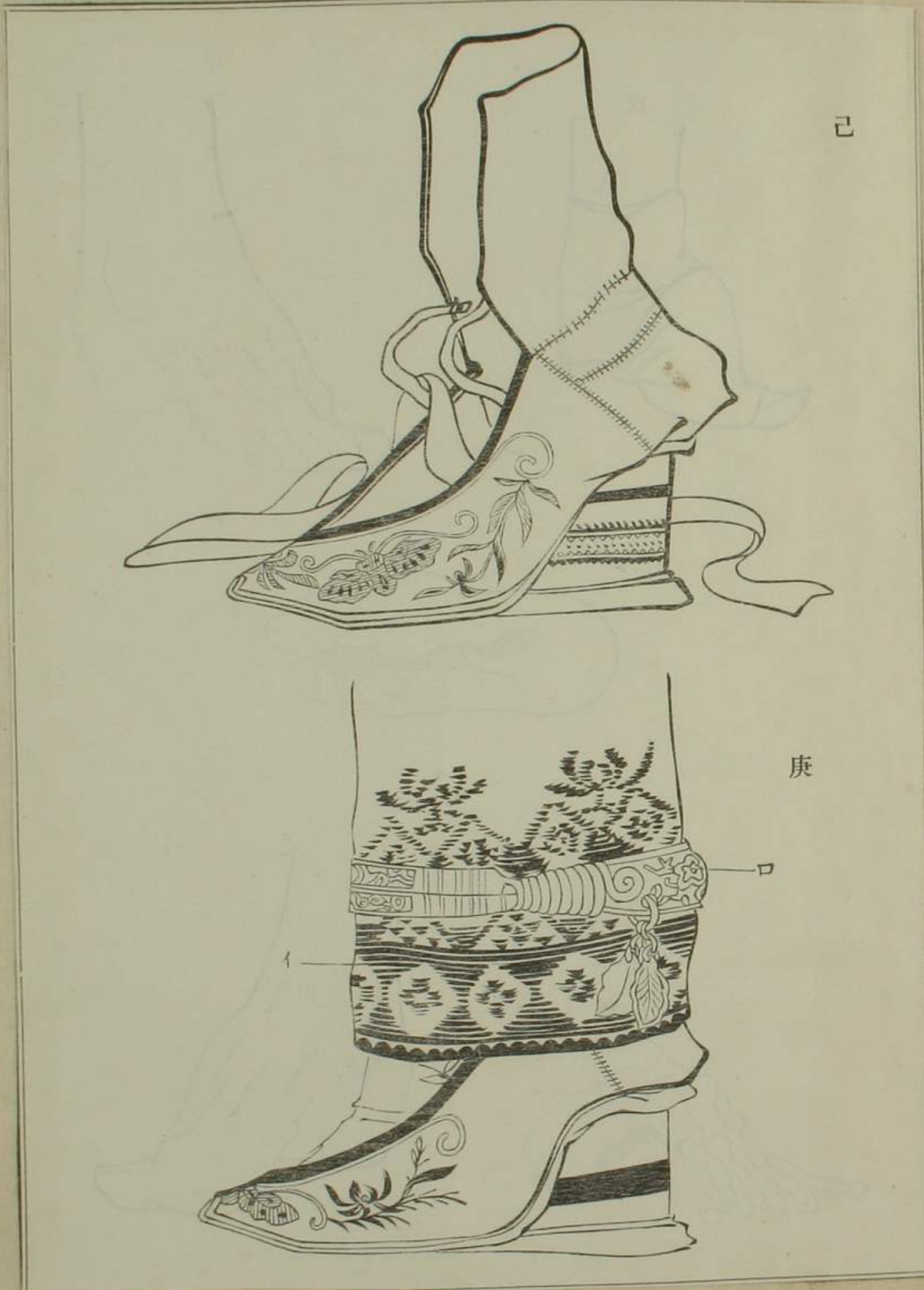
KITSUNE-NO-KUWA OR FOX-HOES*.

Note.—All figures on this plate are drawn one half natural size.

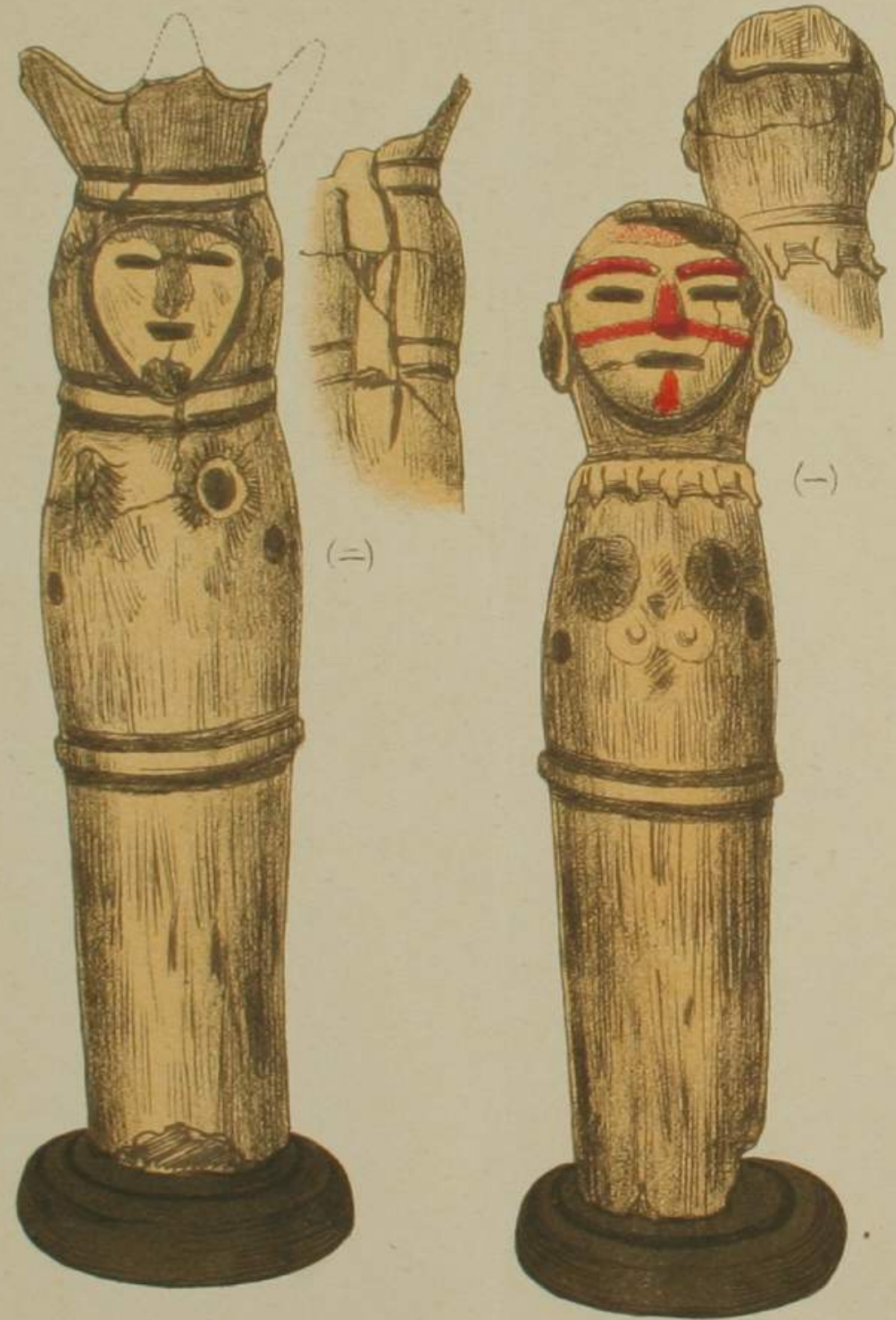
- Fig. 1. Thin throughout, but thicker at the upper than at the lower extremity. Slightly convex toward the less ornamented side. An elliptical hole near the middle. Both sides ornamented nearly alike, with the exception of a perpendicular groove on one of them and the omission of finer horizontal lines on the other. Chlorite-schist. (*Ma.*)
- Fig. 2. Similar to Fig. 1, with slight difference in ornamentation. Broken. Chlorite-schist.
- Fig. 3. Similar to Fig. 1. Smaller but with hole large in proportion. The upper portion sloping to one side. Ornamentation simple and only on one side. Jasper. Locality of discovery,—Toimura in Yamato.
- Fig. 4. Resembling the above type in general but differing in detail; hence classed here as a species of "*Kitsuneno-kuwa.*" A groove runs along the edge of the three sides; the corners are rounded off and the hole is round. Talc.
- Fig. 5. Similar to Fig. 4, but wider at the top and semi-circular at the bottom. Tufa.

* The origin of the name "*Kitsune no kuwa*" is explained thus:—At the time of its first discovery this implement was found in the earth dug up by foxes from an ancient tomb. It was, therefore, naturally supposed that the foxes had used it in digging, just as objects found after thunder storms—such as Raifu, Raitsui, &c.—received the affix "*Rai,*" i.e.—*Thunder*, as if they had been hurled from the skies.





常陸龍ヶ崎見埴輪土偶



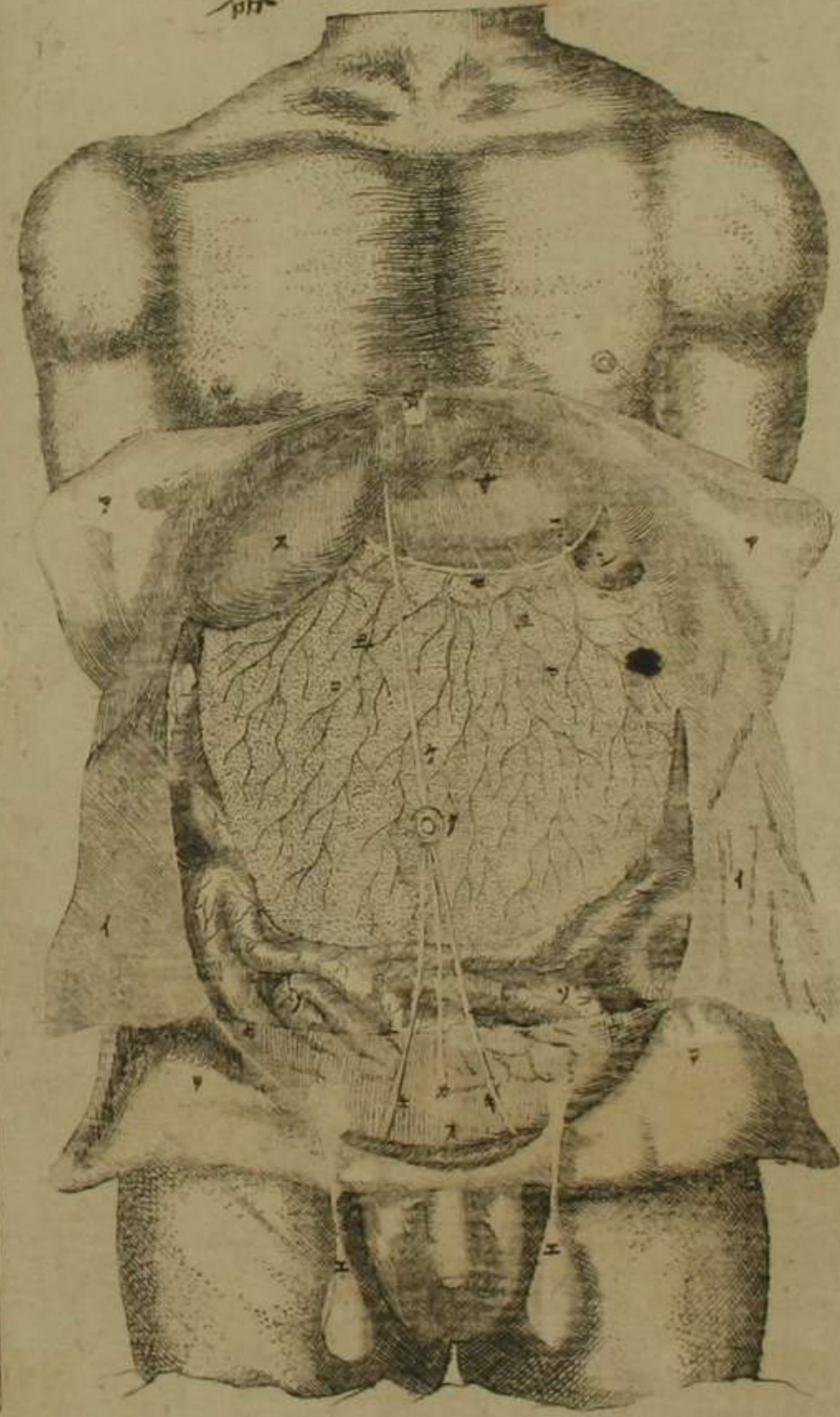
人類学教室所蔵

(圖解) 圖に示す甲は、豫備期なる第二指以下の各指を蹠面に屈曲せし状、乙丙は、本期なる全く蹠骨屈曲の變形を成就せし状、丁は、其の變形せる骨格の狀にして、共に在臺北天然足會所藏の標本に據り、戊は、變形せる足を布片にて緊縛せる狀、己は、變形せる足に穿つ鞋の形、庚は之を穿てる全體とし、其のイの部分の色襪、ロの部分は脚環である、共に臺灣にある閩人の現狀に就きての實寫に據る、

外衛諸物



歇
腹內諸器



温故而知新
 昭々不昧る本心
 の身を以て
 其神の足跡を凡



二宮尊徳先生畫像之記

嘉永六年癸丑先生向日光行神領興復之業寓櫻
 秀坊是歲九月先人清忠與同志七名行謁之親受
 其教仰瞻之則鳳眼清秀六府圓滿渾乎有神光先
 人乃窺戶而描寫其真影時先生歲六十七實在聖
 德大成之日也翌年甲寅吾入其門安政丙辰先生
 沒歲七十矣後吾過江都囑画伯春木南溪彩繪之
 遂印行領社負而竊憾不得其真吾憂之久矣去年
 吾罹病餘生不可知憂念彌切於是托名手葛岡年
 定原先人遺墨考吾所默識致精識更繪之画成而
 瞻仰之其威儀神采彷彿如先生現前孔德之容恍
 惚得精中精則為不易之正本以一幅呈今孫尊親
 君一幅納本社一幅藏家仍復印行領社負世之疑
 以之類庶幾自今誠其蹟乎嗚乎先生沒後方四十
 九年今而及是舉非有先人偉勳誰克能之仍書所
 由為之記

明治三十七年十一月

門人岡田良一郎藤原清行謹識



大儀時之津西行爲七危虎千東の零了局

あふちの物ん

持取あけつら

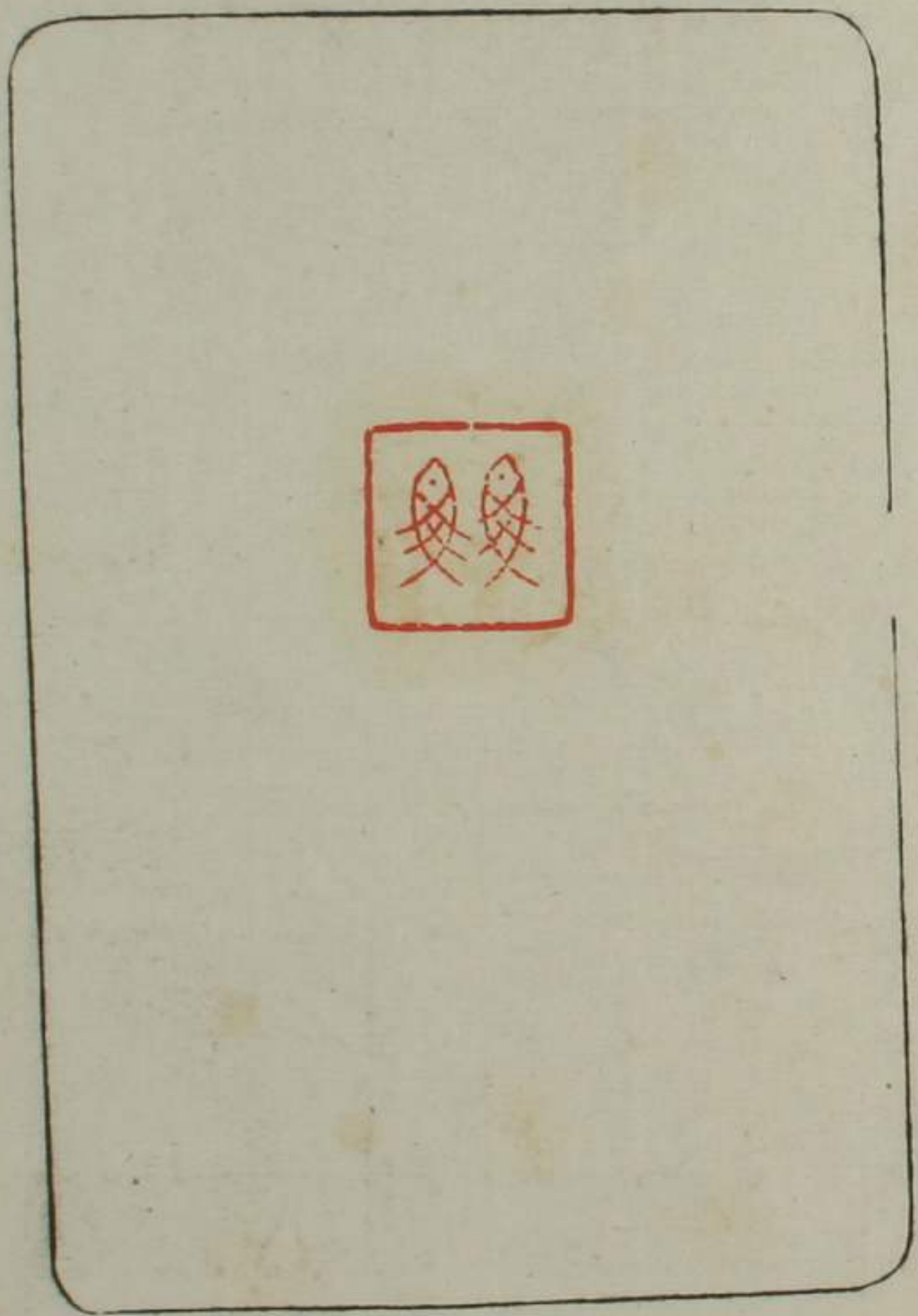
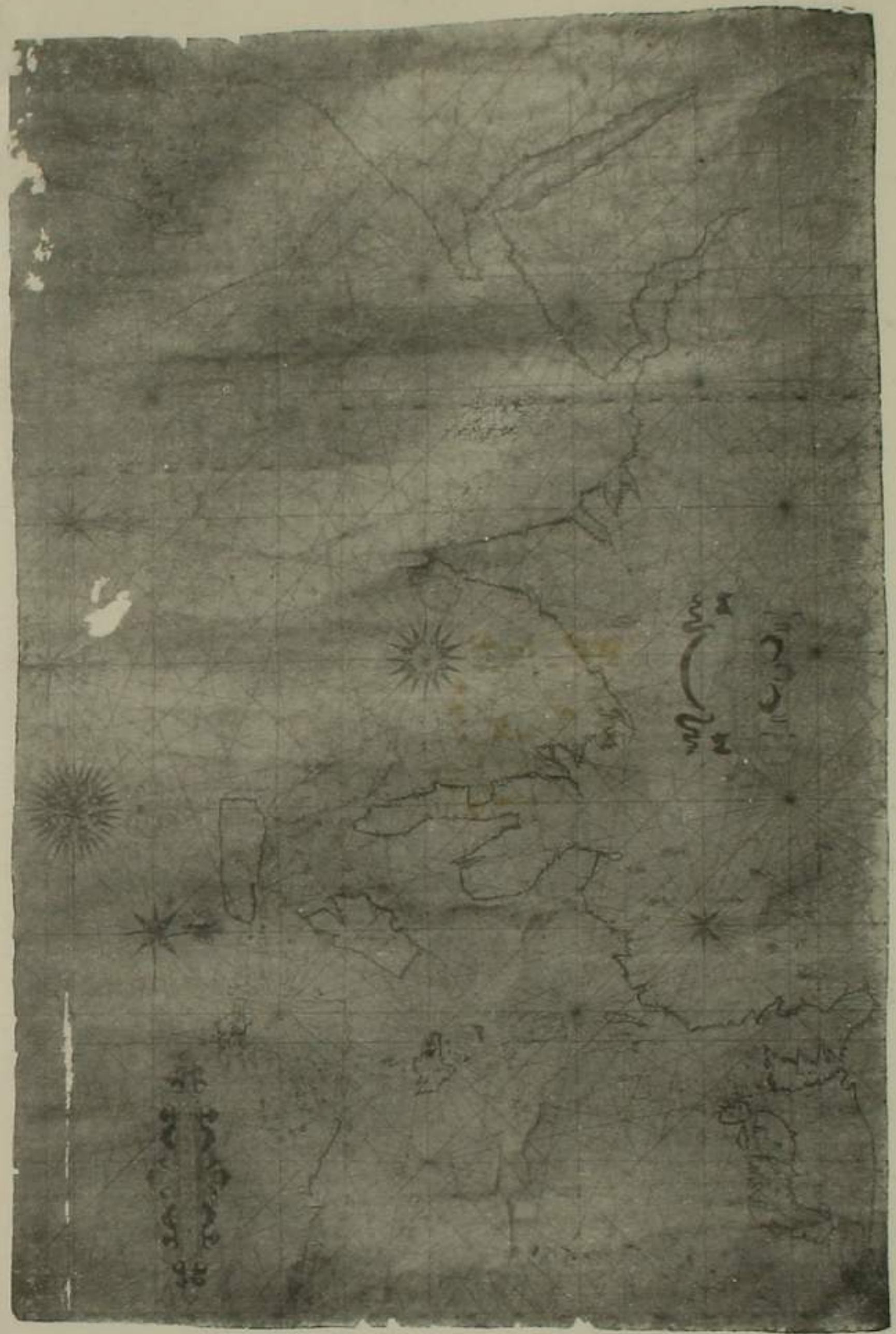
送りぬる

つゆりよる

天國の虎

十三年

協和皮局製古圖



協和皮局製古圖

絳盒石錄

春城先生正

丁未四月鑄于陶冶雕蟲窟

藏六齋



